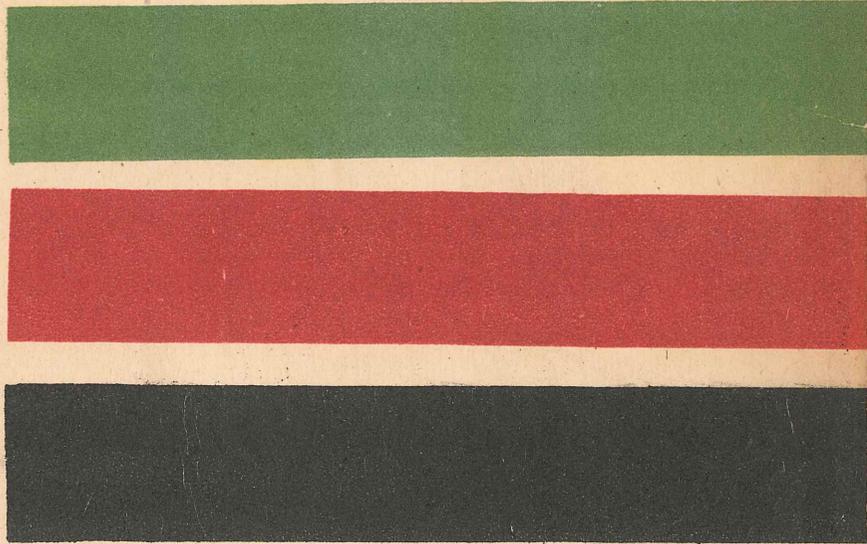


# 明星



25周年記念



# 明星

—(創立二十五周年紀念)—



明星學園文藝部編

明星 目次

先生が …… すのはらはるみ 5

誕生ものがたり …… 照井猪一郎 6

とっくりばち …… 小西久美子 10  
 空中轉回 …… 橋昭多 10  
 木でかきねが …… 河角仁子 11

明星の思出 …… 坪田讓治 11

詩 三篇 …… 武者小路實篤 12

雷 …… 霜田光一 14  
 さぶね …… 古田滿智子 15  
 海 …… 海津實 15  
 統計及統計學の利用について …… 鈴木諒一 15  
 ビル …… 若山和子 16  
 田植 …… 桃井久義 17

思 い 出 …… 青木ふみ子 18

大 王 埼 …… 武田祐吉 19

「明星」へのお便り …… 武者宗一郎 20  
 明星のころ …… 戸坂嵐子 21

丘の上の家

北 京 …… 水野和子 22  
 疎開の思出 …… 田村修一 22  
 台湾の思出 …… 田中路子 23  
 丘の上の家 …… 木村妙子 24  
 杉の木の下 …… 山根晴子 26

夢のある學校

古谷綱武 24

そ の 人

きみちやん …… 水谷恭子 27  
 りんご …… 若山和子 28  
 おじさん …… 三浦誠一 28  
 水底の眼鏡 …… 五十嵐肇 29  
 父の病氣 …… 藤井裕二 29  
 質屋のウインドウ …… 橘昭多 30  
 おつかい …… 古木瑞子 30

詩 の 教室

高柳 和子・北野 順子・高木 久子・北川 忠明・留崎 洋介  
 倉本 節子・深川美奈子・山崎 博子・吉村 植夫・並河惠美子  
 山下 和子・澤 正樹・岡田 徹・高田 惠子・近藤 賢

川上 龍夫・井上 良吉・稻垣 順紀・村越丕沙子・中村 耕子  
 石井 瞳・金澤 武・内田多企子・岩崎 桃子・伊端 晴子  
 徳丸貴志子・三輪 孝光

書 白 評 中川日出男 藤原 弘雄・竹澤七百子

正しい説をつらぬく教育 松本 正雄

断片録 片山 敏彦

岩手便り 須川 力  
 日記から 櫻木 瑞生・高田佳代子・小倉 義弘・小田原一男・明地 宣子  
 うちだしんいち・たかはしあき子

朝の電車

夜明 佐藤 艸二  
 愛猫「白」 山本有恒  
 今日 あきれい子  
 キテイ台風の夜 澤山和子  
 朝の電車 赤司田鶴子  
 松の木 塚田芙美子  
 こおろぎ 原田 勳  
 でんでんむし 福富秋生  
 ぶど 龜田壽夫  
 秋 江森盛夫

僕の奥の細道

家猫 岡田美禰  
 夏みかん 市田恭子  
 なつの海 かみのかわまさる  
 よ影の歌 日高昭子  
 夜の田舎道 山口政子  
 さがみこ 鴨居和雄  
 さくらんぼ 中澤久美子  
 夜中 大熊金雄  
 くりくり 田中公子  
 きんぎょ たちばなときわ  
 油絵 追水祥子  
 ある初夏の午後 佐藤 嵩子  
 愛犬をしのびて 小林 堅志  
 キテイ台風 細谷 浩  
 まつばぼたん 櫻井佳子  
 窓か 林 隆春  
 今日 満田淳子  
 終戦四年を迎えて 進知子・浮田多美子  
 詩二題 浅生 享  
 僕の郷里 飯倉國臣  
 はやまにいつて 佐藤 博子  
 いなか 佐藤 ゆきえ  
 福澤紀行 西野 智子  
 輕井澤紀行

僕の奥の細道 : : : : : 藤井孝一 55

心の風景

さびしさ	山内保	57
Aさんのこと	古木かをる	57
私の心	市田恭子	59
もくせい	水谷浩子	60
仕事	高見澤隆子	60
偉大な黙示	小林稚枝	61
時見草	吉野佐千子	61
マ	高見澤隆子	61
あ	濱田眞男	62
巨人のサインボール	友岡禎子	62
夢	宇津木琢弘	63
羽	芦田洋子	64
夜	西村緋紗子	65
空	猪狩清子	66

短歌

佐藤由喜子・高田 静子・吉野佐千子・矢野 妙子・佐藤 容子  
堀尾哲一郎・好野 節子・田中 敏子・永島 純代・栗原シゲ子  
坂本 典子・渡邊 功

二十五周年に寄せて 60  
盗 難 : : : : : 佐々木文枝 64  
劇評「吹雪は光る」をみて : : : : : 渡邊博司 68  
河角文子 71

私が明星で習ったこと : : : : : 杉山 清 72

露 さかだち : : : : : 猪狩清子 73  
すずき いすず 73

作品と批評

アルバムに寄せて : : : : : 藤井三千代 74  
忘れられぬこと : : : : : 塚田 充 76  
二つの作品について : : : : : 藤 沼 貴 80

明星 萬 歳 : : : : : 越田辰次郎 84

先生と學生とへの希望 : : : : : 舟木 重信 85

學園への信頼 : : : : : 與田 準一 85

二十五周年の回顧 : : : : : 上田八一郎 86

編集委員名簿  
編集後記  
附録 明星學園略年表

表紙 : : : : : 水谷 恭子  
☆ ☆ ☆  
カット : : : : : 古木 薫



先生が あつちむいたり うしろむいたり

まえをむいて

そのところで

なんだかしらないけれども かいているよ

初一 すのはらはるみ

# 誕生ものがたり

照井猪一郎

創立前後のほんの思いで話にすぎない。  
理論でもなし、實際でもなし、明星史でもあるが、創立の人達の息ぶきが、においが、かすかにでも傳えられたら悪文の罪ほろぼしになるであろう。

## 1 呱呱の聲

大正十三年二月二十九日、むさし野はまだふか／＼と冬のとばりの中に眠っていた。

霜柱にふくれ上つた麥畑を、一足一足かみしめるようにきざんで行く四人の一團があつた。一行はぼく／＼の黒土の上をとりつかれたもののようにさぼり歩いた。

畑中の小高い一地點に最後の歩みをとめた一行は、やおらかついで來た一本の標木をうち立てた。「明星學園建設地」……したたるような墨あとがわざわざかに白木のおもてに讀まれた。

彼等はそれをかこんで一せいに大空をふりあおぎ、さて思い深げにまわりの森や林をながめまわした。誰からともなく無言のほゝえみがかわされた。

大海の底のようにしずまりかえつたひと時だつた。ま晝の太陽は眞珠色のスポットをこの謙虚な開拓者たちの上におとした。

輝く日光、すみきつた大氣、ゆたかな土壌、それは彼等の久しく憧れて居た求道の聖地であつた。

池近く富士遠き森の台地―彼等はこの日この地に眞教育の精舎の石づえをすえた。

この四人は明星學園の創立者赤井米吉と照井猪一郎、山本德行、照井げんの全同人で、この時この仕事を授けた育ての親は茶郷基氏というかけの人で

あつた。

大正十三年五月十五日、明星學園開校の式典は入學式を含めて行われた。あいにくの雨を半ぶきの屋根はしのぎかねて、式壇はぬれるにまかされた。参列の子供達の、親達の、來賓の頭から頬をつたつて雫は床をぬらした。でもみんなの顔はかゞやきにあふれていた。

校地は緑にかこまれた一千坪の畑地、校舎といつてもそれは百九坪のほんのバラツクぶしん、集つた児童は一年二年三年の三學級あわせて男女二十一名―これは明星學園發祥の種の起源であつた。

併し將來への計畫は既に構想されていた。一學級の定員を三十名とし、中學校、高等女學校を延長の上におき、男女共學をたて前とした。

## 2 時のうごき

あたかも第一次歐洲戦がおわつて六年、列國は表面に平和を謳歌しながらも内面では戦後の經營にしのぎをけすつて居た。

この偽裝平和の中に日本は一躍五大強國の列に伍し、國際的に押し上げられた。押し上げられただけで何一つ一等國らしいものを持つてはいなかつた。何もかも不足だらけであつた。新興の意氣だけは國內に漲りもしたであつたらうが、一步海の外に出てはその貧困さがひしびしと身にしみたにちがひなかつた。

しかしこれは日本にとつてはよい覺醒とげき勵であつた。藝術といわず、

科學といわず、思想といわず、經濟といわず、およそ世界にありとあらゆる文化は、水準の高い國々から大陸をこえ、大洋をわたつて日本の窪地にさかおとしに流れこんで來た。國民は必死になつて片つばしからこれをのみこもうとあせつた。

因循と姑息を慎重とはきちがえ、常に時代におき去られがちな教育界もこのした氣運と、教育立國の合ひことはにかり立てられてにわかに活氣づいていつた。

とたんに東から西から、あらゆる哲學思想、教育學説が走り雲のようにあわたゞしく去來して實際家達を戸まどいさせた。

いわく—人格教育、道德教育、實驗教育、體驗教育、生活教育、プログラムデスマの教育、勞作教育、勤勞教育、藝術教育、自由教育、合科教育、生活學校、郷土教育、全村教育

いわく—分團教育、プロジェクトメソッド、ダルトンプラン、ウイネツカシステム、ホームシステム

日本はさながら世界に於ける教育の實驗場、教育思潮の見本市の觀があつた。

學者はいそがしかつた。たがいに直輸入の看板のもとに新教育の賣出しに新をきそい、實際家はその指導のもとに之を自分の畑に移植した。

しかしそれらはどこまでも試作の域を出なかつた。地ばんの適否と、栽培の經驗にそつがあつたかして、折角の新教育も後から後からしなびて消えた世間の人もそれはそれつきり一時のはやりものとして忘れて行つた。

やがて「新教育の行くえやいづこ」—世の人々からこの冷やかな輓歌でビリオドをうたれる運命がまつていた。

### 3 わが道をあゆむ

それはそれとして私達も時代の若い教師であつた。このうづまく新思潮の中に自ら求めてけん命に泳いだ。泳ぎながらも、かるく、軽く飛びこみ、わき立つ波にもあそばされてはあつさりとし沈んで行くそこばくの同士を苦々しくながめた。

自らの實體をつかみ、進むべき道をえらび、つくべき彼岸を見つめて精進しなければならぬはずだからである。

めまぐるしい新教育の花ぞのから、この草深いむさし野にわけ入つて來た私達のあの日の姿を人は何と見たであらう。

「あんなところに學校をつくつたつて子供なんかは入るものか。」  
親しい友たちまでがそういつてとめた。電車は東京から三十分おき、驛から徒歩二十分、お天気でも霜どけ道では靴をどろにすいとられる井之頭でもあつた。

しかし子供と學び子供と生きる私達には、そこにいそぐかの不安もなかつた。

個性尊重—自主自立—自由平等

たゞそれだけが私達の上に輝く教育の燈し火であつた。たゞそれだけが明星教育のゆるがぬ基本理念であつた。

その日から學習も訓練もその他の一切の教育活動もこの根源からこんくと流れ、うるおい、しみわたつて行くべきであつた。

森のひとつ屋はせまかつたが子供達の教育の場は廣かつた。とざさぬ窓から子供たちは無限に解放さるべき教育の約束だからである。

學校と家庭と社會—それは子供達の生活環境であつた。両親と先生とちまたの人たち—それは彼等の指導体制であつた。

子供達はつねにこの三次元の中に學び育てばよいのであつた。

### 4 三つの生命

個性尊重の教育

はなやかなりし新教育時代といつても、それはほんの都會地の少數に試みられたもので、日本の大勢から見ればほんの雨夜の星であつた。

一般にはまだ大正教育の老衰期にあつて、教育の大勢は技術の末梢に溺れていてた。

すぐれた教師というのは授業と入試準備のうまい先生のこと、うまい授業というのはきめられた教材の分量を四十五分の一時限内にはめこみ、たく

みな演技で器用にまとめ上げられることをいい、參觀人をアツといわせ子供達を五里霧中にさまよわせることをさしたものであつた。

それはすべて子供のためのように見えてその實先生自身の満足のためのものであつた。

子供達や両親のねがいは、大して役にもたぬ知識のかけらを少しでも多くつめこんでもらい、それをいつどこでも必要に応じてとり出せるように馴らしてもらふことであつた。教師のいとなみはたゞそれだけに結びついていた。

教育は常に教師の一方的なおもわくで行われ、授業は相手の個性を無視した十把ひとからげの一齋とり扱ひであつた。

こうした技術をいやが上にもみがき上げようとする授業の研究會は頻繁に各所に行われたが、教育の本質をきわめるための研究會はどこにも見られなかつた。

私達はまづこうした教育の世界に見きりをつけ、ことごとく之を非難した。子供達はそれ／＼の個性に生きてゐる。それが理由なく傷けたり歪められたりしたのではその子の正しい成長はない。

教育の原則はまづこの個性を充分に伸ばしてやるところに終始する。一人一人の個性に即して教育の方法が工夫され施されなければならない。

それには一學級の児童の数の少ないにこしたことはない。といつて極端に少なければ個人教授と同よう、異質の個性との接觸でみがき合うという條件にかけ、偏向的な發達をするおそれがある。第一、學校というものの意義がなくなる。

ぜひ子供の社會性を陶冶するに必要なだけの集團を成り立たせるだけの人数でありたい。しかもそれが教師の個別指導に適當な限度であつてもほししいし更にまた私立學校であつて見れば月謝の收入も考えなければならぬ。

この三條件の重なりの上に私達の經驗と實情が結んで一學級三十名定員制がうまれた。

小人數定員としたも、もと／＼子供の個性を重視したからのことで、「子供の個性は人權としても人格としても絶体に尊重さるべきものである」とい

う信條は明星教育のそも／＼の出發である。  
自由自立の人たらしめる教育

自分の個性を生かすといふことは人間の基本的な權利である。何ものにも迫害さるべきではない。そのかわりこの權利は自分の力で之を守り之を防ぎ他に依存することから起る不安と危険に乗ぜられないよう修練をつまねばならぬ。

子供の自主性を重んじ、自立的な生活態度を骨のすいからうえつけるために學習も他律主義をすて、自律的自學自習の方針をとつた。

自信に満ちた強い生活態度はこの自主性によつて支えられ、創意、發見の學習態度は、自立の精神に基く自律學習の中に確立する。

教科書に大はげな自由進度を許し、一人一人の能力に應じて指導案に手加減を加え、一學級をいくつかのグループにわけて、協同の學習や個別指導の徹底をはかつた。

時間も時間割も彼等の學習の實態に應じて適當に伸縮したからべルは朝の始りと歸りの合圖だけにとどめた。

子供達の「學ぶためにする生活」でなく、「生活するために學ぶ」學習がはじまつた。どれもこれも力かぎり根かぎりに仕事とつくみ、いつも明るくピチ／＼とはり切つていた。

自分で仕事のプランをたて自分で辭書をくり、參考書をさがし、土をほり肥やしをくんだ。

こうして子供達は自分の力で自分の計畫をすゝめて行く間に當然ゆきづまつては教師に救いを求めに来る。

教師は之に對しては多くの場合好意にみちた冷淡を以て迎えた。

必要があればたゞほんの僅かの鍵と、助言と、温い激勵を與えるだけだつた。子供達はへたばるまで自分の力を出しきらねば他の助けをうける資格はなかつた。

彼等同志の協力はこゝに自然と芽をふいた。協同生活に不可欠な協力はそこから育つて行つた。協同研究は彼等の不退轉の構えにそなえての固いスクラムであつた。

自主自立の生活態度は孤立排他を少しも意味してはいない。自分をあらしめるためには他をあらしめなければならぬといふことをかくして彼等はたやすく學びとつた。

#### 自由と平等の教育

人はだれでも自由であり平等でなければならぬといふことは子供達の上にも無條件であつてはまる。しかしその頃の社會にも家庭にも學校にも、子供の世界はせまかつた。

子供の行くところ、そこにはきまつてかす／＼のめんどうが待つていた。一にも二にも子供だから―子供は―子供のくせに―子供なんか―であつた。家庭では子供は兩親のままになる鐘愛の私有物であつた。學校ではモノシリにする大切な預り物であつた。社會では大人の邪魔になる目のはなせないわんぱく者であつた。

そこでは日本の子供はみんな卑屈でいじけて居た。

家庭では親をだますに最も上手であつたし、學校では先生の顔色を讀みとるに誰よりも敏感であつたし、市井の巷では大人の目をさけてどこにでも彼等の秘密をもつた。

彼等が身につけているものといつては、その言葉づかいなり態度なりを、それにはまるよう二重三重に使いわけることだつた。すべては彼等から無意識の間に自由と平等をとり上げた家庭と學校と社會の責任であつた。

私達は何よりもまづ先生と子供達の間に深められている溝をうめることにつとめた。

滑稽な威嚴や、慙むべき偽善や、笑止千萬な優越感のキモノを一枚一枚とぬぎすてた。

むさし野の草原の中に赤裸の大人と子供が、いさゝかの恥らいもなく、手とり合つてバツタのようにはねくりかえつた。

もはや憚る何ものもなかつた。お互は自由で平等で何一つくつたくもなかつた。この原始に出發した、たくまざる素朴と親愛の學風は、今も學園のすみずみに香り高くみちみちてはいないであらうか。

上級下級の差別もあるはずはなかつた。三人の教師は三つの學級を共同經

營し、子供達は學習も生活も常に機會均等であつた。

子供達はもはやこましくくれた都會兒でも、貴族くさい坊つちやんでもない、全く土からはい出した知性高い自然兒であつた。

やゝこしい言葉のつかいわけや、手のこんだ行儀作法などはいつのまにか忘れた。というよりもそれらのわづらいからぬげでいた。兩親たちは之を學校のせいだと歎息した。

子供達同士が平等であり、子供と先生が平等であるように、先生同志もまた平等であつた。學校と家庭―教師と兩親の距離がなくなつて、家族達は機會さえあれば學校に來ては子供や教師と共に學び共に生活した。明星學園は家族學校であつた。

學級の行事はまわり當番制だから級長も副級長も必要はなかつた。しかし當番が級のリーダーとして忠實にその責任をはたすためには、全員の好意と支持をうくべきであつた。

學習は一人一人が要求された條件にかなえばフルなのだから判定による成績の順位などはいらなかつた。ただAのOとBのOとの相違を教師がしつてるだけでよかつた。

修業式はあつても優等も落第もない。運動會には賞品も優勝旗もない。奉仕はむくい目的でないから、特更に表彰する規定もないかわりに、子供をゆううつにするような罰則もなかつた。この學園を象徴するものといつては帽章の外には制服もなかつた。

#### 5 愛とおそれと

私達は限りなく自由を愛した。しかしその言葉を簡單にまるのみにされることを極度におそれた。自由は個人の心理的ながまゝを許すことではなかつた。私達は慎重な用意のもとに舊いかせからひとまづ子供達をとき放したのだつた。だがそれには子供達との間に深い理解ときびしい約束がうらづけられていた。

自らの力で自らを守る自主のよろこびをえた彼等は、惜みなくその力をもちよつて友達と助けあわなければならなかつた。従つて他人の自由を無視し、集團の秩序を亂すようなことをしては、それはそのまゝ、自分の自由性の

喪失であつた。

彼等は刻々におこる生活のめんどろをなくすために、つきつぎに新しい約束をつくらなければならなかつた。

當然、この約束に忠誠なものは信頼され、ルーズなものは非難された。こうした彼等の創設した新しい約束は強い力を以て彼等の社會を支配した。それは大人のそれよりも遙かに實踐的で、新鮮で、活潑なものであつた。

「あーらあら。だれかさんがあーらら」

この合唱ほど彼等にとつて手きびしい警告はなかつた。こうして私達は彼等の自由を新らしい明るい世界に導き入れた。こゝで私達はあやまれたる自由教育と永遠のわかれをつけた。

自主自立は人の意志を強く鍛える。個性尊重は人権不犯の原則で、正しい人格はこれに根ざす。自由平等は人間の生活を明朗にし、人類に永遠の平和を與える。

「強く——正しく——期らかに——」この明星の教育語は永遠に愛誦されてゐる。

## 6 あとがき

今日明星學園の兒童生徒は小、中、高の三部を合せて約一千名、之を收容する校舎の建坪一二〇〇坪、校地六五〇〇坪、日増しにその狭さをかこつてゐる。

既に一八〇〇名の卒業生を社會に送り出し、四十名の職員の中には母校の教壇に立つて後輩の指導にあたつてゐる卒業生のいくたりかもある。初等部に入つて來る卒業生の子女も年毎にまして來るのを見ると、今更のように迎り來つた二十六年の時空の流れがふりかえられる。

それにつけても創立の人赤井先生は、敗戦の禍をかつて心ならずも自ら築いた教壇を去らねばならなかつたという事は傷心のきわみである。

しかしいつの日にか先生の誠實は必ず學園への復歸を招來してくれるにちがいない。教壇を清めて先生を迎える日を待とうではないか。

とつくりばち

中一 小西久美子

板にコロソとある とつくりばち、  
ビルマの水がめみたいだ。  
中をのぞくと 青いはちの子が、  
むくりと時々うごく。

まだころがり出ないで  
とつくりばちは 板についている。

空 中 轉 回

中一 橋 昭 多

「昭多して見ろ」と先生の聲  
僕の胸はドキンとおどつた  
僕は元氣をふるい起して  
助走に移つた。

スプリングだ

「エイッ」とばかり足をけつた  
体はこころよく浮いた

青い空

白い雲

緑の林

黒い土

ちらちらつとまわつた

とたんにマットに足が着いた

僕の眼底では

天と地が

もう一度ゆつくりまわつた

# 明星の思出

坪田讓治

長男が明星中學に入學したのは、今から二十年も昔になるようであり、そして三年すつおいて、次男と三男がつづいて、御厄介になりました。恐らく十年くらいの間、子供達がつづいて、明星學園に通つてゐたワケであります。そこで、彼等に見れば、色々澤山の思出があることと思ひますが、私が傳を聞いたその一二を書いて見ることに致します。

いつの頃ですか、學校の近くの森の中に永く人の住んでいない家がありました。のぞくと、中は本や道具や、如何にも人がいるらしい構へでありながら、しかも人が居りません。これは中學生の好氣心と呼び起さずにはいけません。これは中學生の好氣心。ドロボウの家かも知れない。或は何か秘密を持つてる家かも知れない。そこで、或時、明星中學生何人かが、その家を探偵に行きました。探偵と言つても、外から大聲でどなつたり、遠くから石を投げつけて見るくらいでしたが、然しその石でガラスが何枚かこわされ、家主が學校へ抗議して來ました。素より惡漢の住居でも何でもないの、探險隊員はガラス代五圓すつ罰金をとられました。その勇敢な隊員の一人に私のところの長男が居りました。

次は、井之頭公園の鯉ですが、これをとりたいといふのは、恐らく或時代の明星中學生の大部分が抱いていた野望ではなかつたかと思ひます。そしてその冒険は極地探險か、アルプス登山かのやうに、毎年勇士によつて企てられたようでありませぬ。然しその成功した話を、私は遂に聞きませんでした。次男がその隊員の一人で白晝鯉を釣り上げ、それをレイ式に持ち逃げしようと思つたのは、あれはもう十數年の昔になりました。隊員は何人くらい

でしたか。とにかく、大鯉を釣り上げ、それを胸にシツカリ抱き上げ、ラグビーの選手がゴールに獨走するように走つたワケです。しかも、何人かにレイして走つたと言ひます。素より後から監督が監視人かが、大聲で叱りながら追ひかけていたやうであります。スリル満點といふうのでしようか。見ものだつたといふことです。然しレイ何人目かの勇士が力つきて、いや、そんなイタズラをしては悪いと思つたのでしようか。土の上ではばれる鯉を池の中に投げこんで逃げたといふ話でありました。見物人も騒ぎ立て、中には面白がつて大に力づける人もあつたやうですが、何しろ、大分昔の話で、そういうことも、ユウモラスな事件として許されていた時代のことでもあります。三男のことでありますが、これは時代が現在に近く、傳えることもないやうであります。唯だ、一年生の頃、友達と言ひますのに、「このカバン、上水に投げこんでもいいか。」というの、彼の學校カバンなのですが、男として、それは困る言いかねたのでしよう。「投げられるものなら、投げ

## 初一 河角仁子

木でかきねがしてある。  
上のほうは おひさまがあたつていて  
うすみどりをしてる。  
下のほうは かげになつて  
こみどりを  
してゐる。  
あさがおのしおれてゐるのがでいてる。

て見る。」といはつたやうです。すると、相手も相當の勇士らしく、ドブンとはかりカバンを投げこんでしまいました。こういう場合、どう處置したらいいものでしようか。齡六十に達しまだ私には解らないのですが、とにかく彼は消然として歸つて來ました。今からそれでも十四五年も昔のことでもあります。三人とも右のやうな勇士でありましたが、然し上田先生その他諸先生の御指導によりとにかく大過なく今迄は過して參りました。自分の子供のことはかり書き申譯ありませんが、いづれも自由にしてカツ達なる明星學風に對する一人の父の忘れ難い思出なのであります。

詩 三 篇

武者 小路 實 篤

畫をかく喜び

私は貝殻をかく

私がかくさつても

彼等はくさらない

友達が

自分のつくつた

トマトを持つて来た

青いのや赤いのを

かく私は別に赤面しないのに

歌を忘れたカナリヤ

歌を忘れたカナリヤは

歌をうたひたいと思つて

いろいろ努力をして見たが

どうしても歌をうたへない

處がある夜

カナリヤはよくねた

美しい朝が来た

カナリヤはひとりでに

大きな聲を出して

歌を唄ひ出した

あゝ私は歌を忘れてゐたのだわ

そう自分で氣がついたのは

餘程あとだつた。

かゝれるトマトは

段々赤くなる

私の目が見える間

私の腕が動く間

私は晝をかく

君知るか

晝をかく喜び

私は知つてゐる

晝をかく喜び

自分は仕合せ者だ

自分はよき友を

澤山持つてゐる

その人が生きてゐてくれることを

喜べる人を澤山もつてゐる

自分が生きてゐる事を

喜んでくれる人を澤山もつてゐる。

自分は仕合せものだ。

夏というとき雷がつきものだ。蒸暑い日も暮れようとする頃になつて、西の方に稲光りがするかと思つた中、涼しい風が捲き起されてサツとくる。男性的な雷鳴と共に篠つく雨になる。夕立は夏の景物である。

科學者は自然現象の一つとして雷を見る。ところが少し詳しく見ると雷などというものはわからぬことばかりである。今では誰でも雷は電氣の作用だということを知つてゐる。フランクリンが雷雨の中で風を上げて、雷は電氣であることを確かめたのは余りにも有名である。之は余談だが、フランクリンがあつた時雷鳴に打たれて死ななかつたのは奇蹟的といつてよい位のことなのである。科學者の卵がフランクリンのまねをして雷に向つて風を上げたりしたらとても危険である。雷の落ちる時には、高い木の下や、電線の下に居てはならないことは避雷の常識なのだから。

人間は原子爆弾を作つたり、ストレプトマイシンを作つたりして、科學の進歩を誇るけれども、雷に對しては殆どなすべがない。避雷針というものがあるけれども、その効果は一〇〇%とは云い難く、而も本當の意味で雷を避けるものではない。雷が電氣の作用だということは分つたけれども、どうしてそんな電氣が出来るのかわからぬ。雨や雲の水滴が衝突したり分裂したりする時

に電氣が発生するらしいが、同じ様に分裂しても一方がプラスになつたり、マイナスになつたりするので、現象の本質がよくわからない。そもそも一番大昔に發見された電氣が摩擦電氣なのに、その正体が今もつてわからないのだから、電氣の世の中とはいつても知れたものである。

自然現象としての雷はとても複雑なものだから、完全には理解できないとしても、實驗室内でやる電氣火花はどうだろうか。一定の電極を一定の距離において、同じように電壓をかけても、發生する火花の形は一回毎に違う。一度放電すると電極の表面が汚れるが、それを一々元通りにして實驗するか、又は同じ形の別の新しい電極にしてやつてみても、やはり一々火花の様子が違う。

火花の形というものはちよつと定量的に扱にくいのが、火花の發生する時間をしらべても同じ様なふらつきがある。普通火花間隙にある程度以上の電壓をかければ、その瞬間に火花が起る様に考えられているが、決してそうではない。例えばある火花間隙に三萬ボルトの電壓をかけてみると、第一回には五秒たつてから突然火花が發生し、第二回には一秒、第三回には二秒後という具合である。火花間隙にかける電壓が大きければ、平均として、こういう遅れの時間は短くなるけれどもやはり同じ種類のふらつきがある。

このような現象の起るのは火花放電の時だけではない。例えばガラス板とか氷とかの割れるのも同じである。同じ様な板に同じような力を加えても、割れ方は一々違つてゐる。そして一定の力

をかけたとき、その瞬間に割れるとは限られないで、少し時間がかゝつて割れる。これは一寸氣がつかない人が多いが實際そうである。そしてそのおくれの時間が一定してゐない。薄くて割れそうな氷の上を歩くとき、私達は半ば無意識的に早足になつてヒヤヒヤしながら渡る。「そんなことをしたつて同じことだ、体重でわれる時はいくら早く歩いたつてわけてしまふさ」と言う人があるけれども、本當はそうではない。科學的に考え、現象をよく見ると力がかゝつてから割れ始めるまでに時間がかかるので、氷の例でいうと、超スピードで滑らせれば非常に重いものでも薄氷の上を進み得るのである。

科學に於ては元來一定の原因からは一定の結果が得られるということが、基本的な大法則のように考えられ、その考えに導かれていろいろの發達がなされたけれども、こゝに上げた例のように、きまつた原因から異つた結果の現われることが少なくない。近頃一般人にもすつかり有名になつた原子の世界では、それが寧ろあたりまえのことなのである。ラジウムのような原子がアルファ線といつて、プラスの電氣をもつた粒子を放出することによく知られてゐる。しかし一つの原子をもつて來たとき、それが果していつアルファ粒子を放出するのか全くわからない。人智がもつと進歩すれば、わかるのではないかと考へる人もあるだろう。しかし現在の物理學者は、それは永遠にわからないものと考へる多くの證據をもつてゐる。たゞ澤山の原子をもつて來たときに、一定期間に

は統計的に云つて何箇位のアルファ粒子がでると  
いう確率のことだけがわかる。

すべて我々のまわりの物質は原子からできてい  
る。だから原子の一つ一つの性質が確率だけしか  
きまらないとしたら、何もかも不確定になつてし  
まいそである。しかし我々のまわりの現象は殆  
どみな一定の法則に従つて確定的に動いて見え  
る。それは全く統計的平均化のためである。個々  
の人間はいつ死ぬかわからない。しかし日本全体  
では毎日殆ど同じ人数の人間が死んでいる。物質  
を作つている原子の数は非常に多い。例えば一グ  
ラムの水には日本の人口の更に四兆倍もの原子が  
含まれているのだから、個々の原子の運動など全  
く平均化されてしまう。

所でそういう風に平均化されてしまうものがふ  
つうだけれども、前にのべたようなこと、例えば  
雷の放電というようなものでは、平均化が行われ  
にくいのである。何故かという、火花の出来は  
じめは眼に見えない位小さい筈である。そういう  
所では、原子的現象の不確定性が姿をあらわして  
くる。そしてどちらかの向きに火花が発生しはじ  
めると、あとはその方向に急速に火花が發達して  
眼に見えるような大きな火花になる。つまり、原  
子的な小さな世界で起つたことを火花は擴大して  
みせてくれる。ガラスの割れ方についても同じよ  
うなことがいえる。一樣な板に力をかけたら、ど  
こからも割れようがない筈なのに、必ずどこか  
で割れる。これは一旦微小な割目ができた後はそ  
れがかなり急激にのびて行くために、微小なわれ

目の芽ともいうべきものの出来方が、結局のわれ  
方をきめているからである。

雷の話から大分脱線してきた。前には雷の現象  
はわからぬことばかりだといつたけれども、それ  
がわかつたことが一つの進歩であり、その他によ  
く研究されたことも少くない。近頃では雷雨豫報  
などもかなりの的中率で行われるようになったし

さぶね 初四 古田満智子

川にうかんださぶね

すいすいすいとほしつて

さぶねのきようそうはやいね

みんなどうかべたさぶね

とおくの川までながれていくね

海 初四 海津 實

きれいな青い海

空の色がうつっているな

きらきらと銀色の波

ぼくのしらないとおい外國の港でも  
きらきら光つているんだな

も遠くで知ることができる。雷の多い年は豊作だ  
といわれるがそれは雷の放電の時にできるイオン  
が空中の窒素を肥料分に變えるからだと考えられ  
ている。しかしこういうことも因果關係をつきつ  
めるのは中々むずかしい。

統計及び統計學の利用について

六回生 鈴木 木 諒 一

終戦後特に重視される様になつた學問の一つに  
統計學がある。本稿においては統計がどの様な方  
面に使用されるかと云うことを、若干述べて見た  
い。先づ、大きく分けて自然科学方面への應用と  
社會科學方面への應用とに分けることができる。  
自然科学方面への應用も氣象統計等を初めとして  
盛んなようであるが、私は専門が經濟學であるか  
ら、この方面に重點を置いて述べよう。先づ、政  
府の立場から見れば、合理的な經濟政策を實施す  
るためには、所謂カンによる政策でなく、そのと  
きの状態を數字によつて正しく把握することが必  
要である。ところが、そのときどきの状態を正し  
く把握するには統計の利用と云うことが考えられ  
る。例えば、終戦後歴代の政府が、經濟政策の指  
標として掲げた經濟復興計画にしても、漫然と戦  
前の生活水準に戻ると云うだけでは具体的な政策  
が立てられないのである。昭和二十二年に發せ  
られた極東委員會の指令によれば、日本には昭和  
五十九年の生活水準に復歸することが認められて  
いる。それでは、昭和五十九年には、個々の産業

がどの様な状態にあつたか、又國民の生活状態はどの様であつたかを知ることが、復興計画をたてるための先決問題であると云わねばならぬ。又、現在の状態とその頃の状態とがどの様に違つてゐるかを知らなければ、計画を立てることは出来なない。この様に、復興計画を立てる際には、復興を進める際のスタートの状態にゴールの状態とを具体的に知らなければならぬ。それには、石炭が何千萬トン、鐵が何百萬トン生産されたかと云う産業上の統計も必要であるし、家計支出の何割位を飲食費に費すものであるかと云う、消費上の統計も必要である。これ等の統計が完備して始めて、昭和五十九年の生活水準に戻するには、個々の商品の生産量をどの位増加すればよいかと云う結論が生れるのである。

以上は長期間に亘る復興計画の話であるが、公定價格の決定等にも統計は著しく利用されている。終戦後の新聞紙上を見ると米價の決定について、屢々パリティ指数と云う言葉が用いられてゐる。米の公定價格を決定する際には、従來は原價計算と云つて、米一石を生産するには、どれ丈の費用が要るかと云うところから、米の公定價格を計算してゐた。例えば、米一石の生産に必要な肥料の代金とか豊機具の代金とか種苗代金とか、農家の生計費とか云うものを合計して、その合計額が米一石の代金に等しくする様に公定價格を定めてゐた。併しインフレーション時には、肥料の價格や豊機具の價格はバラバラに騰貴する。インフレーションで多くの人が生活難になるのは、財

の價格があるものは急激に騰貴しあるものは少ししか騰貴しないからである。もし、凡ての商品の價格が同じ割合で騰貴すれば、生計費が騰貴するのと同じ割合で収人も増加するのであるから、生活難に陥る筈はないのである。

そこで、話を元に戻すと米の公定價格を決定する基礎になる肥料や豊機具の價格が、インフレーションの影響を受けてゐるのであるから、これ等の代金を合計して公價を定めたのでは、米の公定

\*\*\*\*\*

ビ ル 中二 若山和子

東京には山がない

ゆつたり雲がやすんでいる山

小さい鳥が飛んでゆく山

私は 田舎へ行つて見たい。

東京の山は 眞四角で

窓がたくさんあつて

噴火もしているが

私はよろこばない

今日 あまり淋しいので

大きなビルの山の窓から

向いの山の窓の

につこり笑つてゐる女の子を

呼んでやつた。

價格そのものがインフレーションの影響を受けることになり、物價の騰貴を抑えようとする公定價格制度の意義が失われてしまふ。そこで、インフレの影響等が無かつた、昭和九十一一年の價格の状態を調べて、この價格状態と終戦後の價格状態とを特殊の計算方法で調和させて算出したのがパリティ方式による米の公價なのである。統計の利用は、この外にも少くない。例えば、労働者にとつて見れば賃銀は高いほどよいわけであるが、そうかと云つて無暗に高い要求も出来ない。そこでインフレの時代には生計費が騰貴して行くからそのために生活が苦しくならない程度に、少くとも生計費の騰貴と同程度に賃銀を引上げてくれて云う要求が起る。この生計費指数も亦、統計學上の大きな問題であつて、どの様な調査をしてどの様な計算をすれば、最も合理的な結果が生れるかと云うことが絶えず論ぜられてゐる。

それでは、わが國の統計機關としてどの様なものがあるかと云うと官廳統計では中央統計委員會と云うものがあつて、こゝで調査の企画が立てられ、各省の統計調査部に指令が出てそれから府縣統計課―市町村統計課の手を経て調査が行われる。以上、統計及び統計學の利用について思つた點を二、三述べたまでであるが、多少でもこの文によつて統計學に關心を持つていたゞければ幸である。

對米戰爭も米軍の本土空襲が、ようやくはげしくなつて來た昭和二十年四月頃、逃げる様に上野驛から北に向つて六時間、福島縣下の工業都市として榮えている郡山に降り立ち、そこからバスで數時間、山の方目指して行くと、終點下守屋と云う一寒村に着く。バス道を逆行すること約十分で私達がやつて來て世話になる所の、家に着いた。それから一ヶ月ばかり経つた或る日の事である。

「久義つあん、今日は家で田植なのつしや、うんだから手傳つてけさい。」  
朝早く母屋の主人が野良姿でやつて來てこういつた。

「はい、すぐ行きます。」  
と、私は着古した長ズボンをはき、ズボンの一番下の所とすねの所を、わらできりつと結び、麥わら帽を被つて母屋へ行つたが、皆な野良に出たらしく、ばあさんと、ぢいさんが、居ろりの側で赤坊のお守りをして居るだけだつた。

「もう皆出たのですか。」  
と分りきつた事を聞くと、ばあさんは、  
「あゝ、もはや野良さ出たすと、にしも行け。」と云い、皆の行つた所を教えてくれた。聞き終るとすぐに田んぼ道をかけ出した。あつちこちの田では、せつせと田植が始まつている。私が彼等の側を通ると、珍らしそうに見るので、ちよつと極

りが悪かつた。

田んぼに着くと、母屋の主人が、  
「ほう、えらく馬力出して來たな。うんでは植え方を教えて、けつからな。」  
と云つて親切に苗の植方を、教えてくれた。その間に母屋の長男が、田に入つて苗を植える所を、

ホーク型のもので縦横に、眞直に引いていた。その仕事すすむと、私達一行十餘人が田の中に入り、母屋の主人の「始めんべい。」の一聲で、横に列んで植を出した。私の左に居るのは、長男の嫁さんで、右が次男坊である。

嫁さんは見る／＼苗を植えて行く、私も負けんと植えたが、なれぬ仕事なので思うように、はかどらない、どん／＼負けてしまつた。見ると右となりの次男坊は、私の所より二列目前を植えている。これはよい競争相手だとばかりに植えだすと、

彼も氣が附いて馬力を出した。大人達は談笑しながら植えてゆく。私も話したくなつたので、次男坊に話し掛けた。  
「君、みんなずい分早いなあ。」すると彼は  
「大人だぞい。早ええの當り前だん。」  
とにこりともしないので云う。きつと朝早くたたき起されたので、少しひねくれているんだらうと思ひ、私はだまつて植えて行つた。

十時頃、ばあさんが赤坊をおんぶして、お茶菓子を持つて來たので、暫らく休んだ。嫁さんは赤坊に乳を與えるのに忙しい。大人達はお茶もそこに、又田に入つていつた。子供達は休んでいると云われたので、魚取りの好きな次男坊は、先

つきの事は忘れてしまひ

「久義、川さ魚取りさ行くからこう。」

とかけ出した。母屋の主人は、  
「あんまり遠くさ、行くではねえぞ。」と云つたが、次男坊と私は一目散に川に飛んで行つた。川は雨季なのでごつていた。もつとも川の上流には、金山がありそこから流れてくる水もあるんだけれども。

次男坊は川に着くなり、ざぶざぶと川の中に入り、川岸の所にうすくまり何やらごそごそしてゐたと思つたら、突然「取つた、取つたぞ。」と手を上げた。見ると彼の手の中には、四寸ぐらいの山女が握られていた。私も彼にならつて見たが、さつぱり取れないので、川から上つてしまつた。彼も上つた。たつた一匹ぶらさげて、田にもどつて來た私達は、すぐに植を出した。魚は何處かにやつてしまつてもう無くなつていた。大人達は時々大笑いをしたり歌つたりしながら、にぎやかに田植をしてゐる。私もいつの間にか一緒になつて、笑つたりしながら植えていつた。午前中は田三枚植を終り、田んぼの側で晝食となつた。田を見ると今植を終つたばかりの苗が、そよそよと風にゆられて嬉しそうである。田植始めだと云うので赤飯が出た。それも、直經十糎ばかりの握り飯なのである。びつくりしてしまつた私は、それでも一つどうやら食べられたが、彼等は二つべろりと食べて平氣な顔で談笑しているのには、これ又驚いた。

「久義つあん、もつと食べてけさい。田植は腹が

へるからなん。」嫁さんが、又一つ出したのであ  
わてて、

「もう澤山ですよ、これ以上食べたなら、動けなく  
なる。」と云つて逃げてしまつた。

午後は大人達もさすがに、つかれたらしくだま  
つて植えていく、しかし植方はあざやかなもの  
で、左手に苗を握り、親ゆびと、人指ゆびで、二  
三本の苗を分けそれを右手に移し、田に植えて行  
く光景は、まるで手品使い見たいである。私も、  
だんだん來たが、右手を田の中に突込むの  
で指先が變になつてしまつた。暫らくすると、東  
の家の人達が手傳いに來た。自分達の方は、もう  
午前中にすんでしまつたのであろう。



## 思 い

明星學園のお仕事を、十二年も手傳かせて頂い  
て、私は本當に仕合せでございました。その當時  
よりも、今になつて、一しお其の感を深くして居  
ります。一生でも御手傳いし度いと願つて居りま  
したのに、戦争の爲に一家の事情が變り、思いも  
よらぬあわたゞしさに御別れ致しましてから、  
はや五年経つてしまいました。何につけても明星  
がなつかしく、家中で始終思い出話を繰返して居  
ります。今年創立二十五周年と御喜び申上げて  
居りますところへ、何か書く様にと御話を受けま

と大聲を上げて、ずぶずぶ、田の中に入つて來  
た。母屋の主人は、

「やあ。どうも、ありがていこつです。ありが  
とうござります。」と禮を云つた。

援軍が來たので、又一段とにぎやかになつて和  
やかな氣分をかもし出して來た。

夕方日が暮れる頃まで五枚植えてしまつた。  
母屋の主人は

「今日はこれだけで切り上げますだ。」と云い、  
「東の家の人はあ、ありがとうござりました。」  
と云つた。東の家の人は、

「何の、何の。御明日。」と云つて歸つていつた。  
私達も道具をかたずけて、歸り始めた。その頃は

日はとつくり西の山に沈んで、人の顔もおぼろと

## 出 青木ふみ子

した。此頃私には書く事が大變苦勞になりました  
が、明星への限り無い感謝のしるしとして、思い  
つくまゝを断片的に書かせて頂く事に致します。

私が女學部の御手傳いを始めましたのは、昭和  
八年の四月、女學部の第一回生が巢立つた許りの  
時でした。従つて私は、第二回生の皆さんから、  
只今高等學校三年に御在學の方までを知つて居り  
ます。あの頃はまだ至つて小人數で、女子部全員  
が八十名そこ／＼でした。それだけにお互いによ  
く知り合せて、教師と生徒というよりは、年の違

なつていた。が、皆今日一日の事を話合いながら  
ゆつくり歩いて歸るのである。私はすつかりくた  
びれて、話す元氣もなかつた。

「どすたあ。にしゃ、がをつたのけえ。」  
と母屋の主人は云つたが、私はただだまつて笑  
つた。

「なれねえから、がをつたんだべー、家に着いた  
ら、風呂さへんなよ。」と優しく云つてくれた。

日頃あまり親しくなかつた村の人達とも、今日  
一日一緒に働いたお蔭で、都會では味わえぬ良さ

がしみじみ分つた、私は今日の勞働が無意味でな  
かつた事を喜び、又明日への希望に心をときめか  
せながら、風呂に入り母屋へ勇んで行つた。

う友達同志という感じでした。

卒業生の皆さんと私共との間の、楽しい話題の  
一つは「散歩」です。終戦前に女子部に居た人で  
なければあの「散歩」の妙味を理解出来ないで  
しよう。今御在學の生徒さんにこの話をお聞かせ  
するのはお氣の毒にも思いますが、書かないでは  
居られませんか。十年位前まで、正門を出て今の高等  
學部へ行く道の左右はまだ一面の草原や雑木林で  
した。春はすみれや木瓜が咲き、ところ／＼に金  
蘭や銀蘭（今は見ることも出来なくなりましたが）  
が可憐な姿を見せました。秋は草ひばりの聲が風  
の音の様に満ち、りんどうが幾つもの花を着けた  
頭を重そうにもたげました。春は、新學年の動搖  
がやゝをさまつた頃にどのクラスからともなく、

散歩のおねだりが始まるのでした。いつもの様に教科書を持つて教室の方へ行くのを途中に待つて居て、「先生、お散歩」「ね、ね、」とせがみます。「さあ」と一應は言つては見ますが、こちらも堪らなく行きたくなつてつい首を縦に振るのでした。林に分け入つたり、草原に坐つたり、上水のふちを歩いたり、心ゆく許り楽しんでました。各クラスの散歩の同伴をして、一日中余り授業をしなかつた日には、流石に一寸氣がとがめる

思いもしました。今となつて振返つて見ますと、明星の散歩は私の生涯にとつて、ワーズワスの「水仙」にも等しい祝福の思出になつて居ります。あの折にふれた自然のいぶきと皆さんの心とは渾然と無形の詩になつて、いつも私の心の奥深い所を占めて居りますから。明星生活のもう一つの楽しい思出は、週三回の會食でした。各學年が交代で調理いたしました。一年から割烹があるというのが明星の一年生の詩

## 大王崎

吉祐田 武

まぜの風強くなり來ぬ黒潮のうなりに乗りて大きく揺れつわが船は志摩の「くろしほ」沖中より難船を曳きて磯邊に向ふ  
天つ風烈しく來り岩の上に鹽を吹つけつ白きあはしほ  
潮曇りして海は騒げり黒潮に乗りておし切る沖のなごろを  
黒潮のうねりに乗りて大きく大王崎をかはしたりけり  
白雲の大王崎の一つ松四方の荒海の潮の真中に  
はろばろし天つ水影のただなかに大王崎の一つ松見ゆ  
咲き立つる浪の穂の上を行く船や舷側を撃つ浪もやらら

りでした。専任の家事の先生を迎へる迄三年間程私が皆さんと御一緒に割烹を致しました。お料理の種が盡きて随分苦勞致しました。皆さんはお菓子作りが何より好きでした。其頃、眞白な御飯にオムレツやカツレツのお菜、それにお菓子を用意して、一食の費用が十五錢から二十錢だつたと言つても、此頃の生徒さんには夢のお話の様に聞えるでしょう。中學部や初等部の先生からよく御注

文があつて、御馳走をおかもちに入れたり、お盆に載せたりして、エプロン姿の二三人がお届にきました。中等部からは、今は亡くなりましたが、あの生きながら佛様のやうに圓滿だつた「中學のおぢいさん」がよく受取りに参りました。一年生が初めて御馳走を作る日の、割烹室も割れそうなの歡聲と混雜の中にもう一度入つて見たい氣が致します。

初めの頃の職員室もごく小人數で、女學部の専任は金子先生、佐々木先生と私位なもの、澁谷先生が私より二年近くおくれて御就任になりました。中學部女學部かけもちの、吉田先生、多湖先生、杉山先生、岩瀬先生、越智先生などの御新入毎に、圓卓やストゥのまわりに、赤井先生を中心にして、氣持のよい座談がはすみました。其の折々の社會現象や、美術、音楽などに就いての、型にはまらない自由な批判や感想でした。職員室の話題のよさが、絶えず私を啓發し、明星の一員であることに誇りを感じさせました。こうして書いて居りますと、先生方お一人々々のお聲が聞えて参ります。

職員室と言へば、大抵の學校では生徒さんに敬遠される様ですが、明星ではおよそ其の反對でした。十一月の末に、教室よりも一足お先にストゥに火が入りますと、休み時間毎にあたりに来る生徒の群で室が一杯になるのでしたし、卒業式前の二三日、巢立ちを控えたひよこさん連の羽目を外したおしやべりや、「何か書いて下さい」のおねだりで、それは／＼賑やかなことでした。終戦後になつて急に民主化とか言つてさわいである學校に、明星の初めからのこの風景を見せて上げたかと思ひます。

「あの頃はよく喧嘩したわね。」これも卒業生の皆さんの言葉です。どのクラスも、三年位まで、盛に喧嘩したものでした。なれないうちは、どうもこのいざこざが氣にかゝつてなりませんでした。十二年も居るうちに、赤井先生の「ほつとけ

ばい、自然に解決がつく、四年の夏休み過ぎには自然に落着く。」という御診断が、成程と呑込める様になりました。喧嘩するほど自分を吐露したからこそ、裏表の無い、のんびりした中に何か力のある、所謂明星氣風が出来上つたのでしよう。

音楽觀賞、ぶどう液づくり、見學、遠足、運動會、さては戦時の白衣縫いから動員と、思出は限りありませんが、多くの方のお顔やお聲が渦巻く中に、ぼんやり考えにふけり勝ちで、もう書けなかりました。

終りに學園の御隆昌と、先生方、卒業生の皆様  
の御多幸を心の限り御祈り申し上げます。

(二四・八・二〇)

## 『明星』へのお便り

第二回生 武者宗一郎

一向御無沙汰して下さい申譯けありません。明星創立廿五年を迎えられ、苦境を乗越え乗越えて遂に今日の隆盛を見るに至りましたことを心からお慶び申し上げます。その蔭には上田先生はじめ諸先生方の一方ならぬ御努力が私には手にとる様に判るような氣が致しますし、又一方若い後輩の諸君が毎日、元氣に何を考へ何を思ひ何を行いつゝあるのかが見える様にすら思えます。

私共は昭和九年の春に卒業したのですからそれからでも既に十五年、半ズボンをはいてクリク坊主で「人喰川」を渡りはじめてからは廿年も経つて了つたのですが、今の今でもはつきりと頭に

浮べることが出来ます。

私共のクラスは確か廿三人居ました。今英語の先生をして居られる横川(尙)先生も仲間の一人で、彼はクラスの人氣者であつたと同時にスポーツマン又悪戯の指揮官を忠實に勤めました、クラス仲間には勿論大それたことに大先生方の綽名の名付親としても勇名をはせた一人です。吾々クラスの悪戯は相當に組織化され、大規模で所謂〇〇事件と命名されたようなものも大分ありましたし、又其の數に於ては晴雨にも難易にも不拘、連日鬼神の如く出没して先生方を悩ませたもので

吾々は尊嚴おくあたわざる上田先生の額に黒板拭を命中せしめることに成功した最初にして最後のクラスではなかつたでしょうか。今にして想えば申譯ないのですが、當時先生方は全く赦して下さいました。併し私共のやつた悪戯は總て純粹な動機に發し、輕妙明朗なものであつて決して結果が生ずる二次的な影響を自らむような悪質性は毫もなかつたのを披歴せねばなりません。扱いたずら談議になつて了つて申譯ありませんが確かに私共のクラスの大部分の者にとつて、それは生活の一部であつたのです。しかし勉強もよくやりました。それも遊んでゐる振りをし乍らしない仲間間に具合が悪いと言つた有様。スポーツも先生方とテニス、ベースボールを盛んにやり又或ときは、みんなで模型飛行機を放課後に残つて十台近く作り上げ上田先生に夕方立合つて競いて長距離と滞空飛行の競技をしたりしました。

扱明星を出てから更に上級校に進んだ者も、或は實業に就いたものも一体明星で受けた教化をどの様に生かしているかとゆう事は、在學諸君の吾々に對する最大の關心だと思ひます。そしてこの問題はその一人々々によつて異つた態を表現してゐるのでしうけれ共、其處には一貫した「明星精神」が培われてゐるのを感じない者は一人もないと確信します。明星精神の定義を案出しようとしても出て来ませんし、又無意味なこととせう。唯卒業して時間が経てば經つ程何かしら判つて來るものであつて、その個々が土に化すときにはじめてその人の結論が出て來るものであらうと思つています。私個人のことを申しては甚だ恐縮ですが、私は明星を卒業後東京藥專で藥學を専攻し、東北帝大の理學部で化學を専攻し、只今は同大學の金屬材料研究所で分折化學の研究をして居ります。例えば私が今日在るのは明星が自然の中に立ち、自然を眞直ぐな眼心とを以て觀察させるように教化して下さつたからだと感謝して居ります。ペニシリンとゆう放線菌の生産する抗體の研究から端を發し、數萬箇處の世界中の土を集めて、その中から次々に發見されたストレプトマイシン、クロロマイセチンやオーレオマイシン等の一群の研究結果を見ると、人類は病死を絶滅し、各人がその天命を全うする迄生命を保ち得られる様にも思えますし、又一方、抗原の抗體反應や巨大分子の遠隔反應が研究され、遺傳子や染色体の構造なども次第に明らかになり、この先、トレイサーや、電子顯微鏡、X線などの武器を用いて攻

めればもう少しで吾々の「生命現象」がすつかり判つて了うだろう、そうしたら、人間は病氣どころか不死身になるかも知れないという風にも考えられます。しかしこの様な考え方は決して正しくないこと、科學者が専攻分野について知つて居ることは濱の眞砂の一粒にも過ぎないのであるという、科學への謙讓を教えて呉れたのも明星精神です。それから又神佛そのものであるみどりごのおかした過失を親が叱る資格のないこと、(尤も小生は凡夫の悲しみで叱つて了うことがありますが、そしてそれは全面的に赦される可きものであることを教えて呉れたのも明星精神です。少し變な言い方ですが、高い處にあるものは低い處へ向うこと、雨が降ること、花が咲くこと、人々が生きていくことが今よりも少しでも深くそして早く判ることであると私は今考えています。

私共のクラスには實業家あり、教育家あり、農業者あり、社會研究家あり、化學者あり、醫者あり、出版業あり、天文學者あり、各回の卒業生を全部合せて、それを縦と横に結び、お互に助け合つたら素晴らしい殿堂が築かれることでしょう。どうか明星の先生方はじめ皆様、益々精進され又御壯健であらんことを遠く仙臺の地からお祈り申し上げます。

## 明星のころ

第十四回生 戸坂嵐子

卒業生とは云つても、私は三年の秋に轉校して

きましたので四年末まで一年半、それも半分以上が勤勞動員と云う明星の生活でした。いまの方々には想像もつかないほどそのころの女學校は軍國主義にしばられていましたが、明星などが最後に残つたりベラリズムの橋頭堡だつたといえるのでしよう。こんな話がありました。私達が立川の方へ動員されていた頃と思いますが、夏がちがづいてくると學校に残つてゐる下級生にズボンの代りにスカートにさせてもよいだろうという話が職員會議に出て、或る先生が猛烈に反對なさつて議論になつたさうです。空襲がはげしかつたせいもありましようが、ズボンを用意していれば遊ぶ時はスカートでも……という先生方の御意見に對して、國文法の先生は時局柄面白くないとおゆづりにならなかつたさうです。こんな何んでもない話さえ、當時の私達にとつては、軍國主義のギセイから學校を守ろうとするリベラリズムの傳統がわずかにかんじられてうれしかったやうなものでした。

その頃、よその女學校では、まるで鑛型に人間をタタキ込むような教育でお下げの長さ何センチ、スカートの長さ何センチは勿論のこと、朝から夕まで教育勸語や軍人勸諭を暗しようさせられていたようですが、明星ではそんな事は誰も云い出しませんでした。「生徒の持味をなるべく生かしたい」と云われて勉強も好きなものをどんどん出来る機会がまだ残つておりました。三年の始め頃から油繪をかいていた私は、明星に来てからも數人のグループと一しよに岩瀬先生について寫生に行つたり教室を改造したアトリエで果物や花

人物などをかいたりいたしました。それは轉校して間もなくで、秋がだんだんと深くなつていく武藏野の道を、夕方おそく數人と、繪をかいたよるこびに高潮し乍ら歸つていつたものです。動員になつた頃から、繪をかくことはすつとやめてしまいましたが、戰爭末期頃の私の逃避するような詩や歌の求め方にくらべると、その頃の繪にうちこんだ喜びはあわたましい女學校生活の最後の、健康なロマンティズムへの陶醉でした。それは私には一番美しい思出のようです。

でも何といつても、明星つてやつぱりいい學校だと思つたのは、卒業してからでした。急に教育制度が變つて四年で放り出された私達は、何人かの人と一しよに東京女子大に入りました。そこではじめて、明星の氣分が如何に解放的だつたかに氣がついたので。女大もリベラリズムの傳統の濃い學校ですが、人學してくる人は始めの中はガチガチと勉強する人が多く、先生の講義を一字一句ノートする事など生れて一ぺんもしたことのなかつた私はびつくりして、つくづくとお友達に「明星つてのんきだつたわね」と言い合つたものです。

明星を卒業してからも何年になるでしようか、ようやくに社會の末席を汚していますが、さまざまの思出の糸を繰つてみて、明星のリベラリズムを精一ばいに吸い込んで、あの秋の廣い空の下で深く自由に息づきたい思出がわすれられなくてかきつづつてみました。

# 丘の上の家

北 京 中三 水野 和子

北京、北京  
赤い壁、青い屋根、金に輝く門の取手。  
澄んだ空。

街には人力車が景氣良く走り、  
馬車がゴトゴトと白い道を行く。

人々の間を赤や緑の支那服姿で、  
クローニヤンがすた／＼歩いて行く。

幼なかつた私は母に連れられて、  
ほこりつぼい道を人力車にゆられていた。

露店商の呼び聲、  
のれんがはた／＼とひらめく、

紫禁城、公園  
私は支那の子供達が持つている赤や黄のお菓子  
を羨しく思いながら

コツ／＼鳴る木靴の 快い音を聞きながら  
きたない馬車に乗つてみたいと思ひながら、

晝間の北京を走つた。  
人力車を下りて太く橋を渡る。

北京公園の白い塔、  
静かな音楽がのどかに流れている。

見るからにお人好しな支那の人々。



ゆら／＼ゆれるはしごで、  
船へ／＼と登つて行く。

衿首をつかまれてひかれる思いだ。  
ふり返る事も出来ない重い荷物。

呼吸の息が苦しい。

砂糖で黒ずんだ海面。  
むつとする位積んだ砂糖積出しの汽船が、

いかりを下している此の基隆港を、台湾を、  
もう見る事はないであろう。

見送る人一人とてない船着場、  
たゞ私と同じ引揚者が右往左往の船着場。

やつと上つた甲板から、すぐに船底の暗闇へ、  
船特有の吐氣がせまつて来る。

話すら出来ない位つかれ切つて、  
むしろにどかんと腰を下してしまつた。

少したつてポーと重い汽笛の音。  
何か胸にぐつと来るのを感じた息づまる一瞬。

皆の顔のきんちよう。  
足も出せない此の船底で別れの手もふれない。

やつとゆるされると、矢もたてもたまらず、  
妹と氣違ひの様に甲板にかけ上つた。

はるか向うに基隆は黒くぼんやりと、  
きりの様に……………。

私は涙の目でじつと見た。

## 疎開の思い出

中一 田村修一

たしか一年の時だつた。戦争がはげしくなつてきたので、僕たち妹と二人はお父さんの埼玉縣の實家に疎開した。お母さんたちは家を守るために東京にのこつた。「いなかはのんびりしていいなあ」と初めのうちは思つた。しかしそんな氣持はずぐかきけされた。家には元春という氣力がいがいた。僕から見たらいとこだが、それが初めのうちはよかつたが僕の事をとつてもにくんでいた。學校に入る事になつた。學校までは一里もある。そのじやり道をはだして行くのである。東京でげたやくつをはきなれていたばくはとつてもつらかつた。とうとう足の中指の爪がはがれてしまつた。いなかの事だからくすりもない。そのままにしていたら、うんできてとつてもいたかつた。足もなおつて學校へ行きだしたが、學校では疎開疎開といつて別者よばわりをした。だんだん學校もいやになつた。家がこいしくなつてきた。僕は東京に手紙を出した。そろそろ夏に入りお祭りが始まつていなかの子はきれいなきものをきてお金をもらつていつたが、僕たちはきものもないしお金もないので家であそんでいた。みんな本やいろいろな物を買つてきた。妹は本を見せてとたのんだが「疎開なんか見せるか」といつて見せなかつた。あんまりくやしかつたのでひつぱたいてやつたら元春になぐられた。じてん車のライトのガラスをわつた時もなぐられた。そうしてひつき

つるりとはげ上つたおじいさんや、丸顔の細い目でやさしく笑つて、私をだいてくれたあまや……

おとなつかしい北京  
靜かに物思う時、  
あわく遠いこの想い出が、  
そつと現われて来る。

### 台湾の思い出

中三田 中路子

樂しかつた屋上

學校の屋根に登つたら、見渡す限り屋根、屋根、屋根、その中に私の家も見えた。ポリタミンの大看板が、かん／＼日の照りつける中に、きら／＼光つていたつげ。仕事を手にした母をいつも思い出した。下の路を人力車が、近寄つては又遠ざかつて行つた。いつも待ちどおしくてならなかつたお晝休みのあの屋上。役所のそばのやしの木がにゆうつと高かつたよ。

台湾よサヨナラ

じやん／＼消毒液をふりかける中を、

ひとり手すりに寄りかゝつて、大聲で、「サヨナラ……」と。まわりの波が紺色に寄せ返すばかりだつた。

### 市場

手をぐい／＼ひかれて私は歩いていて、水をびちや／＼まいた上を小さな下駄でちよ／＼歩いていて。くさい揚油がみなぎつていて鼻をつく。かけ聲良く魚滿載の箱をかついでねじり鉢巻の台湾人、勢よくかけてすぎる。そうかと思えばスパ／＼長きせるで一服やつてる。支那服のおじいさん。人々がこちや／＼行き交つていた。台湾豆腐がゴパンの目のように並んでいた。腸詰肉がじゆづつなぎにぶらさがつてた。豚の足がどかんと所々にさがつている。くさつたぐちや／＼のバナナがうす高く、テンブラ屋が五、六軒並んで夢中でお客に呼びかけていた。人々が大勢なのでねえやはさつさと行つちやう。私は遅れまいと一生けん命に歩いた。遅れると泣いて、よくねえやを困らせた。それでも大好きなパーワンを買つてもらいたさにいつもいつもいつて行つたのを私は忘れない。

りなしにしかりとはされていた。相手が大人なので何もすることが出来ない。くやし／＼なやのうしろへいつてはなっていた、秋もちかすいたころ學校でどんぐりひろいをさせられた。僕はなかなかひろえないので、夕方までかかつてやつとひろえた。いよいよお母さんいなかへくる事になつた。初めはお母さんとよべなかつた。これからはようぶくはお母さんにあらつてもらうんだ。お母さんは毎日女中のようにはたらいだ。家のよくばりじいごとだなにしまつておく魚の干物を火にあぶつて時時そつと僕にくれた。元春はます／＼お母さんに「出ていけ」とか、つらい事を云つた。戦争がおわりさえすればだれがこんなところに來ると思つた。毎日おみそしとおこうこだけのごはん。僕は病氣になつてしまつた。毎日町にリヤカーで病いんに行つた。病氣中にも元春ははりばこをなげつたりした。お母さんのだいにしてはいたかがみもわれた。おじいさんは出て行つてくれといつた。出なければなやにねるとさえいつた。お母さんは「お父さんがいないとあんなもんかね」といつた。いよいよまちにまつたひつこしの日がきた。朝にづくりをして、おじいさんに「ありがとうございませう」と云うお母さんの目にはなみだがひかつていた。僕は「ありがとうございませう」といおうとしたが何かのどにつまつていえないかつた。その心の中には、「今に見る僕も大人になつたら。」という心で一つばいだつた。まだ人かげのないなか道をお母さんと妹と僕と三人歩きながら今までの事をそうまとうのように思いうかべながら歩いて來るとしぜんになみだが流れてくるのだつた。

## 丘の上の家

中三 木村 妙子

ポーツと、汽船の汽笛が周囲の山山に、鏗して長閑な如何にも、港町らしい雰圍氣を感じる。

私がこの長崎の家に、引越して来た時は、六ツの子供だつた。が、單調で長い汽車は、増々山奥へはいつて行く様な氣がして、此の先に都會があるのかしらと、不安になつてしまつた位であつた。一年中で最も美しい長崎は、初夏である。

人々は、急がしように、活氣づいて見え、到る所の木々の若葉が萌える。私達は石疊みを強く踏みしめ乍ら……

此の異國的な趣きのある土地が、たまたまなく好きになつた。

様々な色の屋根を持つ家々、美しい外國の旗をたてた領事館、港には、初めて見る。大きく、立派な汽船、何も彼もが繪の様で、しかも、のんびりしている。周囲は多くの、山々に圍まれ、わづかの盆地の中に、歴史的な都會がその全貌を、くり擴げているのである。

私達の家は小高い丘の上にあつた。

それはグリーン屋根で遠くから見ると、丁度玩具の家の様に見えた。そこで私達は新生活を、始めたのであるが、私は有頂天だつた。

今、その想い出を辿つてみると、様様の美しい場面が腦裡をかすめる。

いろんなものを、持つて來させる。

私はその頃、ごく無意識に、それ等の事を見ていた。然し今となつてみれば、確かに、幸福な氣持だつたに相違ない。船室は、素的だつたし、父の笑顔は、それにも増して、嬉しかつた。

うちの側の坂をくだると、そこに國寶の教會がある。私は日曜日に、よくそこへ行つた。朝になると門衛が大きな鐵の門を、ギイーと開ける。

教會の後は、背の高い木々が、建物をおしつゝ、むかの様に茂つている。あたりには乳色のもやがかゝつて、空氣がひんやりとほゞにふれて、すがすがしい莊嚴な朝、食事前の一時を、ミサに出る爲、てく／＼ときれいな石疊みの坂を降りて、くるのである。

正面の階段をのぼると、廣場になり、兩側は美しい芝生である。白木蓮や幾種かの薔薇の木もあつたかしら……戦前には、よくそこで外國の尼さん達が黒の洋服を着て、坐つていたが、それも



## 夢のある學校

古谷 綱武

私は明星が好きです。なぜなら、明星は、夢のある學校だからです。どんなにすべてのことが完備している學校でも、夢のない學校には、躍動する生命がありません。生命のない學校には、ほんとうの意味での教育の力がある筈はありません。夢こそ、活力の源泉です。

ルの建物や、其の他の風景等も見えるし、夜は彦山の嶺から、美しい満月がのぼるのを、いつまでも見ている事が出來た。

長崎の夜は又、實に美しかつた。海は夜光虫が青白い光をはなち、船の後を帶狀になつて追いかける。對岸からは、造船所の光が赤、青、黄色と明滅し、目は紺色の空へ冷たい、その面をきつと向けて、登つていく。町々は次第に眠りの底に沈んでいくらしく、その明りがぼつ／＼と消えていつて、晝間の騒しさは、電車の軋りが聞える位にとだえてしまう。そして夜の世界は、靜かに、その日の義務を果そうとするのである。私達は寝る時間が来るまでガラス戸を全部開けて、長崎の良さを口口にほめ乍ら眺めるのであつた。

私は、時間が來ると一人で、二階へ行つて眠らなければならなかつた。しかしすぐには眠れない時、ペランダにそつと上つて、望遠鏡であつちこつちを眺めた。夜の世界の神秘さを理解したいと、思つたのだつたかもしれない。

然し月を眺めるのは愉快かつた。何だかあはたに見える様な氣がして、自分が高い世界に浮んでいゝ様な錯角を起すからである。

そんな時は、きまつて自分の知つてゐる限りの歌をそつと唱つて見て、拂いのけようとした。寢床からは、開けはなれた、窓の外にお月様がそつとのぞいてゐるのを見る事が出來て、樂しかつたけれど、安心をもつて眠りにつくことが出來た。人々はみんな素朴でも、親切だつた。路に行き合ふ人は、見知らぬ人にも「よか、お天氣ですば

私の想い出は彼の土地の到る所に残っている。私達の庭の下には海岸が見え、海が美しく横たわっている。對岸が近くに迫つて、川の如き入江なのである。美しい形をした様々の船は、毎日はいつて來たり、出ていつたりする。父の乗つてゐる船もその中の一つだつた。四日に一ぺん歸港するのであるが、うちのすぐ側までくると、合圖の汽笛がボーッとなる。

待ちうけていた私達は、庭へ出て、ハンケチをふつて、喜びを傳えるのだ。「オーイ」と呼べば聞えそうな程近いのである。

父は巨大な船体の腹部にすわりと開いている丸い窓の一つから、きまつてハンケチをふつていた。船がランチに引つばられて、岸壁へ靜かに横づけされるのは、それからしばらく後の事である。私達はすぐみんなどお迎えに行くのであるが、その嬉しさは、丁度我等の將軍を出迎える様で電車の走りも、兄妹達の歩く靴音も、行進ラッパや、ベートーベンの皇帝の様に聞えるのであつた。

ぞろ／＼と降りて來る乗客が、ひとしきり終ると、石炭積みの人夫が、掛聲かけて石炭をかゝえ乍ら、船の横に開けられた口の中へ、飲まれていく。客船は實に大きい。

父は大抵自分の部屋にでて、嬉しそうに、「やあ、いらつしやい」と、きまつて云う。

それを聞くと、私達は何だかほつと安心して、嬉しくなる。何故なら、何時も此の船室にはいるまでは、父のこのきまつた言葉を聞く事を期待しているからである。父はベルを押して、ボーイに

殊にこのごろは、若い先生たちの間に、新しい情熱が湧き起つてゐるときいています。私は、その新しい情熱に、ひそかな期待をよせながら、今、明星の一層の成長をみつめています。祝うべき日に當つて、それを回顧の日にするよりも、むしろ前進の日にして下さい。明星は、まだ若いのです。

私達の目からすぐ消えてしまつた。

その爲に教會の色彩が落ちた様な氣がして、小さい乍らも、戰爭つて厭なものだと感じた。更に長い急な階段をのぼると、立派なマリヤの彫刻の前に、大きな禮拜堂の入口が口を開いている。中は薄暗くて色ガラスが様々な光を放つている。非常に古色な感じの爲に會堂の中の零圍氣が、どん／＼變りつゝある世の中をよそに、靜かに古い空氣をたゝえてゐる。大きな圓柱には、ずらりと、昔の繪（キリストとそのお弟子の）が掛けてあり、信者はレースのベールを頭にかぶつて入口の貝の中にある水を片ひざつて十字を切る毎につける。やがてミサが終ると人々は靜かに讚美歌を口ずさみ乍ら、高い階段を降りて歸るのである。坂をのぼりきつた所で、灰色のドアを開けると下に階段がつゞいてゐる。その中は、三軒の家庭がおそろいの建物を、並べていて私の家は一番東側であつた。

西側のうちは、全貌が海なのであるが、私のうちからは山の中腹にある、美しいミツシヨンスク

いね。」（いゝ、お天氣ですね）愛想のいゝ挨拶をして通り過ぎる。そこには何のへだたりもなく、まるで舊知の如き、暖かみがあつて、本當に、見えて微笑ましい位である。私は此所で人情の美しさを見、味わつた。人間に心狭さが、全然なくのんびりと生活してゐる。それは幼稚園から歸りの或る日であつたが、その日いただいた寫眞を眺め乍ら坂を登つて行つた。すると後から、「それ、貴女のお寫眞？一寸見せて。」と云う聲にふりむくと、可愛い坊やを抱いたイギリスの夫人がこ／＼笑い乍ら立つてゐる。

私は恥かしさで、眞赤になつて、そつとさし出した。一緒に歩き乍ら、そのおばさんは坊やと見ているが、「可愛くおれいますわね。名前何ていうの、この子アルバートつて云うのよ、私達ね、この教會の裏手に住んで居ますからどうぞ遊びにいらしてね。きつとお待ちしますから。」私達は、左と右に別れた。私は、今日の出來事を、母に話す爲に、急いで坂を駆け登つた。

こうして彼の家とは非常に親しくなり、いつも往き來する様になつたのであつた。

私は、明日の日が、どんなに、恐ろしく、悲しいものであるかといふ事等、夢にだに予期せず、こうして、毎日を楽しく過して來たのだつたが、やがて止むを得ぬ事情の爲に、想い出多い此の土地を後にしなければならなくなつた。

今も私の耳には、ボーッと、船の汽笛が聞え、小高い丘の上の家が目にもちらつく。私の想出はあの懐かしい坂や教會堂と共にいつまでも、幼き日の夢として残る事であらう。

## 杉の木の下

高二山 根晴子

廣々とした田圃。そこには何も目を遮る物はない。何里も何里もの間青々とした、稲が續いている。田圃は、はるか向うの黒い森の下まで、續いているのだ。その森の向うには、やはり廣い田圃が、横たわつていたのである。あちらの森と、こちらの森との中間に、大きな杉の木が、二、三本たつている。それは、私のいる所から見るとまるで、小さな子供が立つているように見える。

私はそこへこれから行くのだ。

狭い田圃道を私は八月の太陽に照らされながら歩いてゐる。何も考えずに、たゞそこに早く行きつくようと、早足でどん／＼歩いてゐる。今田圃で働いてゐる人は一人もいない。皆、家の中で晝寝してゐる。こんな時間に外で働いてゐる人は餘程の馬鹿か變人でなければならぬ。

あの強い蝗だつて、稲の葉の裏に隠れてゐるのではないか。田圃に虫を拾ひに来る小鳥でも、どこかの木の上で休んでゐるのではないか。私の額からは、汗が出つくしてしまつた。あまりの暑さと、遠い道程に私は眩暈がして來た。早くあの杉の木の下に入つて、休みたい。杉の木は、段々大きくなつて、目の前に迫つて來る。私は前よりも早く殆ど馳るばかりに、足を運んだ。

あの杉の木の下には、この附近の小地主の先祖の墓がある。土地や財産はあまり持つていないけれど、名門とか家柄の良い事を誇りとしてゐる人

は、田舎に行けば澤山ゐる。この場合の名門といふのは、普通の人より一寸良い方に違つてゐるといふ事である。

この小地主（S家と云う）の家の人々は、この墓をとつても大切にし、二度目に會つた人には、必ずこの墓の事を自慢する。これは、この家がいかに名門であるかと云う事を人々に示すものゝ一つである。

私は、この家と殆ど他人と云つてもよい位の遠い親類のような關係にある。私はこの田圃がまだ白い雪におゝわれてゐる頃、こゝに疎開して來た。

私がこゝへ着いた翌日から、S家の人々は代る代る、私にこの墓の由來を聞かしてくれた。あの東北特有のぼそ／＼した聲で呟やくように話し最後に明日そのお墓にお参りして來なさい、と云う私はその度にいゝ加減に、「えゝ。えゝ。」と答えておいて、そこへ行くのを一日のばしにのばして來た。

誰だつて、有名な人のお墓ならともかく、たゞの他人の先祖のお墓なんかには、お参りしたいと思ふ人はないでしょう。

私はそう思つたのと、面倒臭いのと兩方で、半年の間、私は毎日同じ返事をくり返して來たのである。が、遂に今日という今日は行かないわけにいかなくなつたのである。そして時もあるうに一日で一番暑いこんな時間に、出かけるようになったのである。

何百年たつたのか分らない杉の大木が、私の上

におゝいかぶさつて來た。私はとう／＼名門S家の墓に着いたのである。はつはつと息を吐いて、私をこゝまで連れて來た杉の木と墓とをかわるがわる眺めた。

飛び出して來る藪蚊を拂いのげながら、竹をおし分けて、私は奥の方に進んで行つた。一番大きな杉の木の間隙に、小さな墓石が置いてあつた。長い間の雨風で、四角い角はずつかり丸くなり表面に刻んである文字も、はつきりと讀みとる事は出來ない。私は石から少し離れて、形ばかりに手を合わせた。

S家の人々が自慢するこの墓には、何十代前のある大名の家老だつた先祖が、埋まつてゐる。S家の人々が、名門と言つて誇るのは、何百年か、前武士であり、家老であつたことなのである。

何故こんな事を誇る事が出来るのだらうか。血の出る様な苦心をして、財産や、名聲を得、たその當人だけが人に自慢すればよい。何もしない子孫が、名門だとか何とか言つて、誇ることは出來ないではないか。

それが言える人は、この下に何百年となく眠つてゐる。私は、人々が名門等というのは、こんな事かと思つた。

名門だとか、系圖が正しい等と言う前に、自分の持つてゐる力を誇ればよい。

その人



きみちちゃん 高二 水谷 恭子

きみちちゃん。その子は本當に可哀想な子だ。家  
のすぐ傍の八百屋の長女で、妹と同年なのに、な  
んだか可哀想なのだ。きみちちゃんは、幼い頃から  
非常に泣き虫で、小さな体をして近所でも泣き  
虫が評判だった。小學校に上つた時、教室の中  
もお母さんの袖をつかんでいなくては泣き出し、  
どこに行くのでも一人では行動のとれない氣の小  
さな子だった。私は妹がよくきみちちゃんのことを  
話すのでその頃から何となく關心をもつようにな  
つた。

おばさんは小でつぶりとしたちよつと古くさい  
人だつたが、きみちちゃんを、ずい分可愛がつて  
いた。おじさんは、一見クマみたいな感じの人だが  
とても純な人で、何だかいつもおばさんに体をし  
かれてゐる形だった。

まだその頃のきみちちゃんは倅せだった。八百屋  
はとても小さかつたが、近所に一軒しかないし割  
に皆が内わで買つたので、はんじようしたし、一  
人つ子で甘やかされて育つてきたからである。

その頃、とつぜん、全くとつぜんおばさんが亡  
くなつた。私はきみちちゃんの氣持を察して本當に

哀れに思い暗い氣持になつた。

妹は受持の先生と、家が最も近かつたので、組  
の代表になつて、おくやみに行つたがきみちちゃん  
は身も心もとけてなくなる程泣いていたそうだ。  
粗末なおそう式にまつた。

すぐ次におばさんの妹にあたる人が二度目のお  
母さんになつて來た。此の人は、やはり太つてい  
たが、それは／＼きみちちゃんにたらくあつた。  
まゝ母の悲しさ。私はそんなものをまのあたりに  
見せられたように思つた。

そのおばさんは次々に妹一人と弟二人を生ん  
だ。それが又きみちちゃんを泣かせることになつ  
た。今まで一人つ子で甘やかされてきたのに泣き  
つく眞の母もいなければ朝な夕な子守りとお店の  
お手傳いである。

でも、私は此の頃になつてびつくりした。

本當に／＼にきみちちゃんは強くなつてきた。  
どんなに酷いことを云われても平氣でいた。私

が時々買物に行つて、さぞつらからうと思つて  
とも、きみちちゃんはだまつていた。商賣柄朝は早  
くから夜はおそくまで商いをしなければならぬ  
ので勉強どころではないだらうと思つた。でもき  
みちちゃんは、お母さんが死んだ時、自分も死んで  
生れ變つたように強くなつていた。不思議な程。

眞黒になつて小さな体で働いてゐる姿は尊かつ  
た。時々髪は毛のやり方も近頃ではしやれたり  
私達が買物に行くと、洋服のことや、色々き  
出す。私はその度になりたい、くわしくゆつくり  
話をする。するとおばさんはすぐに大根の整理を

しろとか人参を裏から持つてこいとか色々  
の用事を云いつけてじやまをするが、きみちちゃん  
は用事をしながら話しかける。

此の間も買物に行くとききみちちゃんは、「ねエ、  
これ買つてもらつた」と云つて私に眞黒なブルマ  
をみせた。これはきみちちゃんの一つの癖で何か新  
しい物があると必ず自分のものでも弟のものでも  
みせてくれる。少女の一つの優越感からであらう  
か。私は「ふーんいくら？」ときくと「あのね三百  
十五圓だけど三百十圓にまけさした」と云いつ  
て、おくれ毛をかき上げた。「三百十圓？すごいわね  
エー。どこで？」「坂下」「坂下？」私はき  
かへした。私がS町に引越してきてから十一年にもな  
るのにそんなお店は聞いたことがなかつたから  
だ。「うん。あらいやだ。坂下つていうのはね、坂  
をおりて行つた所にあるからだよ」と云つて笑つ  
た。私も思わす笑つた。きみちちゃんはこんな子だ。  
おじさんも、元はとても可愛がつていたのに、  
おばさんに見ならぬ出したのか感化されたのかお  
父さんぶつてとてもこわくなり、學校にやつてや  
るんだぞと云わぬばかりである。おばさんの子、即  
ちきみちちゃんの妹や弟は毎日洋服や顔、手足を眞  
黒に汚す。そして特に今年小學校に上つた妹がと  
てもませていてきみちちゃんがやつつけられ氣味で  
ある。近頃では小さな体で眞黒な色をして、夏で  
も暑そうな服をきて、おじさんの出商賣を手傳つ  
てゐるが幼い頃のきみちちゃんではない。

時々、妹の所へきて、特ちようのあるすじ金の  
入つたような聲ではなしてゐるが、そんな時のき

眞赤な顔  
輝いている顔  
そのほおははちきれそうだ  
私にもそんなのがほしいなあ。

あなたのそばへ行くと  
あなたの光が  
わたしをうすめる。  
あなたのそばへ行くと、  
あまりいゝにおいで  
私をやさしくする。

おしやれで むじやきで  
おどけものだから  
かなしい時でも  
私をたのしくする。

おじさん 中二 三浦誠 一

おじさんは いつもニコ／＼笑つてる  
この間 手のほうたいをきいた時も  
ただ笑つていた。

「今晚は」とやつて来た時も 笑つていた。  
シベリヤにいた時も  
わらつていたのだろうか。  
シベリヤは寒いだらう。  
そして つらかつたらう。  
おじさんは

笑つて  
しいいのでいたのだろうか。

みちやんは、本當に吾を忘れてたのしそりにはな  
す。わずかな時をおしむかのように。  
きみちやんは可哀想な子だ。しかしきみちやん  
は倅せなのかもしれない。きみちやん自身はそれ  
をどれ程感じてゐるかわからないけど。

### 水底の眼鏡

中三 五十嵐 肇

今月(九月)の十三日の朝の學校に来る途中の出  
來事である。その日は朝から曇つていやな氣持の  
する天氣であつた。僕は例の通りに井ノ頭公園の  
長橋を通りかゝつた。

僕はカバンを振り上げた瞬間にカバンの角が目  
鏡にあつた。目鏡は平凡な音とともに沈んで行  
く。僕は一瞬輕井澤で目鏡を、こわした時の事を  
「ハッ」と思い出した。その時の僕の頭の中はな  
んだか空洞の様になつた。こう書けば長い様だが  
二、三秒の事だ。

その時後から佐竹君が「どうしたの」と云いな  
がらかけて来た。僕はただおろ／＼胸がつまつた。  
僕はもううわの空でポート小屋にかけつけた。

「目鏡を長橋の所の池の中におとしましたから  
ポートをかして下さい。」「おねがいます。」だが  
若い人は「九時半までまつてくれ。」とそつけない  
答えだつた。僕はつく／＼「人情紙の如し」を思  
いだした。僕は自分の不注意をなぐりつけたい思  
いだつた。

そんな事をしてからかれこれ十分間ぐらいをつ

いやした時、原、兒玉、岸田達が長橋をわたつて  
来たが先に来たはずの僕を見つけ質問の矢をあび  
せかけた。僕は一切の事情を話しおわるとなんだ  
か重荷をおろした様な氣がした。しかしまだなん  
と云うか筆に書き現わせない一種の變な氣持がま  
だ心の底に残つていた。

そのうちに兒玉君は泳いでやると云いだした。  
僕は兒玉君に何んと云つて良いのかわからなかつ  
た。「悪いからいいよ。」

その時はもう兒玉君は池の中に手をいれてい  
た。たしかに寒い。

それでも兒玉君は泳いでくれた。

どぼり／＼と三四回もぐつたが目鏡らしきもの  
は發見出来なかつた。きつと「も」の間から池の  
底にもぐつてしまつたのである。

兒玉君に對しては言葉にも心にも感謝した。

僕達が學校に對しては言葉にも感謝していた。

一時間目は理科であつたがろくろく頭にもはい  
らず無意識に一時間を過した。勉強している間  
でもあのなつかしい、僕の悪い目をおぎなつてく  
れた目鏡を思い出した。

二時間目は先生にゆるしをえてまた現場にい  
つて見たが、あるはずがない。

僕は目鏡がなくともその日の歸り道は明るい氣  
持で歸れた。それは友情である。……曇つた日  
の、まして清水のわき出る池で……

皆の美しい氣持に感謝しながら歸つた。

「困つた時の友達に眞の友達である。」のことわ  
ざが胸にしみた。

## 父の病氣

初六 藤井裕二

その日は土曜日だった。晝ごはんを學校で喰べて家へ歸つた。空は晴れていて暑く汗がにじみ出てえりのへんがしめつていやな氣持だ。木戸をあけて中へ入るとお母さんは袖をまくりあげ、たらいを前に置いて洗たくをしている。建てまじした三疊を新三疊とよび、その向いがわの三疊とをとなぐ縁側がある。お父さんは今日も氣持が悪いといつて會社を休み、新三疊に寝ているはずだ。家中へ入ろうと思つて縁側へ片足をかけた時、お父さんが新三疊から出てきて、横にあつた桶の前に寝ころがつた。顔色はまつ青だ。毛が一、二本顔の方へたれている。ねころがつて少ししてから桶の前に首をさしのべたかと思つと「ああぐぐぐがあー」というへんなうなり聲を出したかと思つと、父の口から、眞赤な血が、後から後から、湧いて出るように、どつと出てきた。うなり聲が一寸止つた。お父さんは「ああぐぐ」といいながら息をした。そのたびに、肩や身体が、大きくゆれる。お父さんは、ちつと遠くの方を見てるような、どんよりした、しかし、感じが血走つてる目つきをして僕の方をちらりと見たが、すぐ苦しそらに下をむいた。桶の前に首をさしのべて、「うらうら」という。そのたびに、少しづつ血がばつばつと出てくる。お母さんは、井戸ばたから、とんできて、お父さんのそばにきちんと座つて、顔のぞきこむようにして、お父さんの背中をさすつ

ている。遠く公園の方でせみの聲が「ジジ〜」と聞こえてくる。急にシーンとなつた。お父さんは、顔をゆがめて、「うらうらが、げろげろげろ」と、いつたかと思つと口を大きくひらいた。今まで小さざみに出ていた血が始め出た時よりも大きく、かたまりになつて、どつ、どつと出てくる。お父さんは下をむいて「ああぐぐ」といつて息をしていたが、又うなつて最後の血を吐いた。隣までこの音が聞えたらしく小母さんが急いで入つてきて、桶半分もの血を見、びつくりした。「まあどうしたの」といつた。お母さんは「え、たいてい胃かいようでしょう」といつて笑つたが、目は笑つてなくて心配そうだった。小母さんは歸つていつた。僕は昭和醫專へいつてる叔父の治ちやんの勉強してる玄關へ走つて、「あのね、お父さんが、血を吐いたよ」といつと、治ちやんは平然とした顔つきをして「そうか」といつて、椅子から立ち上つた。縁側まできて、桶半分もの血を見ると少し、はつとしたような顔つきをした。僕はその頃肺病は必ずつ死ぬと信じていたから、まず治ちやんに「肺病？」ときくと治ちやんは首を左右にふつた。何もいわなかつたが肺病でないかと判つていくらか安心した。治ちやんは、襦をあげて新三じようへ入つた。すかさず僕はつづいて入つた。部屋の中へ入るとすぐ「楽な姿勢にもどさなければ」といつた。僕はあんなに血を吐いた後で少しでも動かしたいのかと思つたが、子供だからと思つて、だまつていた。お母さんも同じ氣持らしく、座つたままの姿勢で、入口の前に立つて

る治ちやんを見上げて「動かしてもいいの。」と「う」と「この部屋の中ならいい」といつたのとお母さんは、お父さんの胸のへんをだきかかえる様にして、布団の上に運んだ。お母さんは、治ちやんに「やつぱりお醫者さんに電話をかけたまじようか？」といつと、治ちやんは「それがいい」といつた。お母さんは湊さんの家へ電話をかけたいつた。それと入れちがいに、兄さんと姉さんが入つてきた。治ちやんは、お父さんの横に座つてだまつて見ていたが、兄さん達が入つてきたのを見て「一寸出ていつて」といつた。兄さん達が出ていつたから僕も續いて出ていつた。そして三疊で本を讀んだが、一寸も面白くない。顔をあげて兄さんの方を見ると兄さんは、お姉さんに向つて「どうしたんだろうねお父さん」といつた。姉さんは「うん」とうなすいただけだ。少したつとお母さんがどた〜という足音をたてながら歸つてきた。縁側の前で止つて「茂木さんはすぐきます。すぐお腹を冷やすようにつて」といつて新三疊へ入つていつた。僕は三疊にいるのいがやになつたから縁側へでて、何んという事なしに桶半分もの血を見てた。動く氣がしないのでじつとして二十分位を過した。三疊のへんで足音がした。だまつて足音もさせずこつちへ入つてきた。醫者の茂木さんだ。中折帽をかぶつて黒いてか〜と光つた靴をはいている。中折帽をぬいで片手で持ち縁側においてある桶の中の血を仔細らしくじろ〜と見てから、お母さんとあいさつをして新三疊へ入つた。お母さんは縁側まであいさつに出ていた

から續いて入つていつた。僕も靜かに後から入つたら茂木さんがじろりと見たから、あわててえしやくをして「今日は」というと、うなづいたのでお母さんの横に座つた。お姉えさんが入つてきて茂木さんを團扇であおぎ始めた。お母さんは心配そうな顔つきをして茂木さんの顔を見てる。父は枕に顔をうづめて腹を下にしてじつとじてるが、何となく苦しそうだ。茂木さんは、「お晝には何をたべましたか？」と聞くと、お父さんの代りにお母さんが「ミルクとパンを少しばかり」といつた。「吐いた時のようすは」と茂木さんがいうとお父さんが身体を横に動かして左手を出し右手をその上にのせ「始めはミルクがテン／＼とできて吐くな、と思つた時に血がどつと出てきました」というと茂木さんはうなづいて、お母さんの方を見「ここん所何かへんな事がありましたか」というとお母さんは「よく會社から歸つて来て御飯も喰はずに寝てしまふ事がたび／＼ありました。」というとお父さんの方を見て、「藥を差し上げますから

### 質屋のウインドウ

中一橋 昭多

キネマの隣りは質屋です  
質屋のウインドウのはさみ虫  
お前はとて金満家  
黒いダイヤのつかつて  
どつこいしよと大あぐら  
雨の道路を見まわして

はねたおひげを動かした

取りにきて下さい、それから早く腹を冷して下さい」といつた。お母さんは「とりあえず水で」といつて、棚の上から氷枕と氷嚢を取り出し井戸ばたへいつて水を入れて歸つてき、手拭いで包んでお父さんの腹の上へ入れた。茂木さんが「氷を買つてきたらいいでしょう」というとお母さんが「氷を賣つてくれますかしら」というと「賣つてくれます」と答えた。それをきいてお母さんはたち上り、六疊へ行つてハンドバックを持つて来て、「孝ちゃんと裕二とで氷をかつてきて」といつて、百圓札を渡した。僕と兄さんは、買物籠を持つて氷を買いに吉祥寺へ向つて歩き始めた。坂を下りて橋を渡ると、釣りをしてる人、ボートに乗つてゐる人、水泳してる人などがゐる。吉祥寺の坂を上り踏切の前の通を曲り二十米位いくと、氷と書いた看板がある。そこへ入ると外は暑いのに、中はひんやりとした涼しさがある。兄さんが「氷賣つてくれますか」というと、若い二十五、六の人が、景氣よく「ああ、賣るよ、いくら買う」といつた。二貫で四十圓だつた。兄さんと代る代る

### おつかい

中二 古木 瑞子

重いお醤油を右手に  
重なおつかいかごを左手に  
夕方の坂を いそぎ足で歩く。  
今頃は、あのポツポツとゆげの出る  
あたゝかいおうどんを食べているのだらう

もつて歸つた。歸つて見ると、醫者は歸つていた。僕が「氷あつたよ」といつて縁側へ「どすん」とおいた。氷かきがないので、縁側の上で金づちと釘でガ／＼やつてくれた。お母さんは、氷枕を持つてきた。氷をくだいたやつを氷枕へ入れて新三疊へ入つていつた。僕は氷をくだいて口の中へ入れた。じいんとつめたくて齒にしみた。お父さんは上むきになつて、じつとして目を閉じてる。お母さんは、一生懸命お父さんをおおいでゐる。治ちゃんの所へ行つて「お父さんは死なない」というと、笑つて「お父さんの病氣はね、胃の皮がただれて、血がでてね、胃にたまつちやつたから口から吐いたんだよ、だから安心してな。」といつた。僕が部屋を出るとお兄さんが、裸で治ちゃんの方へ入つていつた。僕は外で聞いていると、治ちゃんは何かむづかしい説明をしていた。僕は判らないから、三疊へ行つて本を讀んだ。何んだか落ちつけなかつた。

どぶの中らしい

ゲゴゲゴゲコ／＼  
すぐ近くで開える聲。  
遠足歸りの子等が  
ペチヤンコのリュックサックを背負つて話してる姿が、遠くみえる。

公園でのスケッチ

☆ 高柳 和子

まつの木が ゆれてる

あおぞらがきれいだな

さとし雲が でてる。

さといものはつげが おおきいな  
ゆれてる。

おともだちが たつて

かばんを しょつてる。

おとこの子が――。

おじさまが つりざおで

おさかなをつつてる。

たばこをすつてる。

つれたとおもつて もつてみる。

こうえんのおいけの 小さななみ

しまのよう。

ぼうとおとうさんがのつてる。

あすこでとまつた。

☆ 室谷

子も馳ける雲も馳けると萩野行く

☆ 北野 順子

おいけに ぼうとがうかんではいるよ。

水かがみが ともきれいだよ。

むこうのいしのはしに みんながあつ

まつているよ。

もう あそんでる。

☆ 高木 久子

おいけのなみ 大きななみ

こつちのほうは 小さななみ

おふねがうごくとなみがよつてく

☆ 北川 忠明

おこめが くびをふつているみたい。

おこめは ちやいろに きいろをませ

たよう。

☆ 留崎 洋介

とうもろこしが かれてると

すこしきれい。

まつの木も ゆれてすずしいなあ。

先生もたつて うたをかいでいる。

☆ 倉本 節子

きれいな おいけの水

小さななみで ゆらゆら うごいてい

る。

ぼうとも あつちへいつたり こつち

へきたりして

そのぼうとが

こんだ あつちへ こいでいつた。

☆ 深川 美奈子

いものはが たくさんあつた。

いものはのよこに 花がさいていた。

その花に かわいしいじみちようがと

まつた。

とつてもいいけしきだつた。

みていると かきたくなつた。

☆ 山崎 博子

こうえんに きたらば

きんぎよみたいたい。

きもちがいいな。

☆ スケッチ 吉村 楯夫

はたけのかきねがたおれてる。

つるがいつばい まいてる。

くもは しるいよ。

あおい空 いいきもちだね。

ひこうきのおとがきこえるね。

どこかのねこが 木にのぼつてる。

ぼうと ぼうと うかんでる。

きれいな水に うかんでる。

☆ 室谷

一片の雲池に落ち秋の音

☆ 並河 惠美子

まめの花のそばで

ちようちようがとんでる。

まめのつるがのびたね。

☆ 山下 和子

きようは きれいなあお空 よいてん

き。

ねずみのような雲

まつの木 ゆれ ゆれ

風がくる。

☆ 澤 正樹

いのかしらこうえん とつてもにぎや

かだ。

ほく じゃんぐるじむで あそんだ。

あと すべりだいにのつた。

とてもおもしろかつた。

☆ 岡田 徹

きれいな おうち

かわらの 赤のいろ。

くるやなんかのいろ。

白いかべです。

☆ 高田 惠子

さといものはが いつばいできている

あおいはつげに むらさきいろのぼう

だ。

☆ 近藤 賢

ぼうとにのりたいたい

ぼく あんなにきれいだからのりた

な。

のつてる人がふたりある。

またむこうからくるよ。

ぼうとは水の上にかんで きれいだ

な。

ぼうとはむこうへいつたら またこつ

ちへくるんだね。

☆ 川上 龍夫

空をみると はくしよんがでる。

雲もきれいだ。

せみもなく。

あぶらせみもつくつくぼうしもないて

いる。

☆ 井上 良吉

ちようちよがとんできてとまつた。

ちようちよが二ひきで あそんでる

こうえんは きれいだね。

そこでみんなすわつて うたをかい

た。

☆ 室谷

詩は胸に秋草の實をつけしまま

まつの木にせみがなっていた。

まつの木に ひかりがさした。

まつの木は 大きいね。

☆ 花の見えるスケッチ

とんがらしが 赤やみどりや

たくさんなつて

あさがおがつぼんでる。

たねがたくさんなつて

ふねが すいすいと うごいてる。

水かがみが きれいだな。

下でほしのくんだちが かいでいるよ

すべりだいに こどもたちが あそん

でる。

☆ 中村 耕子

水が ちらら ちららと 水かがみ

ぼうとも ふたつあつたよ。

☆ 石井 隆

せみがなっていた

おおしんつくが きれいなこえでない

ていた。

とろくのほうでなっている。  
いま かまくらちようちよが とんで

大きな ちようちよがとんでる。  
こうえんに ぼうともうかんてる。  
しすかななみ ぼうとがうかんてる。

☆ 金澤 武

大きな まつの木

はつばは みどり

そらは あお空

ひこうき とんでる。

☆ 内田多企子

いまさつき とおつた ひこうき

お空にじゆうじかのように とんでい

る。とおくにいつても おとがまだきこえ

る。あお空にとんでいく。

# 空 白

## 高三 中川日出男

うら淋しいかな／＼の聲も日におとろえてゆき  
乾いた畑の上を赤とんぼが群れていた。そしてさ  
まざまな木に先だつて櫻の葉が黄ばんで何時か落  
ち始めた一九四四年の秋、人々は空襲の危険を身  
近に感じ始め、或者はその時期を今は目前のこの  
冬と予測する程になつた。

街の人たちは夫々疎開を急ぎ、工場とか驛の附  
近等の取りこわされるのも間近かゝつた。そして  
人々は眼前に現われる困難の一つ一つにその全力  
を傾けつくして目を四方に配る余裕を全く持たな

白い雲どんどん うごいていく。

☆ 岩崎 桃子

でんせんに とんぼが とまつてる。

でんきがきても あつくないのかな。

もえたら とんぼは しぬだろう。

☆ 伊端 晴子

おうちのやねに かぼちやの花がのつ

ている。

おうちのまえに かんばんが見える。

おうちのよこに せいとがいました。

かきねから でてきた いぬ。

☆ 徳丸 貴志子

きれいな きれいな なみだ。

いま わたしのほうを とおつた。

ぼうとが とおつてから

うしるのほうに きれいな なみだつ

☆ 三輪 孝光

ひこうきが ぶーぶーと いてとお

つた。

またとおつた。

おもしろい。

雲の中に はいつた。

はしつて いるみたい。

びかびかして がらすみたい。

☆ 深川 美奈子

まつの木があつた。

まつの木のだは

へびのようだ

はつばは はりのよう

手でさわると いたいよ。

☆ 倉本 節子

もうとうもろこしがなくなつてきた。

あと たかきびがなつて いる。  
たかきびのはつばが かれて いる。  
かれていたのが 風でゆらゆらうごい  
ている。  
たかきびのみがなつて いる。

☆ 並河 惠美子

こうえんのおいけのほうと

69のほうとは ひとりがたつて ひと

りがこいで いる。

水かがみもうつつて いた。

おさかなも とつて いた。

☆ 澤 正樹

まつの木に おひさまの光がきて ひ

かつて いる。

とてもきれいな まつの木。

☆ 子はなべて秋の雲見る詩を拾う 室谷

かつた。

家では可成り年老いた父も再び仕事を始めなけ  
ればならなかつた。兄達も兵隊としてでこそな  
かつたが、一人は南方に在り、一人はいくばくもな  
く支那に向う筈であつた。そして状態によつては  
出産のもう間近かな姉も疎開しなければならな  
かつた。それには母もつきそつて行かなければなら  
ない。家の人達がだん／＼とへつてゆくのを考  
えるとたまらなくつまらなかつた。  
しかし時は人々の様々な想いにかゝわりなくう  
つていつた。

兄が支那に向けて發つてから日も浅い或夜のこ  
とだつた。その夜の雨もよしの空に無氣味に斷續  
するサイレンの音を夢心地で聞き、呼び起す母の

聲にはつきりと目を覺ました。一瞬こゝ數ヶ月の  
間に頭に積み重なつて來た意識が今にも頭上を爆  
弾が襲うのではないかと云うような切迫した氣持  
ちにさせたが、それと共に危険に直面すること  
の喜びが冒險を求める子供の心を激しくゆすぶつ  
た。傍の兄と緊張した面持ちで二言三言言葉を交  
わすと手早く身仕度を調えたが、ともすれば喜び  
がその緊張を破つて顔色に出ようとするのをどう  
することも出来なかつた。その度にお互いにその  
表情を引緊めようと勉めるのだつた。

晴れていたら満月でもあつたのだらうか、外  
に出ると細かな雨が音もなく降つてはいたが、か  
なり明るく芝生や庭木の緑や瓦の色やよく見れば  
雨戸の木目までもはつきりと見ることが出来た。

その中でせわしく用水桶の水を補つたり防空壕の入口を調べたりした。用意すべきものは皆してしまつた。しかし灰色の絶え間なく霧雨の降る夜を破つて来る物音は何も聞こえては来なかつた。何やかやと動き廻つていた兄はもう何事も起るまいと見通しを附けたのか家の中に引つこんでしまつた。僕も大きな失望と安心とで急に張りつめてた心がゆるんでゆくを感じていたが、丁度その時傳つて来た遙かな、地響をともしなかつた重い物音になお暫らく引き留められていた。それは興ふんのまださめやらない心をわずかに騒がせたがやがて止んだ。夜の静けさは何事もなかつたように次第に心を落ちつけていつた。もう大丈夫と家に入る氣になつてよりかゝつていた戸袋をつと離れた。すると又あの重いどろ／＼と云う音が聞えた。急に、今度は張りつめた氣のゆるんだそのすきまにわびしい空虚な氣持ちが擴がつていつた。それは數ヶ月の後に迫つてゐる母達との別離を恐れる氣持ちであつた。家を出て行く見達を送つた時の思ひ出が次々との目の中に浮んで来た——出發の數日前に、激しい口調で僕の室の何時も亂雑なのを注意してくれたのは下の兄だつた。上の兄は唯何時ものようにニコ／＼笑いながら「じあ行つて來ます。よく勉強しなさいね」と云つて行かれただけだつた。夫々形は違つていたが同じ愛情が身にしみた。そしてその時の早春のサンルームに残つていた陽の香りを今再び感じ、満天の星空の下に去つて行く電車と、その後には満ちていたおろぎの音とを再び聞くことが出來た。末つ子のせいだら

うかその度に味わつた云いようもない淋しさ。そして今唯一人の姉とそれにもましてなつかしい母と二人ながらに分れなければならぬ日が迫つて來てゐるのだ、その日のさけ難いことが解つてゐるだけに一言も云わなかつた。唯その日の、一日も遅く來ることのみを願つて來た。そう思うとそのことばかりが頭に浮んでうつるな氣持が身体中を包んで行つた。

半ば放心したようにちよ立する庭に、何時か雨の上つた空から月の光が芝生の上にくつきりと黒い影を投げていた。

秋も深み木屋の香の高く漂う頃になると空襲はようやくひんばんになつた。冬になると澄んだ空にはあざやかな飛行機雲が白く細くどこまでも伸びて行くのが見えた。空襲は専ら立川邊りの工場地帯に行なわれて、市街はほとんど心配ないようだつた。そのために最初の空襲以來一時急がれた疎開の話もいつかまあ暫らく様子を見てからと云うことになつて最後の比較的無事な數ヶ月を送つた。

遙かに紫色にかすむ山々を背景に、交さくする砲聲と閃光と白煙と機影とは吾身が安全であるだけに素晴らしいスペクタクルだつた。飛行機が少しでも近づいたりすると兄と双眼鏡を取り合うようにしてバルコンに駆け上つたり、それをする余裕もない時は素足で跳び出したりして夢中で見た。一つの點のようなこちらの飛行機は一閃の光と共に黒い塊となつて落ちてしまひ、それに較べて可成り大きいB 29は周りの家の屋根や林の中に消え

## 書評

尾崎秀實著

『愛情はふる星のごとく』

中三 藤原 弘雄

この本は尾崎秀實が獄中から愛妻英子と一人娘楊子へ書き送つた手紙を一冊の本にまとめたものであつて、發信許可を得た一九四一年十一月七日から絞首台に昇つた一九四四年の發信許可をうけた日付と同じ十一月七日まで滿三年間のものである。

彼がスパイの嫌疑で檢舉されたのは一九四一年十月十五日の朝であつた。妻の英子は彼がどんな思想をもち、またどんな仕事をしてゐたのかをそれまで全然知らされていなかつたので、はげしい打撃をうけたらしい。

彼は檢舉された瞬間、もう二度と家へは歸れないと感じたらしい。しかし、出來るだけ家人に心配させないやうに氣をくばり、彼が居なくなつてからの妻子の暮し方や娘楊子の將來の方針などこまごまと書いてゐる。また楊子に落たんさせまいとして、やさしいなぐさめやげきれいの言葉をあたえながら、反面自分自身の淋しさをまぎらしてゐるよう思える。

さてこの本のあらすじを書けといわれても斷片的な手紙なので、まとめるのがなかなかむすかしくてうまいきそうにもない。たゞ讀んだ後でなんとなく感じたことをのべてみよう。

彼の妻子へあてた手紙は、一緒に暮してゐる時には感じられない深い愛情が切々と綴られていて、これを讀んだ妻の感動はどんなにか大きかつただろう。

手紙の内容は、わかり易い言葉で、妻子の今後の暮し方について細かに注意をあたえながら、自分の心境や獄

てゆくまで眞紅の炎に包まれていつた。そしてその云う時に多くは、その上空を白く咲いた花のように落下傘がゆれて流れてゆくのが見えた。

趣味と必要との両方から毎日一生懸命にはげんだ畑作りもその冬は特に出来がよくて日溜りに作つたキャベツの固く巻いた頭が霜にやけて美しい紫色に變つたのを、ほの／＼とした氣持で母と毎朝霜の降りた畑に立つてながめたりしたのもその頃のことだつた。そして防空壕のふちに植えたクロツカスがまだ他の花の芽も動かない内にちよつとのぞいた針のように葉の間から黄色い蕾をのぞかせたりすると、それらの畑に、昔のベッドやポーターのある緑の芝生が覆いかゝつて来るような氣になつたりもした。そして日當りの余り良くない庭のすみに移されたチューリップやヒヤシンス等の球根や様々の宿根草を何時か又舊の處にもどせる時もあるうかと思ひながら手入れをするのがひどく樂しかつた。又ひまさえあれば、飛行機を作つては霜どけの下の田んぼに行つて飛ばした。數ヶ月後の運命も知らず、考えようとさえせず、平おんな家庭内の家族の愛情をいつばいに受けて、不自由でこそあつたが氣樂な満ち足りた毎日であつた。

僕だけは、家が郊外だからと云う、唯それだけの理由で何時までも安全だと決めこんでいたが、大人達は大人達でやはり萬一を考えてか二月も半ば過ぎる頃から姉の疎開を急ぎ始めた。三月に入つて話はどう／＼進み池袋に住んでいた叔母と品川の親戚とが母の代りに入ることになつた。やが

て都心への最初の空襲が三月九日の晩に行われた澁谷、世田谷の邊りから中野へかけて空は赤くそまり夜目にはそれがひどく近く見えた。幾十の飛行機の爆音は暫らくの間空を覆つた。移つたばかりの叔母の家は焼けてしまつた。

この空襲にせき立てられるように、下旬には母ととも姉は田舎に發つて行つた。荷物を持つて僕と兄が上野まで送つて行つた。よごれた構内は暗く、改札口の前には行先別に分れた人々がいつばい並んでいた。その人々は皆大きな荷物を持ち、或者はその上に腰を降し、或者は床にしいた新聞紙の上に居きたなく座つていた。汽車を待つ幾時間もの間腰かけていたトランクの上で何回か夏休み、冬休みの旅行を想ひ出していた。母や姉は口數少なく色々注意したりはげましてくれたがその度に大丈夫だよ／＼とくり返した。そして心の内では何かすねたような氣持になつてそのような言葉が聞き度くなかつた。そして自分もあまり話したくなかつた。行列や高い天井等を見つめながら母達の苦勞を思つた。唯無性に淋しかつた。改札の始まる時間が來た。今まで座つていた人々は一齊に立上り列がざわざわとゆれると流れ出した。怒聲のように制止する驛員の聲は何んの甲斐もなく殺到する人々がせまい入口にひつかゝりふき出して吾勝ちに客車のドアに飛びこんでいつた。うまく座れ、はい／＼がと思ひながら、そしてつまらない留守の間も唯間違つたことだけはすまいと思ひながら強いて笑つて見送つた顔が、走りながらふり向く母達の顔に引きつた。

中の状態を知らせている。そればかりでなく、一緒に暮しているときは何も語らなかつた自分の思想を今こそ理解させようとして、自分が今まで讀んだ本や考えた事をこまごまと書いている。そしてこういう考え方や思想に共鳴してくれるように一生懸命つとめていくことが、この手紙の一貫した大きな目的であるらしい。

僕も彼の讀書欲の旺盛なのに驚いた。この手紙に書いてある彼が獄中で讀んだ本だけでも數えきれないほどある。それにもましてその一つ一つをよくかみしめて、深く突つこんだ讀み方には感心した。

彼はスパイの嫌疑で檢査されたと前に書いたが、詳しくいうと、彼は日本の政治、經濟をはじめ軍事上の秘密をナチスドイツの日本大使館員であつたゾルゲ(コミンテルンの重要人物)に通報したといふのである。當時ゾルゲ事件としてさわがれ、尾崎は國賊とののしられた。しかし今日になつて、この本を讀んでみると、彼は帝國主義日本、軍國日本、このような日本がほろび、國民の日本になつたことをねがつた反戰主義者であつて軍のえらい人達と正反對の思想の持主であつたことがわかつた。

しかも反戰のため身をもつて軍部と勇敢に戦つてとう／＼絞首されたのである。この勇氣があればこそ、死を目前にひかえて落着いて本を讀んだり、この本にまともなられたような手紙がかけたのだと深く考えさせられた。彼が判決を受けたのは、入獄して一年後のことである。その判決の中では、彼が國民に對して罪をおかしているから命をもらつて國民にわびようといふことになつて

いる。彼は、それを事もなげに手紙の中で語つていく。彼がなにをしてきたかを彼はよく知つていく。そして國民がいつの日か彼の思想や行動を理解してくれることを信じきつていたようである。判決が下るまで、彼は今後の貴重な人生を國民のために生きぬくつもりだと力

やがて汽車は出ていつてしまつた。ともかくもほつとして家に歸りつゝいたその夜は十一時を過ぎていた。

留守居をかねて一緒になつた親せきは片方は母方の叔母叔父とその娘、片方は父の従弟に當る家の小母とその娘とで、どちらも家とは特別に親しい關係にある家だつた。その上叔父と云うのが氣の置けないこつけない人だつた。しかし何時の世にも利害に左右され、或は感情に動かされ勝ちなのが人と人との暮しの常である。精神的にも物質的にも不自由を極めた。そればかりでなく將來の見通しもつかず、唯半ば惰性で、その日／＼を送つて行かなければならなかつたようなその當時では、一つ屋根に住む三つの家族の間に表向きではないにしろ様々な大きなギヤツプが生ずるのに不思議はなかつた。赤ん坊の時から十幾年もそのよくな家庭内のいざこざの片りんさへも知らず、想像もしなかつた僕には、それが夫々の家と思う大人達の掛け引きだと云うこともはつきりは分らなかつたが、それだけにその何んだか分らない不安や不満が、たえ難い氣持となつてつきまとつた。日が経つにつれて何時かそのような氣持を物事に熱中してその間だけでも忘れ去ろうと勉めるようになつた。しかしその思ひは廣く根深く心を占めていた。

春雨の煙る日の午後、といの穴から雨水がバルコニーに置いた用水桶に落ちて波紋を立てゝいた波紋は次々に重なつてふちに寄せていた。何時空襲があるかわからないから水を切らさないように

貴男達で氣を付けていなさいねと云われたのを、思い出すともなくその波紋を見てみると、母の姿がしきりに目に浮んで來た。雨が少し激しくなるといからの水もバシヤ／＼と幾條にもなつて落ちて來てひまつはガラス戸に散りかゝつた。うす暗くなつて雨にかすんだ櫻上水のあたりで燈がともると、いつそ味氣ない想いに沈んで行き、やがて食事を告げる階下の聲にもすぐに立つて行く氣になれなかつた。

戦争のこと、空襲のこと、全てはつきりと見通しのできぬことは一つもなかつた。そしてだん／＼何事にもひかえ目になつていつた。やがて、はつきりした目標のないことに努力するのがいかに無駄なことであるかを考へ始めるようになり、いつかその努力が不可能なことを知つた。

無爲な日々の中に、しかし外の狀勢は刻々變つていつた。すでに都内には數次にわたつて激しい空襲が行なわれていた。初めは、その慘狀を見聞きするにつけ一々身仕度から用水、馬穴等の用具の用意をおこたらなかつたが、回をかさねるにつれて要領がよくなり、着物のまゝ觀戦したりするようになつていつた。しかし唯一人残つたすぐ上の兄も動員先の工場にとまつたりする日が多くなり又毎日通う井之頭の森の杉がどん／＼切り倒されその場で空襲で倒れた人々のおかんとなつて積まれるのを見ては、も早事態の極度に切迫して來たことを感じないではいられなかつた。そして平安だつた十五年の生活に一應の區切りをつけなければならぬ日が來たのは、遅い八重櫻が散り果

強く書いてある。判決が下つても少しも動搖することなく彼の考えは一層落着いた、しつかりしたものになつてゐる。彼は獄中でひどい病氣をしたが、このしつかりした精神でなおしてしまつた。僕は彼の強い立派な人格に打れた。

彼は共產主義者であつた。共產主義がどんなものか僕にはわからないが、彼は本當の愛國者だつたような氣がする。なぜかといへば、以前のような軍國主義的な祖國を彼のような考えをもつて救おうとした人々を當時の特高警察はねこそぎひつばつて獄中へなげこんだり、殺したりして、ついに祖國をわけのわからぬ戦争へかりたててしまひ、今日現實にこのような苦しいみじめな生活をしなければならぬのではないか。

彼は殺されることわかつてからでも、許された妻子への手紙を通して二度と戦争をしてはならない思想を一生懸命教へてもらうとしてゐる。彼はよき父であり、よき夫であるばかりではなく、平和主義者であり、愛國者であつたと思ふ。

ダフネ・デユ・モオリア著

『レベツカ』(若き娘の手記) 大久保康雄譯

高二 竹澤 七 百 子

私が最近讀んだ本の中でこの本が最も私を感服させたものゝ一つであつた。私はモオリアと云う女流作家について少しも知らないのだが、彼女の父は英國の劇界に不朽の名をとどめた人であり又祖父も小説家であつた所から見てもモオリアの才能も突然に現われたとは言えないわけである。「レベツカ」は上下二巻からなる長篇小説である。この小説はわけもない機會から上流紳士と正純な戀愛をして結婚した一人の貧しい孤獨な女性が少女から女になり更に人妻になるとゆるい經過の心理を探求



いその室で遊んだ幼時を想い出させて變に目についた。そして門まで白く浮いて續く砂利路を二度と見れないような氣がした。も一つしおり戸を開けて庭に出ると、途端に目の前が眞赤になつた。家の廻りに積んであつた薪からサンルームの屋根裏に火が廻つたのだ。夢中でかけぬける目に、闇と炎の間に白く苺のふみにじられた花がちらと入つた池の水は余り多くなかつた。それでも少しでも早く多く運び込む。新聞等で數知れず傳えられた火を消しとめた話の幾つかで頭の中を駆けめぐす。家の中も外も赤くなつて來た。何時か室の中には父と叔父のみとなつた。兄が荷物を出せと怒聲を。駄目だ。蒲團包みを庭先に轉がす。これ一つを消した所で、これ丈の人手と水とで廣い屋敷を防ぎきれぬものではない、一つ、二つ、三つ、高射砲の破片や焼夷弾が激しい音と共に落ちて來る、四つ、五つ、アルバムばかりをつめた行李に目をやる。再び甦ることの無い姿への愛惜の情にまじつて、更に激しい直撃の恐怖が間けつ的に身内を走る。逃げる。喧騒の中に誰か叫ぶ。誘われるように蒲團をかぶつて下の田んぼへ見について駈けた。木のはじける音、叫び聲、爆音、あらゆる音が一つになつて后を追つて來る。家族の姿を求めながら橋を渡り、畦道を走る。同じような人々黒い影が刻々に増して來る。彈もこゝまでは落ちて來ない。あらためて四圍を見廻す。櫻上水の邊からも火炎が上つていて暖い風が吹き寄せる家は——炎々と燃え盛る炎の中に黒く、骨ばかり残つた二階が坂の上に一番近く、今やくすれ落ち

ようとしてゆれている。父も親せきの者もおい／＼集まつて來た。口數少なくせめてもお互いの身の無事を喜び合う言葉が交わされたが、すぐに名々沈黙に歸つて長い間炎の我家を見守つた。藍色の暗い空に狂う炎は莊嚴だつた。愛惜とか別離の情は不思議に起らなかつた、まして明日からの生活に思い及ぼす筈もなかつた。今經驗して來たばかりの興奮と強い刺激に平常の思考力は全く失われていた。唯明日から始まる、より變化のある新しい生活への期待が頭にある全てであつた。それは又、平常のより人間らしい生活への近接を本能的に感じたものだつたかも知れない。二階の棟木が焼落ちて柱が傾き高く火の子を上げてくずれていつた。近所の家も同じ運命にあるからだろうか、ほとんど他人の家の火事を見るような氣持で、或時は炎とたはむれる悪魔の亂舞を見るような、又或時は何か身に迫る神秘的な美しさを感じながら、平然とその経過を見つめていた。やがて川に近く残つた家の炎はおさまり上水の恐らく車庫だろうと思われれる邊の火も衰えて、四方からこの低い逃げ場に吹き込んでいた溫氣を含ん風が止んで行き、初夏とは云え眞夜中の冷氣が人々を我に歸らせた。

長い夜の明けるのも待たず變り果てた家にもどると消すものとしてなく、燃えるにまかせて燃えた家は、柱の一本さえも残してなかつたが、くずれ落ちた瓦の山から發散する熱氣に我々は暫らく近づくことが出来なかつた。庭のしげみに轉がしたあの蒲團包みは何事もなく僕達はその上に休ん

てそこには一筋の余地も見出されぬ程豊富に寫し出されている。しかしこの二大小説を見ると兩者は完全に對立している事が明らかである。尤も私はこの二つの小説をほとんど同時に讀んだものだからその差がむき出しに表わされてしまふのかも知れない。「風と共に去りぬ」はごく大衆向きであつてトルストイやドストエフスキー等の難かしい人生論、「如何に生きるべきか」とゆうのを讀んだ時と異り、現在にあつてそれを「如何に生きるべきか」を教えている所にアメリカらしきあふれてくる。「風と共に去りぬ」はあらゆる條件の中に立つ人々がそれぞれの場合に如何に自分の道を過ぎて行くかを語つてゐるが、「レベツカ」は一つ一つの個人をいろ／＼の角度から細かく觀察していて前者に比べると實に落着きが溢れている。私はモオリアの「レベツカ」の方がかえつて考えさせられる點が多かつた。とにかく一般大衆に評判の高い小説はその作品の底に流れているヒューマニテの暖流の波みとり方によつて異なるのである。つまりこのヒューマニズムの精神こそ、その小説に何十万とゆう讀者をひきつけ遂にベスト・セラーならしめた秘密が存在しているように思われる。

で夜の明けるのを待つた家を限界として西永福と永福町と夫々の驛の方に放射狀に爆撃を受けているように思われたとして留守だつたとなりのK家はその庭に幾つかの焼夷彈を受けたゞけできせき的に助かつていた。そして近所のS家とF家の人々と共に、夜をてつして歸つて來たK氏の好意で朝の食事をとることが出來た。誰も余り多くは語らなかつた。僕はひどく眠かつた。K氏は更にその一室をかそうと快よく申し出られた。僕達は直に最大の感謝をもつてそれに従つた。

赤茶けた瓦の上にゆらくと昇つた太陽は何時までも赤く鈍い光を放つていた。

# 正しい説をつらくぬ教育

松本正雄

岩手便り 二回生 須川 力

私の家では、明星の卒業生を二人出している。今も明星の生徒が一人いる。明星とはこんなに關係が深いので私は明星學園をまるで自分の學校のように思っている。

もともと親として自分の子供をある學校にあげるといふのは、その學校をよい學校だと思ふからだ。私も明星の教育方針が私の教育についての考えとちかいから、自分の子供をそこへ入れたのである。

明星の生徒はのびのびとしている。明星では子供たちを、既成の權威というようなものの前に「ビクビク、ペコペコ」させないで、少し行儀が悪いと思われぬくらい、めいめいの考えをのばすようにしてきた。私はそこが好きである。たゞ好きだというばかりでなく、それが今の世の中では

## 断片録

人間の發明の叡智や、人間性の自覺の微妙な尊嚴や、人間の生の中に咲き出る善い花々である。人類の恩人たちは、そうゆう花を咲かした人々である。

★ われわれの生はいかにささやかなものに見えても、しかし、われわれの生を中心は、宇宙の中心と一致している。

大切なことだと思つている。

昔の人が太陽は地球のまわりを廻るものだと信じこんでいた。だから地球が太陽のまわりを廻るという説を述べるのは大へんむずかしいことであつた。しかし、いくらむずかしいことでも、正しい説はつらくぬかなければならない。

教育の大切な役目は、子供たちを正しい説をつらくぬく信念や勇氣を持つ人間になれるようにすることだと私は思つている。明星は今の世の中ではその點ですぐれた學校の一つである。

私の明星に對する「のぞみ」をきかれたら、私はいつでも、こういう明星の教育の方針を生徒も先生も一緒になつてますますのばして行つてほしい、とはつきりいうことができる。

片山敏彦

★ 「私が虹を見上げると、そのとき私は虹のまんなかにいる。私から一マイル離れたところで同じ虹を見上げている人にとつても事情は同様である。」  
★ エマソン

★ 自由と秩序とは、音樂に於いては同じ一つのものである。

「明星」が二十五週年を迎えると何つて、今昔の感に堪えません。

私の勤めています緯度觀測所も今年丁度その倍の「五十週年」目に當り、十月三十日に記念式典を擧げることになりました。

所がその準備として、資金募集のために盛岡で、「天文展覽會」を開きました。盛岡は石川啄木ゆかりの地で盛岡中學、今の盛岡高校の天文部の生徒が十五センチの反射望遠鏡を出品しました。

私も盛岡測候所に泊つて、今の準備やら何やら致しましたが仲々好評で、いくらかでも天文や氣象に一般の關心が向けられたのは、本當に嬉しい氣がしました。「宇宙の驚異」という今から二十年も前に作られたドイッの天文映画も上映しました。その中に天竺船アクメ號が彗星旅行に出かける空想圖が出てましたが、私は明星にいた頃「月世界旅行記」を讀んだ思い出をなつかしく思い出しました。しかし、もう現代科學はこれを近い將來のことに迄押し進めました。電波の技術が進んで、レーダーが月面に迄到達して反射して來ます。ロケット飛行機の發達はますます「月世界旅行記」を現實たらしめようとしています。

私は一介の天文屋ですが、一度でも月や火星、出來たら土星、に迄行けたらと思ひます。望遠鏡でのぞく星の個性的な瞬きには、時々胸躍る親近感が湧きます。

「星の子」——星の光電子が、きら／＼と望遠鏡にとび込む迄に何百年の長い年月を辿つて來ています。

私達の眼前にこの大宇宙が開放されていることに先づ感謝せずにはいられません。もし、星がなかつたら人間の歴史はもつと變つていたでしょう。「人間の發展、人間性の形成にあの夜空の星の美しさが何かしら影響していたことは否めません。

カントの哲學はこの星空の美しさに、道德律を想起しました。アンデルセンの童話に、夜空の星が落ちて少女を救う美しい場面がありました。測候所の屋上で、日光を浴びてダンス・パーティーが

☆ 各人は無限の内容の可能性を持つ小宇宙である。この可能性を各人が自己のサムシングを立派に仕上げようと努力する道が教養の道である。

☆ アツテイラは征服したが、ゲーテは創造した。アツテイラは、侵略し、領土をひろげ、やがて亡びたが、ゲーテは全的人間的に文化を高めた。

アツテイラを人類の恩人として思い出す人はないだろう。ことし、世界はゲーテの二百年祭を祝う。ゲーテの生命的な調和の精神の中に、人人は依然として、世界の未來のまぼろしを見るからである。

☆ 限度の中で、生の調和ある實現を、全力的に努めることが文化の道であり、それは文化と生とを一致させる方法である。

☆ 平面の世界にとつては制約と見えることが、立体の世界では、立体そのものを成立させる条件であることができる。

☆ 自由への愛は、人間的により高い、より新しいより精妙な、より力づよい歡喜をつくり出す方向への愛だ。

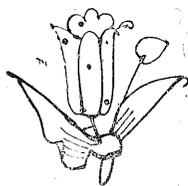
☆ 「頭の上の星空と、心の奥の倫理律とが、私にますます畏敬の感を感じさせる」と言うカントの

言葉に、最も深い同感を示した人の一人はたぶんペーリーヴエンだろう。

ロマン・ロランが、その死の前年(一九四三年)に發表した著書「第九シンフォニー」の中で私は昨日、次の言葉をよんだ――

多くの人々の本能は「第九」の中に、過去をではなく未來を、おぼろげに感じ取っている。この音楽は、未來の、ほとんど神話的な先驅であるように思われる。なぜなら、この作がなるほど人類の偉大な一時代の一結果であり、理性と愛とに對してあの時代が持つていた憧れの一つの仕上げであり、そして、あの時代は今では過ぎ去つたのだとは言え、今われわれが通過しつつあるこの鐵の時代の中で、あたかも沙漠の中に見捨てられてゐる一つの寺院のように、「第九シンフォニー」は、偉大な「夢」の不滅の證言をわれわれに手渡している。この「夢」とは理性と歡喜との中で、人人の友愛によつて建てられる、地上の神の國の「夢」である……

(一九四九年八月二〇日)



有りました。私はタンゴだけしか出来ない、ブルースは半覚え、しかし踊りました、そしてワルツをその夜どうにか覚えしました。ダンスの好きをその夜程感じたことは有りません。私はどうも懶怠で、今迄「ダンス」如きは男子のなすものに非ず、と思つていました、却つて他人の踊るのを見てゐると實に快いリズムが目につきます。

ハーバート大學の學長シャブレイ博士は、ダンス・パーティーが御好きでダンスに出席しない天文臺員は叱られるとか伺いました。星のことからダンスにとびました。が次に宮澤賢治に行きます。彼は花巻の出身ですが、私も時々彼の住みなれし櫻ヶ丘の附近に行つて見て、北上川のゆるやかな勾配に彼の詩の泉を見付けたような気がしました。文化的に低い岩手乍ら、彼のような宇宙的な詩人 Dichter を生んだのも偶然ではないと思ひます。

高村光太郎先生は花巻から更に山奥の太田村の山の中に炭樵夫の住むような處に一人庵を結んでおられます。私は、一度「ボラーノの廣場」の會員として、先生を訪ねました。

ルバシカ風の上衣をきた白髪長い顔した先生は、實に漫談の妙手でした、先生も賢治を敬愛される詩人の一人です。賢治は人間ばなれし、啄木は人間的すぎました。「雨にも負けず、風にも負けず」という詩は有名ですが有名になると標語化されて作者の眞意からはなれてしまひます。賢治が花壇作りの名人だつたこと。明星にいた頃照井先生が花壇作りに熱心だつたこと、それでこの聯想で充分でしょう。

盛岡の北の福岡町に日本の科學界の大先輩「田中館愛橋」先生がおられ、九十四才の今日も上京されます。先生は私共の「緯度觀測所」の生みの親で有られ、木村榮先生の又先生です。

明星の皆さん、今迄明星人で私の所に不意打に來られたのは同期生の中川晶ちゃんだけです。どうか東北本線で少なくとも仙台迄來られた方は東北大學の武者君(北山町)と私の所に立ち寄つて下さい。明星東北支部でも結成しますかな、どうも東北には少ないのですが、では駄文あしからず。

## 日記から

夏休のはんせい 初三 櫻 木 瑞 生

ぼくは、この夏休の間たくさん工作を作ったけれどその間にはいろいろなことがあつた。お父さんに「船はこんなによこがとんがつていないよ。」といわれたり、お母さんに「工作を作るのはいいかげんにやめなさい。」といわれたりした。クインエリザベス號を作る時はうれしかつたが、お父さんやぶりき屋のおじさんに船のその作り方をおしえてもらった時は、その時はなんとも思わなかつたがあとで大へんだつたらうなと思つた。

學校がはじまるのはとてもうれしい。工作を作つていろいろうれしい。一ぼんすきなのは學校へいくこと、つぎは工作をすること、つぎには本をよむこと、つぎは算すうだ、こういうじゆんじよだと思ふ。お母さんになんかいとなくぼくは家にとじこもりすぎるから學校がはじまつたら、思いきりあそんで思いきりべんきようしなさいといわれた。學校がはじまつたらそうしようと思ふ。

ひろしちゃんの家にとまりに行つた時もおもしろかつた。動物園にいつたり、科學はく物かんに行つたり、海につれていつていたじたり、とてもたのしかつた。

ぼくは日記に、まんがや星のけんきゆうを書こうと思つたけれど、とうとうそいうものを書くひまがなかつた。星はすいぶん見たのだけれど、

アンドロメダ・カシオペア・大くまぎ・子くまぎ・北きよく星さそり・おちかみ・天の川などもつとしらべて書いておきたかつたけれど、できなくてざんねんだつた。ほかに夏休の前にたてたよいでできなかつたのはデッドボールを二三かいしかやらなかつたことぐらいで、ほかはよいてどおりだいたいできたと思ふ。

夏休中ためたお金は百八十三圓だ。お母さんはぼくに二百にしてあげようといつたので、こまかいお金と百圓さつととりかえつこをした。ゆうびんきよくにあずけたお金をまぜると四百五十圓になつたわけだ。

十月三日 月 はれ 初三 高田佳代子

今日學校から歸つて吉祥寺におつかいにいきました。驛の前にめくらのおじさんとちんばのおばさんがうたをうたつていました。かわいそうなのでポケットにあつた一圓さつをはこの中にいれてあげました。いろいろの人がいれていました。おじさんはめくらおばさんがちんばその上四つぐらいの女の子が一人いるのでよけいかわいそうでした

十月四日 火 雨 初三 小 倉 義 弘

あしたはえんそくだ。みたけへいくのだ。家に歸ると、走つたらすべつところんだ。家について見たらすこしようふくがぬれていた。「たどいま。」といつたけれどもへんじがない。もう一ど「たどいま。」といつたがやつぱりへんじがない。だからぼくはどん／＼中に入つた。お母さんはい

た。やつと氣がついたらしく「おかえりなさい。」といつた。そして「にわを見てごらん。」といつたので見たらてる／＼ぼうずが二つ木にぶらさがつていた。弘ちゃんとお母さんが作つたそうだ。色をぬつたのは弘ちゃんらしい。あしたは天氣になつていいな。

十月四日 火 雨 初三 小田原一男

きのう、ひよこをかつてきました。とても元氣です。一わ六十圓もします、四わかつてきました。はこから出てあそぶのはたいいて元氣よくた／＼みをつきます。ただ一わが三ばにいじめられてばかりいます。よくぼくの手をつついてあそぶのでおもしろくてたまりません。さむい時は、はこの中に電氣の二しよくを入れると、そのそばによつてあたつています。ほんとうにかわいいのでぼくがつかぶとをかぶせて見たらじつとかぶつていました。これからまい日ひよ子日記を書こうと思ひます。

に つ き 初二 うちだしんいち

六月二十七日 (月)

ようやくおてんきになりました。にわのばらの花がきれいにさきそりました。ももいろの小さなかわいらしい花です。すこしおつてかびんにさしました。

六月二十八日 (火)

學校からかえつてみると、ほとけさまに、すいみつがそなえてありました。ぼくはことしになつて

はじめてみました。お三時につづつたべましたすこしすづばいようなあじがしました。

七月一日 (金)

きよう、かいをうりにくるおじさんが、しじみといつしよに小さなかにを二ひきもつてきましたお母さんがしじみをかうとそのかにをばくとおとうとにくれました。

七月二日 (土)

學校からかえつてから、さとうくんとくわがたむしをとりにいきました。プールのそばのあながあいた大きな木にいました。二ひきつかまえて、二人でわけました。

花 火 初四 明 地 宣 子

丸子多摩川へ花火をみにいつた。自動車でゆくとちゆう、色々なけしきがみえた。多摩川の近くに行つたとき、へいに自動車は通行止と書いたふでが立てかけてあつて、おまわりさんがいたのでそこでおりました。多摩川のどてに登つた。少し歩いてふと後を見ると、お月様が西に沈むところが水に寫つてきれいだつた。

やがてあたりがうす暗くなつて、いよいよ花火がはじまつた。はじめにらん菊というのをやつた赤や青や色々な光の線が、空のひとところを亂れながら散つた。まだ一回もみたことがなかつたので、とてもうれしかつた。らん菊はずいぶんつゞいた。色々な光が空に上つては散り、消えた後に雲が白つぽく浮かんでいった。私たちは花火があがるたびに、大聲で、「一つ」「一つ」とその數をかぞえた。次にはしかけ花火がはじまつた。しかけ花

火は上にはあがらないで、川の面に近いところでひろがる。

土手でものすごい音がした。いつしよけんめいみていると、ふいに頭の上で「パン」とすごい音がして大きな花火がさくれつした。一つの花火からいくつもの子が出て、空いちめんひろがつた。あとで聞くと二尺玉という一ばん大きな花火だつた。そのほか、花火からむかでのようなものがたくさん出たり、たてやよこにひろがる花火などもあつた。しかけ花火は、ナイヤガラや瀧や、家の形になつたりして、たいへんきれいだつた。

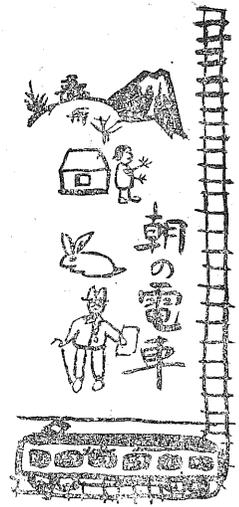
おそくなつたので家にかえることにしたが、いつまでも見たいので、何んども立ちどまつてふりむいたりしてながめた。時には音をきいてふりむいて、いつまで待つても花火がみえないので、「ナアーンダ、光よりも音の方がおそいんだづけ」と大笑いなどした。

たま川ゆき 初一 たかはしあき子

あさ六じにおきて、かおをあらつてごはんをたべました。りつくさつくにおべんとうをつめて、すいとうに水を入れて、みんなじゆんびができたので、りつくさつくとすいとうをかけて、みやまさんのうちえいつてあげました。のり子ちゃん「はい」といつてでてきました。いまおべんとうをつめていくからまつてといつておへやへはいつていききました。すこしまつてあげたら、おばさんが「おまちどうさま」といつてでてきましたのり子ちゃんもこゝして、リックサックをか

たにかけてでてきました。「いつてまいります」といつてふたりできちじようじのえきにいそいでいつたら、いのかしらのさかでいぬがかけてきたのでわくわくかけていききました。えきについてみるとだれもきていなかつたのです。

すこしあそんでたら二年生のあんどろさんがきて「まだはいよ」といつたので、もつとあそんでようとおもつてたら、ときわやまさんがでんしやからおりてきました。「まだこない」ときいたら「まだ」といつて、二年生のあそんでいるほうにいつてしまひました。そのあとから二年生がいつばいでんしやからおりてきました。そのあとからせんせいがおおきなリックサックをしようてかいだんをおりてきました。わたしは「あ、せんせいだ」といつてせんせいにとんでいきました。「さあゆりぐみの人もいらつしやい」といつてむこうへわたしたちのきつぷをとりにいきました。しばらくたつたら、むろたに先生がでんしやのほうむからおりてきて「まいへならえ」といつましたので、わたしもまいえならえをしました。「こつちへいらつしやい」といつてほうむのかいだんをのぼつていききました。「こんどあなたたちのるでんしやはなんのですか」ときかれました。みんなは「ていとせんです」とこたえました。そのうちにでんしやがきました。せんせいは「おしたりさわいだりしてはいけませんよ」といつました。みんなはしすかにはいつていききました。なかにおきやくさんがいつばいでした。これからいよゝしゆつばつです。



夜明け 中一 佐藤 艸二

朝五時、家の時計が五つなつた。あたりはまだ暗い。隣でねている姉の寝息がやすらかそうに聞える。猫はまだぼくのねまきの中で丸くなつている。猫を出してからそつとおきる。どこかで鶏がなく。朝の冷気がしんしんと身にしみる。上からジャケツを引つけて外へ出る。中で猫が鳴いている。しばらくすると大鐵板のような空の東の方から一すじの金の矢が走る。だがまだ星はまたたいている、だが光はにぶい。ぼくはサンダルをひつけて道を歩く。あとから猫がついて来る。どこかでまた鶏が鳴く。九月なのに息がしろく見える。隣の大銀杏の梢に星がひつかかつている様に見える。

また東の空を見ると金の矢はすい分ふえている朝もやの中に家が黒い船のようにどつしりおちついている。金の矢がだんだんふとくなる。ぼくは猫をだいて家の土手にすわると土手に植えてある芝の露がツボンについて白く光つている。さつき鳴いていた鶏も今は沈もくを守つている。ぼくはその全宇宙の静けさの中にしばらくとけこんでいる様に思える。街燈が白くぼんやりと光りその下

に二三匹の「が」がもがいている。通へ出るとや

七日ぐらい前であつた。とつぜん白が、ものお

つとどこかで雨戸をあける音がひびいて来る。

き(もとの家だつたので母家とくつついている)の中に入つて、そこから出て来なかつた。

ぼくは何時頃だらうと思つた。東の空は光の大洪水であらゆる地球上の光がみんな集つた様にも思える。その静けさをやぶつてなつとう賣の聲がひびく。足はいつの間にか家の方にむいてる。どこかの時計が六時をうつつている音が聞える。

八時頃か、ものおきの方で「ギヤオーギヤオーギヤオー」と三度みような聲で鳴いたと思つたら急に静かになつた。僕はそこに、いろいろな容器類があるのを思い出して、どこかを突つて、死んでしまつたかと思つた。

やがて大きな太陽が木のかげから顔を出した。

翌朝心配して「白や」「白」「白」等と呼んでいたら、ひよつくりと白が出て来た。どこもけがをしていないはないが腹のへんがすこし赤くなつていた。今迄ふくれていた腹もへこんでいた。「子猫を産んだんだ」と、僕はとつさに思つた。「何匹だらう」と思つたりした。

愛猫『白』 中二 山本 有恒

「白」と云うと「ニヤーン」と鳴くかわいい猫。その猫は、一ヶ月ぐらい前、そうだ、くもりの日の夕方であつたか、二階の丸い窓から入つて来たので、僕が餌をやつたのがきつかけとなつたのであつた。

猫の子を見ようと思つたが、あまり猫の子を見ると、親猫が、食べてしまふと云うことを、だれかに聞いたのを思い出して、その時は見るのをやめた。

初のうちは、夕方来ていた。きつと夕方餌をやつたからであらう。

三日ぐらいまで見ることが出来なかつたが、ようやく子猫を見るチャンスが来た。

あんまり人なつっこいのと、ねずみをよく取つてくれるので、猫のきらいであつた父母も、いつものまにかかわいがる様になつていた。白がねずみを取つた時は、僕達の寝ている所へ来て、「バリバリ」と音させながら食べるので氣味が悪い。白の方では、「ねずみをとりましたよ」と云わんばかりに見せに来るのだらう。

それは、白が外へ出てしまつたからである。急いで、懐中電燈で見ると、二三匹が見えたので、大きさやどんな色をした猫かを見てから、白が来ないうちに早くかえらうとしたら、もううしろに白が来ていたのでギクリとした。その時の白の目は、今でも忘れないが、心配といかりとで、すぐ大きな眼をして僕をにらみつけていた。僕は思わす「子猫を取つたんじやあないよ」と云つたら人間の語が通ずるとく「ニヤーン」と云つて、

白は、しまいは、佐藤さん(白の家)にかへらなくなつてしまつた。

十日ぐらい前に氣がついたのだが、白の腹が大きくなつてゐるのに氣がついた。佐藤さんに聞く

と、「もうすぐ子供を産む」とおつしやつた。

人間の語が通ずるとく「ニヤーン」と云つて、

おとなしくなつたように感じられた。それから白はあまり外へ出なくなつた。

それから四日過ぎた今日、秋分の日の一十時ごろに、かみなりがなつた。それから一秒ぐらいたつた時、白がへんなものをくわえて來たので、「白は又ねずみを取つたよ」と弟に云うと「どれ」と云つていたが、「猫の子だよ」とびつくりして云うので、見ると白い子猫が死んだようになっていた。「どうしたのだろう」と思つて見ていると、白はあつちこつちと、うろつきまわつていたが、廊下のすみに子猫をおろして、白もよこになつた。今迄死んだようになっていた子猫は、白のおなかにくつついて、おつばいを飲みはじめた。僕はやつと安心したが、又白が子猫をくわえて、あるいたので二度びつくりした。

こんどは二階のすみの方におろして、ちちをのましていた。

ほかの子猫は、どうしたのだろうと思つて、巢をのぞいて見ると、あとの二匹のくろと白のぶちが、へんな聲を出して、鳴いていた。しばらくすると、又白が來て首をくわえて、二匹も二階に持つて行つた。

猫の持つて行くのはうまいもので、いつもきずがついていない。次の子猫をくわえて來る時間が長く五分ぐらいたつていたので、もうわすれてしまつたのだらうと思つて、つれて行つてやろうとしたら、やつと、白が來たので急いで僕はかくれて、様子を見ていた。まず始めに耳をすましてそれから「ニャーオ」と鳴きながら、入つて行く。

しばらくして出て來て急いで二階へ上つてしまつた。その早いことには、おどろかされた。「あつ」と云う間に、もう二階へ上つてしまつたほどである。僕も昔のしなないように上つて行く。そつと見ると、三匹が、いつしよになつて、白のちちを、のんでゐる。

そのかわいいことは、たとえようもない。しかし、その子猫も、白も、佐藤さんの所からもうすぐ、うけとりに來るのだ。

僕がこの作文を書いているそばで、なにもしろない白と子猫は寝ている。

「では白よ、子猫が、大きくなるまでさよなら。」と、ねている白に僕は云う。

#### 今日 日 初二 あきれい

今日、ゆうがたおふるにみずくみをしていた時おねえちやんが、ピアノをひいていました。

三じになつたのでお母ちやまがシロツプをもつていつてあげました。ふとピアノの音がしないと思つとおねえちやんがものすごいいきおいで走つてきて

「お母ちやまが小さなとりをつかまえたわよ」といいました。わたくしはおふるのみずくみをやめていそいでとんでいつてみました。

お母さんの手には、小さなとりがふるえながら小さくなつていました。それはせながちやいろとみどりをまぜたような色でおなかやむねはきいろく、こまつちやくれた顔をしたこすずめくらいの大きさのとりでした。

おばあちやんが「とりかごがものおきにあるからとつてきていれなさい。」といつたのもつてきていれました。とりはばたばたさわいでにげようともがいています。「なにかたべるものがないとしんじやうね。」とおねえちやんがいました。なにをたべるかわからないのでおこめのぬかやむじなどをやつても、ばたばたしてたべようとしません。あたしはおみずをもつていつてあげてものみません。

北川さんのおじさんになんていうとりかさいてみました。がなまえがわかりません。

「ばんくすならたべるかもしれない。人がみているとこわがつてたべないよ。」といいましたので、ばんくすをやつてとうくからみていました。やつぱりたべませんでした。そのあくるあさ、おげんかんはきをしていると、きのうのことりが「ビビビビ」となきました。するとおにわのしだの木の上でおやどりが「ビビビビ」となっていました。「お母さんとかがむかえにきたのね」「かわいそうだからにがしてやらうね。」とお母さんがいきましたのでかごのとをあけてやりました。

ことりはうれしそうにでんせんにとまつて、「ビビビビ」となっていました。しばらくしてとうもろこしはたけのほうへとんでいつてしまいました。

朝の電車 中二 赤司田鶴子

學校に急ぐ學生たちの  
買い出し歸りのおじさんの  
むつとする人いきれにさえ  
ほつと息つくような  
冬近い朝の電車。

やぶれガラスもあらかたなおつて  
びつたりしめきつた車の中は  
すきま風さえ  
ピリツとほおに痛いようだ。

魚くさい石油かんをひざにかゝえ、  
さつきから

居眠りを續けるおはさんの、  
垢によかれた はだかの足に  
さむざむと

秋深いことが思われる。

今日も

重いかばんをつり上げ、

私は

むつとする人いきれの中を

學校へ心は急ぐ

冬近い朝の電車。

松の木 初四 塚田美美子

松の木はよい木だ  
風が吹いても雪が来て

こうろぎ 初一 原田 勳

ころ／＼こうろぎないていた。  
こうろぎさんはなにしてきたの、  
あそびにきたの  
こうろぎさんがながいおひげでなにしてる。

でん／＼むし 初一 福 富 秋 生

でん／＼むし

ごはんをたべて

かびんのまわりを

のそ／＼あるく

でん／＼むし

しずかにねんね

よるはぼくらの

まくらのそばで

ぶどう 初一 龜田 壽 夫

ぶどう ぶどう

ぼくのすきなぶどう。

ぼくががつこうからかえつたら

つくえのうえにのつていた。

ピーダマみたいだな、

あまくてちよつとすつばいな。

ぼくのだいすきなぶどう。

秋 中一 江 森 盛 夫

さらさらと木の葉が落ちる  
秋が来た。

キテイ台風の夜 中一 深山 和子

いよ／＼夕方になつて来た。暗くなるにしたがつて風も雨も強くなつて来る。私達は心配になつ来た。電気が消えると大變だと思つて、早目に夕飯をすました。雨戸をしめ寝床もしいてしまつた。小さい子供達は皆、床の中に入つておとなしくしていた。そこへお父さんが歸つて来たので皆はほつとした。電氣はとう／＼消えてしまつた。ロソクでは、持ち歩くのにあぶないので、お兄さんが井の頭の驛の前まで雨の中を電池を買ひに行つた。お父さんが「新聞を見ると十一年ぶりの台風だ。」とおつしやつた。雨戸はがたん／＼いゝもうその音さえ聞くのが恐しい。一番下の弟はこわがつてお母さんからはなれなかつた。でも小さい子供は皆眠つてしまつた。私は、ねられていいなアと思つた。お兄さんが、はあ／＼いいながら歸つて来た。電池をつける。それでやつと部屋が明るくなつた。こんな時こそ電氣がついていればなアと思つた。こんどの台風は、東風なので東むきの玄關は戸がはずれそうに風が吹きつけてくる。お父様達は物置からはり板を持つて来て、ななめにおいてしんばりにした。やつと、玄關のことが終つて部屋歸つて来ると、二階の方でもすごい音がするので、皆行つて見ると、二階の東むきのかべがおちてしまつてゐる。かべさえ落ちる。私はとても恐しい。なんだかまど／＼してしまつた。階だんはかべのくずれたので、いつばいだ。雨も風もいゝ吹こみ穴だと思つたように、吹きこんで来るのである。毛布やふとんなどをしいて、雨が吹きこんで来ても、それにしめらすようにしておいた。やつとそこを通れるようにして東がわをよく見て安全にして来たので、私達もやつと寝床についた。少したつと風はだん／＼南にむいて来て、雨戸がはずれそうになつた。私の家では

枝も幹もがんばつてゐる

松の木は神様がすきなのかもしれない

松の木に

よくすゞめが来てあそんでゐる

松の木はやさしいのかもしれない

でんききかんしや

初一 龜田 壽夫

でんききかんしやはすてきだな。

ぼくがっこうにいくときに

でんききかんしやとすれちがうと

ぼくはうれしくなつちやうよ。

すごいスピードまつしぐら

りゆうせんけいはなおすごい

だけど國立にはとまつてくれない

ぼくはすこしまらない。

夏みかん

中二 市田 恭子

「おすつばい。」

みただけでもつばのたまる夏みかん、

だい／＼色の大きなからだで、

机の上にごろりところがつてゐる。

厚い皮をむいて

上のたねをほろりとすて、

そのすつばいものにかぶりつく、

顔をゆがめ舌をちぎめて、でも食べる

すつばくても私はすき

こうやつて、椎の木蔭に

たゝすめば、去年の秋を

思い出す。

去年の秋も 母校の

椎の實かじつた 授業の合間、

今年の今日も太陽は

さびしく僕等に笑つてゐる。

母校の二階の教室の

窓からのぞいた 顔、顔、顔

みんなどうしてゐるんだらう。

銀杏の葉つばの散る向う、

白い富士山くつきりと

みえたあの秋なつかしい。

なつの海

初二 かみのかわまさる

なみが じやぶじやぶよせてくる。

しろいしぶきをたてながら、

あさからばんまでおどつてゐる。

ほんとにたのしいなつの海。

よ

る

初二 日高 昭子

くらいくらいよるがきた。

みんなおとこで にこにこねるよ。

おそらのお月さん、おほしをつれて、

おそらの上をおつかいか。

どこかのかねが

かんかん うたう。

ガラス戸がないので、いまにもたおれそうなので、皆で戸をしつかりおさえていた。こころへんをこんなひどく、襲つて来たのは十一年ぶりなので私達は大ききわきをして、兩戸をおさえたり皆で、わあ／＼いつたりしていた。風もだん／＼とすまつて来た。私は、安心していつのまにか、うと／＼としてあとにはなにもしらすゆめのお國に行つていた。朝お母さんに起されてはつと思ひ飛び起きた。

ゆうべ、台風があつたとは思はれないほど静かな朝だった。

## 家の猫

中一 岡田 美禰

家の猫はピーという名前です。

この名前は、お友達の家のかわい猫の名前をもらつたのです。

ピーは九月の始めころもらつてきて、今は少し大きくなつてゐます。

ピーは顔を見れば、かわいしいし、毛並も、そろつてゐるし、私は、大すき。ピーつてよべば、わかるのか、わからないのか、「ニヤオ」と、小さな、えんりよしているような聲でなく、二三日は、おとなしく、すみの方ばかり入つて、私達を、心配させましたが、だん／＼、家になれてきて、活氣づいてきました。

ピーは、寝まきのひもや、小さな、ごみにじやれて、とても困るくらいです。始めは、庭へおりののが、こわいように、戸の所で外を見ていましたが、こわいらしく、庭に行かず、お家の中のいろ／＼な物を持つて来て一人で遊んでいました。

ある日、私が學校へ行つてゐる間、ピーが、庭に、始めておりて、大きな猫が、二匹で、けんかをしていたのに仲間入をしようとして、そばで、せを丸くしたり、う

夜影の歌

中一 丹羽桂子

かやの中から、外見たら  
ちりちり降つてる星空に  
見上げるような、杉の木が  
一本いばつて立つていた。  
夜空を仰いだ弟は、  
小人が踊つていると云う、  
私は、サントのぢいさんの  
長い長いおひげだと  
云い争つて居りました。

夏の田舎道

中一 山口政子

夏の眞晝に私は帽子も日傘もささず歩いてい  
た。  
誰も歩いていない往來を時々ジープが通るだ  
け。  
汗がにじむ、ほこりだらけの顔をして私はとぼ  
くと歩きつゞけた。  
まわりの木も草もみんなほこりをかぶつてい  
た。

氷やの旗がひら／＼している。  
何處かで虫が鳴いている、  
にえ立つ釜の様なあつさの中でないている。  
大人達はぐつたりとして晝寝しているだろう、  
何處の家も聲がしない。  
遠くから子供達の聲がして來た。  
泳いでいるのだ、  
私は聲の方へあるいていつた。

だん／＼と霧がはれてきた。  
私ははつとした。  
私は一つの油繪にみとれていたのである。

さがみこ 初二 鴨居和雄

さがみこ、きれいにねむつてる。  
ふじさん、ゆきがつもつてる。  
ふじさん、あとからみえないよ。  
くもにかくれてみえないよ。  
ほかのお山はみどりだね。

さくらんぼ 初二 中澤久美子

まあるい、まつかなさくらんぼ。  
あまくて、すつばいさくらんぼ。  
おさらにいっぱいさくらんぼ。  
まあるいおさらにはけましよう。  
みんなでなかよくいたどころ。  
みんなでなかよくいたどころ。  
みんなでおいしくたべている。  
さくらんぼはだいすきだ。

夜 中 中一 大熊金雄

夜中、ふと目がさめた。  
台所の方、「ガリッ」と音した、  
まもなくその音もとまつた。  
今はたゞ時計の音だけが  
「カチカチ」となつていただけだ。  
えんがわの下で犬の子が  
「キユキユ」なっているだけだ。  
なんてしずかなのだろう。

なつたりしたのですが、相手にしてもらえなかつたの、  
だつて、お母様から聞きました。お父様も、お兄さんも  
私も、皆で、大笑いしました。そして、私は「ピーは、  
まだ子供なのね、始めて、お庭へおりたもの、でももの  
ね。」と、一人ごとのように、いつたのでした。

このごろ、ピーは、とても、いたずらをしてしようが  
ないほど、おちやめさんに、なりました。ピアノの上に  
上つて小さいお人形さんを、落して、ころがしておいて  
自分は、ひつくりかえつたり、飛び上つたりして、一日  
中遊んでいる日も、少くはありません。

又、ある時は、隣の家の、ごみすてから、さんまの頭  
をくわえて來たり、ころろぎを、取つて來る時も、あり  
ます。でも、犬や、自分より大きい猫が、來ると、飛ん  
で逃げて來ます。

そんな時は、いつも、窓の所で、じつと見ていて、犬  
や猫が、どこかへかえつて行つてしまつたと、木に、登つ  
たり、木の皮で、つめを、といだりしています。

ピーは、私、大すきです。それに、ピーは、とても、  
かしいのです。どこが、かしいというのではなく、  
なんとなしに、しぜん、小さな猫だという、かしてさ、  
かわいさが、あふれています。ピーは、今までと同じく  
元氣で、いたずらをして、遊んだりしています。



くりくり 初二 田中 公子

くりくりくりくりくりくりぼうず。

びかびか光るはだをみせ

くりはにこにこわらつてる。

いまおちたとおしえてる。

きんぎよ 初二 たちはなときわ

おうちのきんぎよは

きれいだな。

ひらひらおよいで

きれいだな。

いつもいづもげんぎでおよいでる

くろいおめめが

ばちばちしてる

かわいいな かわいいな。

油 繪 中二 迫水 祥子

深く山一面をおよつてゐる霧

その中の一本道を

私は一人で歩いている。

まるでそこはおとぎ話の山のような。

一本道の横には瀧がざあ／＼と

音をたてながら流れている。

その音がざあ／＼いうと

私まで その中にすいこまれそうだ。

霧の奥に うすく山の峰がみえた。

そこに一人 私と同じ人がたつていた。

私は大聲で「おーい」と叫んだ。

ある初夏の午後 中二 佐藤 暁子

「ただいまア」戸を元氣にあけるとしーんとした

しずまつた家の中は、空氣がしつとりと深くしず

んで、ちらちらと縁におどる日の光が不思議なほ

ど明るかつた。學校から歸つても、誰もやさしく

迎えてくれる人のない淋しさに私は、「母さんは

やつぱりいなんだわ」と、今さらに淋しく感じ

るのだつた。人氣のない茶の間をわけもなく、し

のび足になつてぬけて、私はおさえきれない淋し

さをふりはらう様に、わざとあらあらしくカバン

を机の上においた。それはむしろなげ出したと云

う方がいゝかもしれない。どさりと大きな音がし

て、カバンの中からお辨當箱がとび出し、鉛筆や

ノートがガチャ／＼となつた。一瞬時計の音もそ

のほかすべての音もきえてしまつて、家中がすつ

かりもとの靜けさにもどるまで私は机の前を動か

なかつた。庭のすみにだれかしゃがんでいた、私

はギョツとした。だがよくみればそれはまだ學校

に行つてゐると思つていた弟だつた。そういえば

机の上にカバンも帽子も置いてあつた。私は嬉し

い様なをして一寸恥かしい様な氣持で

「なアーんだ、艸ちゃんもう歸つてたの？」

と聲をかけた、けれど弟はその聲も聞えない様に

振り向きもしない。背中を丸くして丸がりの頭を

地面にくつつける様にして一心に何かしている。

足元にちぎれた草の葉が三、四本散らばつてゐる

のが何故か私の好奇心をゆり動かした。又台所か

らお砂糖でも持つて来て、蟻を見ているのかしら

と思ひながら弟の夢中な眞面目くさつた態度に引

きつけられて、私はそこを動く事が出来なくなつ

てしまつた。そのまゝで何秒か過ぎた。黄色い胡

瓜の花が咲いて明るすぎるほどの初夏の日の光を

見ていると、すべてがみんな眞晝の夢の様だつ

た。弟が急に顔を上げた。そしてくるりと振り向

くと可愛い、目をくりくり／＼させて、「あ、暁ちゃん

かア、今とつても面白い事してたんだよ、見にお

いでよ」と明るく誘うこの弟の面白い事には

ちつとも興味のない事も多いけれど、私はすぐ下

駄をつつかけた。弟のそばにいくと、しんとしみ

通る匂いがうすくたゞよつていた。

「なアに？ この匂い」と私はきいた。「あゝこ

れか、これはにらさ、ほらおしたしにして食べるや

つさ」弟はにこ／＼しながら細いつや／＼した葉

を私の目の前にかざしてみせる。「これをね、ほら

此の穴に入れるんだよ」弟はしゃがみこんだ。そ

こはあじさいが大きな葉をひろげたかげで、こも

れ日がちら／＼と美しいしま目をえがいていた。

わずかにしめりをおびた黒土に針でついたほどの

小さな穴がそこに一つあそこに二つ。ともすれば

これもれ日にまぎれて見えなくなつてしまひそう。

「これでどうするの」私はきく。「それはお後の

お楽しみさ」と弟はまんざらじょうだんでもない

様に眞面目に云つた。私はふと大道手品師を思ひ

出して笑いをおさめるのにすい分長なことかゝつ

た。三つ位の穴ににらの葉をつき立てると「今に

にら虫がつれるよ」と弟は目を輝かせ鼻の頭に少

あつめている様だ。何事にも熱中する弟の性質を思いながら私もなに出るかわからない穴をしばらく目のいたくなるほどみつめていた。長い初夏の日は静かにたつて行く。一秒—二秒。小さなあくびをかみころして私の心はもうとつくに虫の穴をはなれていく。ひらきかけの百日草に、蝶の白い羽がまぶしかつた。弟の白いシャツに日の光がこぼれて生々した緑をとうしてくる日の光も、風もみんな緑色の様だつた。「緑の季節」本當にそうだ。

「さあいよ／＼つるぞ」耳元ではずむ聲をわざと小さくおさえた様な弟の聲、私はよそみをしていたのを、弟に知られない様に、あわてて目を穴にもどした。弟の手がにらの葉にかかるとば—つと素早くそれをひき上げた。にら虫と云うのはにらの葉よりも細い小さな虫だつた。それはどこか青虫ににっていたけれど少しもいやらしい感じはしなかつた。小さな体をくね／＼と動かして何んとなくあいきようのあるかわいらしさ、それにその色のすばらしい美しさ、始めは緑のこもれ日がつつたのかとも思うほど。でもそれはこもれ日よりもつと明るく澄んだ色だつた。自然はこんな美しい色を持つている。「初夏の虫」ふとそんな言葉が心をかすめた。それは本當に初夏の木の緑や日の光の色だつた。すばらしい名前だわ、私は一人心の中でとくいなつてみた。弟は二、三匹のにら虫を手のひらにのせてじつと見ていた。その様子はいかに無邪氣で楽しそうだつた。私達の家庭に笑いの種を振りまく弟、皆の心をいつ迄も微笑

ませてくれる弟、とくに私などは弟のおかげでどんなに淋しさを忘れていたかもしれない。だが弟は自分がそんな役目をつとめている事などは少しも知らない。それは明るい、私よりも一つ下の弟の力なのだ。淋しくてもかなしくても弟と共にある時は明るく楽しい。喜び楽しみはどこにもある。進んでそれを見出していけば。良い弟を持つた喜び。はちの羽音が花の陰でときれて又聞える。いつきいてもあきない初夏の音楽。ふと見上げると視線の果にもうすつかり夏を思わせる空が遠くかどやいていた。又ふとそよ風の中に母の聲をきいた様に思つた。静かな美しい初夏の午後だつた。

### 愛犬をしのびて 中二 小林 堅 志

僕は最近朝おきて雨戸を開けた時、又學校からかえつて来た時などたまらない淋しさに一時はぼう然とすることが度々だ。

僕はあまり淋しいのできまつて口笛を吹く、すると少しはなぐさめられるような氣がするのだ。

僕をそんなにまで淋しくさせる原因は……それは、僕の愛犬「クロ」がよその人に噛みついたのである。

役場の人に連れられて行つてしまつたことだ。「クロ」が連れて行かれたのは、丁度六月の終り頃の空のどんよりとした暗い日だつた。

あの日忘れもしない。「クロ」は獣醫課の人達につれられて、どこか遠くの方へ行つてしまつた。

眼は母の眼のように柔和で、それでいて動作はものすごく敏しようで、どんな大きな犬にだつて

### 終戦四周年をむかえて

中三 淺 生 享

昭和二十年八月十五日大戦争が終つた。日本とドイツはやぶれたのだ。その瞬間軍國主義は破壊された。あのころ僕は集團疎開で田舎に行つて小學校、五年ころだつた。

ラヂオで日本降伏の悲報をきいた。あのころは日本が勝てばいいのだとただそれだけを願つていた。また大人になつて兵隊にもなりたいたいと思つた。こんなことばかり思つていて軍國主義がどうのこうのと云つたつて何もやらなかつた時代だつた。こういうことを思つていた時代だけに敗けたとされるや聲を立てて泣いた、残念だ、しやくだとも思つた。こんなことを言っている間に次に我々の心をおそつたものは恐怖であつた。今まで敵であり鬼とまでいわれた米國人が日本へ占領軍として上陸するといふのであつた。あんなにまで悪口をいつた日本へ占領軍がくる。どんなことをされるかわからない、日本人が皆殺しにされるとかいろ／＼言われた、僕等も英語をしつてゐる人になる／＼な軍語をきいた。たとへば「手を上げる」といふのは何と云うのだとか、「行け」「止れ」「金を出せ」「ぶくをぬげ」などいろいろきいた。今考ればこんなことは笑話にすぎないがあのころは一生懸命であつた。やがて米國軍はどん／＼上陸し、マツカーサー元帥の指揮のもとに日本も占領されることになり何日かはたつた。しかし占領軍は我々が思つたこととは何もしない。それどころか日本の再建に力をかしてくれているのだとわかると日本人もだん／＼占領軍に感謝するようになり、彼等は我々のみかただと思つたようになつたのだつた。

僕も今は戦争が終つてよかつたといつづく感じる。く

し決して負けやしなかつた。

始の内僕の家の人たちは誰も気がつかなかつたが、その「クロ」がよその人にちよい／＼噛みつくと、うわさが耳に入り、家の人は誰も信じなかつたが、二三日すると他の人が、「お宅の犬に噛みつかれました。」と次々に言つて来て、始めて家の人達ががく然としてしまつた。

「狂犬の予防注射をしましたか。」とおまわりさんが来た。噛みついた人のお見舞に行つた。「クロ」から負わされた損害は相當だつた。

それにそんな利害關係ばかりでなく、もしも「クロ」が狂犬だつた場合大へんなことになるというので父が役場の獣醫課へ行つて話し「クロ」をつれて行つてもらうように頼んだ。

僕はその話を姉から聞いた時、悲しみで一時目の前が眞暗になつたような気がした。

だが役場の人が「連れて行つても絶対に殺さないから大丈夫ですよ。」「試験材料に使うんです。」とこゝ／＼言つてくれたので少しは安心した。「クロ」は役場の人が乗つて来た自轉車の後につけてあつた箱の中に無理に押しこまれ永久に僕の手から去つて行つた。

「クロ」、「クロ」、今「クロ」はどこへ何をしてゐるだろう、僕はこうして作文を書いて居ながらも「クロ」のあのくりげのような面影が目の前にちらついてはなれない。

僕は毎朝雨戸を開ける度に遠くから飛んで来て僕にじやれつくクロの居ないのが淋しくてならぬ。

### キタイ台風 初三 細谷 浩

八月のお休も、ぶじにすんだ。あしたは二十日だ。この日は、いつもあれるらしい。「今年は、あれぬといいがねえ。」とお母さんがいつていた。お晝ごろになつて、空もようがあやしくなつてきた。ラジオの天気よほうをきくと、「一日の九時

ごろ東京わんを、つうかするかも知れません。おきをつけねがいます。」といつた。だんだん風がでて来た。台風の前ぶれらしい。雨も降つたりやんだりしている。夕方になると風がつよくなつてにわの木ははげしくおじぎをしている。ざわざわとささがゆれてる。すごい風だ。早めに夕食をすませた。まもなく電気がきえて、風のうなる音がものすごくなつてきた。そとは少し明るいので、そとへ出て見た。きんじよの人々もみんな出ていた。よく見るととなりの家のひさしが、みんなはがされていて、なおしているところだ。いくらなおしてもとはされるので、お父さんがたるきをあげた。なわでゆわえてやねにつけた。その上に石をあげた。これで大じようぶ。風がつよくなつてきた。たつていられないので走つたがおそろしくなつてきて家へ入つた。家の中はまつくらだ。すこしおちついてから、あまどをしめたり、方々に水をくんでおいた。つくえの上には、マツチとロソクをそろえてようふくをきちんとまくらもとにおいた。お父さんは、町内が心配だと云つて、町會へいつた。ぼくとお母さんは先にねた。ねこもこわがつてぼくにくつついてねていた。風

るべきものがきたのだ。もしも日本が戦争に勝つていたらどうだろう軍國主義は今までもよりも悪くなり、世界の平和をおびやかす我々にしたがわぬものは生かしておかぬぞとこんないきおいで發達したろう。そして体の中にはいつたら、どんな科學的な藥品で抵抗してもぜつたに滅亡せず、いつたら死ぬまで食いつくバイキンのような存在になつていたろう。幸い日本と、ナチスドイツは敗れたのだつた。

それ以來の日本とドイツ、同じ敗戦國の日本とドイツの再建状態を見てみよう。日本と同じく敗戦の苦惱を体験したドイツ青年は何を考へどんなことをやつてゐるだろうか。ドイツ青年は日本の復興は必ずや日本青年の手によつて成されると信じ我々も負けずにドイツ再建に努力しよう、と立上つたのだ。それ以來ドイツ青年は毎日／＼ほとんどが通貨改革後の苦しみの中にアルバイトをしながら勉強をし、ちよつとのひまでも五六人あつまる祖國の再建について討議し、それをなしとげるべくめい／＼がいそしんでゐるのだ。そしてハデななりをして町を歩く外國かぶれの青年なんぞ一人もいないさうだ。そしてドイツの女性で、もしも占領軍に貞操を賣るような奴があればそれは最も重い祖國への反逆者で我々はドイツ婦人たる名譽から永久に追放してやると、ドイツの一青年は言つたさうだ。この一青年の言葉こそ祖國への反逆者に對するドイツ青年のほんとの叫びだろう。この点日本はどうだろう。祖國再建ということを思つたことのある者となひ者とどちらが多いだろうか。ハデななりをした外國かぶれの者ほどこんなことを考へないだろう。又かういうくだらない者ほど眞面目で眞剣に祖國再建を考へる人達をばうがいするのだ。又占領軍の兵隊とうでをくんで歩く女は、たくさんいる。これらの女はいつたい日本のなんなのだろうか。あれはいつたいなん

がものすごく、まどをうつたり、あま戸をうつたりするので、中々ねむれない。しばらくすると、トタンのおちる音が、ボタンボタンと、大きな音を立てた。すこしとろりとねたけれどもすぐ目がさめた。お母さんが、二、三度おきて見たけれどもかわりない。お父さんが歸つてきて、家のへいがたおれているのに気がついた。お父さんと、お母さんは、ロソクをつけてそとに出ていった。雨風がはげしいのでようやく立てかけた。お父さんもお母さんも、びしょぬれになつてあがつてきた。用意しておいたき物をすぐかえた。雨、風がますますよくなつてきて、目がさめて中々ねむれない。ソウツと電気がイナ光りのように光つた。ぼくはいつものまにかねむつていた。目がさめてもまだ電気がつかない。まだうすぐらいのにそとは人々のさわぐ聲がするのでおきて出て見た。家のへいがひもでつながれて、立てかけてあつた。草花はたおれて、びわの木、いちじくの木はおじぎをしたままで。お母さんが「方々を見てきてごらん。」といつたので見にいった。すると大きないたのへい、かべのへい、コンクリートのくいがみなたおれていた。家なんてまだいい方だと思つた。家へ歸つてかおをあらつた。食事をしていると、ます野さんがへいをなおしにきてくれた。新ぶんは、いつもより三時間ぐらのおくられてきた。みんなでさつそく見た。方々ひどいひがいだ。ぼくも見せてもらつてお話をよくきいた。おそろしくなつてあたまがいたくなつた。家のへいはすぐみんなでおした。ぼくも手つだつた。た

りないものはあげたり、もらつたりしてたすけあつてすつかりできあがつた。まあまあ町内かわつたこともなくてよかつた、とみんなでかんばいした。

### まつばばたん 初二 林 隆 春

キテイ颱風がくるというのでまつばばたんにかさをかけておきました。するとお父さんがかえつていらして「かさは今晚の颱風でめちやく／＼になるからとつておいた方がいいねえ。」とおつしやつたのでしかたなくかさをとりました。でもぼくたちはまつばばたんの花が雨にたたかれ、風でめちやく／＼になるのがかわいそうでなりません。えんがわのガラスどから花を見て「かわいそうね。かわいそうね。」と話していました。しいぼうはもうなきだしそうなかおをしていました。するとおばさんがレインコートをあたまからかぶつてすぐにわにおり、雨がざあ／＼ふる中をきれいにさいているぼたん色や、赤や白の花をとつてきて下ださいました。お母さんは台所からとんできてコップをもつてきて下さいました。コップの中で花はうれしそうに見えました。

### 窓 か ら 中二 櫻 井 佳 子

栗の木がゆれるともなくゆれる午前の中庭栗の木の實がぼつんと浮かんで見える。ある所は黄緑に又あるところは青くおたがいすれあつている葉、春にはあの木に大きなしらが太郎がはつてい

のだらうか。あれは日本のほじではないだらうか。そしてよくもへいちやらで町をあるけるものだ。こんな人達がいると眞面目な人達が大いに迷惑するのだ。こんなくだらう人達だけを外國人が見たらどうだらう。これが日本の女子青年の姿なのだらうかと思われたらどうなるだらう。外國には信用がなくなるかもしれないのだ。

そして援助が受けられなくなつたら大變だ。こういう再建への妨害者ははやく何とか撲滅してしまわなければならないのだ。日本では何のために學生がストライキをするのだ。労働者がストライキをするのはいみがわかるが學生がストライキをするのはどうもなつとくが行かない。ここにも學生ボスみたいな者が存在するのではないだらうか。今再建しつつかある現状においてストライキをやるひまなんかないはずである。眞面目な學生を、ある権力者がさそうのだとしか思えない。もし學生全体が支配者なしでストをやるのだとしたらそれは祖國の再建を破壊しようとする祖國への反逆者だ。僕は又學生がダンスをやるのもどうかと思う。ドイツ學生はどうであらうか。「ドイツが立派に再建されるまでは、ダンスや類似の催しを一切止めてただ學業にだけ専心、ドイツの學術を再び世界一のものにしなう」と申し合せてさうだ。こんなきつ／＼やらなくても學生という一つの任務を持つた以上、その任務の責任をはたし終るまでは、ダンスなんかやらないようにしたらよいと思う。又ドイツ學生はストライキのことなど思つたこともないらしい。我々はこんな敗戦の廢墟上でダンスやストライキをやる暇があつたら祖國再建へ努力しなければならぬのだ。

同じ敗戦國だけれどもドイツと日本ではさうとうにちがうのだ。戦争で一体どつちが手ひどくやられたのだらうか。ドイツはめちやめちやにやられてしまつたのだ。日本の何倍も手ひどくやられたのだ。そしてドイツと日

たのに今は影も形も見えない。宮田先生のお話によると蠶がまゆを作るようにしらが太郎もすかしだわらを作るのだそうだ。私たちも垣根などにぶらさがつているのを良く見かける、まゆを絹織物に用いるようにしらが太郎のすかしだわらは釣糸にするのだそうだ。先生の子供のころはそれでよく釣糸を作つて行かれたそうだ。自分で作つた釣糸で釣をするのは又違つた味がする事だろ。

栗の木の下はあれた花畑である。ここからは何んの花かわからないが薄紫の花が二つ三つかたまつて咲いているだけで、その外には花らしい物は見あたらない。初等部の生徒がほうきを持つて往來している。二人の女の子が口に水をふくらませてやつて來た。ちようど栗の木の横で何が面白いのか笑いながら口の水を出してしまつた。水が土にしみこんで行く。とんぼがひくくその上を飛ぶ。もみぢの枝の先ががすかにあからみ始めた。テニスのコートラインが所々ぼやけたように残つている。そこを木の葉がくるくると動きまわつては止り、歩いてみては飛んだりしている。土をみつめてみると土がぐるぐるまわつていようように見える。頭ががん／＼するジーン／＼蟬の聲、今迄氣のつかなくつた蟬の聲が急に耳にとび込んで來る。私はあわてて黒板を見なおした。

今

中二 満田 淳子

あかるい今！

私は一生けんめい 何かをさがしているのだ。

「今」というものは いつでもあるのだね。

ほら、今も「今」だよ、

ほら又、今も「今」だ、ほら ほら／＼、

「今」は、永久になくならないのだね。

光

中二 田中 朋子

朝。

まぶしいくらい光が、

さつと部屋の中にさしこむ。

その光が 全身にしみる。

あ、

これからの道が

目の前にうつる。

本ではどつちが早く再建されるはずであろうか。それはドイツより痛手のかかるかつた、日本ではないだろうか。ところが日本青年にはドイツ青年みたいな祖國を再建しようとする心構えがないのだ。あのドイツ青年みたいな烈々燃ゆる民族魂を日本青年が持つていたならば日本がいかすぐ再建されてしまうのだ。これを思うと僕は日本がいやになつてしまふ。ドイツへ行きたい思ひだ。しかしこんなことを言つていたのでは、日本の再建がおくれるばかりだ。我々青年全体が一つとなりドイツ精神をならい、又このドイツ精神にまげず、日本を再建しなければならぬ。そしてドイツといつしよに日本も世界平和へのなかまいりをしなければならぬのだ。我々青少年に戦後はじめてあたえられた義務は祖國再建なのだ。

詩 二 題

初四 進 知子

うちの時計は鳩時計

ぼつぼつぼと鳴つてます

上には鳩がとまつて

下にはくさりがついてます

窓の中から鳩さんが

ぼつぼおはよとないてます

小鳥がいない

木でないと

かあさん鳥は

えをさがし

とうさん鳥も

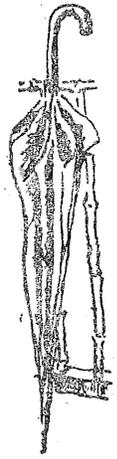
えをさがし

すでは小鳥が

ないている

初四 浮田 多美子

僕の奥の細道



僕の郷里 中三 飯倉 國臣

僕の郷里は本洲の端にある内浦である。鹿兒島縣の南部にあつて氣候は中々暑い所である。東京から汽車で三晝夜、汽船で五晝夜かかる。内浦は至つて開けない村である。しかし人の心持が淳朴で村は極めて平和である。村の中央には川が流れている。村の子供が仕事をしたり遊んだりするのは大抵この川である。川が海と接する所に三角洲が一つ出来ている。この三角洲の邊が子供のよい遊場になつてゐる。海岸の川はどこでも水がきたないのであるが、この川の水は至つて清らかで、ゆるやかに流れている。水の底にエビやフナが泳いでいるのが見える。僕が郷里へ歸つた時、いつでもこの川へ来て遊んだり、エビを取つて食べたりのものだ。また面白いのは夜この川へウナギを取りに行く事だ。カンテラを照して川べりにいると、ウナギは光を目がけて集つて来る。この時用意してあるクギを先につけてある竿で、ウナギをつくののである。この村で毎年行事としてやる面白い事は舟流であつた。今年はやらなかつたが、近年までやつていた。舟流とはまづ一艘の小舟に帆を上げて海に流すのである。すると村中の子供が我先にと小舟を目がけて泳ぎ着く、そして小舟のうばいあいをするのである。この時勝つたもの

がこの小舟の所有者になるのである。この時一切の監督をするのは村の寺の坊さんである。坊さんの合圖で子供は一散に泳ぎ出すのだ。舟の周りにはまるで蟻のたかつたようである。そして打つ、たく、ける、ひつばる、頭へ上る、ありとあらゆる活劇がこの舟の周りで演ぜられる。力の弱い子供にはこの激闘が苦しくて岸へ歸つて来るものがあるやがて、其の中の一人が舟の上にはい上るとさらに又活劇ははげしくなつて来る。力みかえつた三人が我先にと舟にかき上る。今度は舟の中で格闘が始まる。見る間に小舟は帆樫が折れてひっくり返つてしまふ。やがて一人が折れた帆樫を持つて振まわす、さすがの強敵もあぶないので散りぢりばらばらになつて舟から離れてしまふ時、舟はどうとう此の勇者の手に入つたのである。やがて夕日は赤々と海面を照らして波は靜まつて行く。かくて一村は又平和な夜にかえるのである。「舟流」という名はいかにもやさしいけれど實はこうした大格闘であるのだ。海岸に住む人の荒い氣持がすぐわかる。しかしこの村の人々の習慣の中に珍しい程やさしいところがある。それは毎日の行事であるがまず起きると必ず佛様を拜む。そして海岸か川邊へ出て柄杓に水を吸みとり竹の葉でしめして体をぬらし、それがすむとやうやうやく天道様に向つて禮拜する。村の人の毎日の仕事は漁業である。獲物は近くは鹿兒島へ、遠くは神戸、大阪邊まで送り出す。海岸の松林と共に太陽がてらし出す村の家々の景色は、思い出すさき氣持が良い。松林のつづきの先の濱邊でやつてゐる地引

網の掛聲が今尙耳に残つてゐる。

はやまにいつて 初四 佐藤 博子

お父さまにつれられて私ははやまに行きました。海岸に行つてみるとしおがひいていました。けれど波はかなりつよく、じつとみているうちにこわくなつてきたのでやどへ歸りました。するとお母さまは、一人でさびしそうな顔をしていました。私はおひるごはんをたべてから本をよんでいました。まもなくお父さまが歸つてきて、いろいろのおみやげをくださいました。私は急にうれしくなりました。それからまた、みんなでいっしょに海岸にでかけました。波はいつものまにか、たいへんしずかになつていました。

いなか 初二 たがい ゆきえ

今日いなかへゆくので、五時三十分、ごはんをたべました。六時に家をでるつもりでしたが、すこしおそくなつたので、いそいでえきにゆきました。

でんしゃにのつたら、まだはやいので、たいへんすいておりました。きりがふかくて、とおくの家はみえません。すずしいかぜがとおりぬけます。私ははやいあさのけしきを見るのが、はじめてなのでとてもうれしかったです。

でんしゃを二どのりかえ、かな町でバスにのりました。バスがとてもがたがたするので、いもう

と私は、「えへへへ」とわらいだしてしまいました。バスをおりたら、お天きつづきなので土が白くかわいていて、あるくたびに土けむりがたちました。いねは青く、ほがいきいきしているのや、もうほのきいろいのやまだほのでていないのだの、いろいろありました。

いなかのおうちがみえたけれど、なかなかつきません。ちかくまできたら、いなかのあさ子ちゃんのみつけてかけてきました。おうちについたらよし子おばちゃん、みえ子ちゃん、るみ子ちゃんをつれて、きていらつしやいました。いなかには、とうきようにいたおばあちゃん、あき子おばちゃん、あさ子ちゃんがそかいして、そのままいなかの人になつていのです。

おうち、かやぶきのやねで、たんぼのこだかいとくにぼつんと一けんたつています。おうちのまえに、おうちよりつと高いなんびやくねんかまえの、大きな木のがあります。つるつるしたさるすべりに、赤い花がさいて二ぼんありました。

あついで、すぐようふくをぬいで、スリッパで井戸ばたへ手をあらいにきました。

一時ごろお父さんがいらつしやいますと、お母さんがおつしやいましたので、おひるごはんをたべてまつていると、たんぼのむこうに、お父さんが見えました。私たちが「お父さんお父さん」とよぶと、お父さんは手をあげながら、あるいてこられました。

はだしのままお父さんとえびがにとりに、ほ

りへいくと、みえ子ちゃんがあついでついでというので、だいておうちにかけり、こんどはあたりしくほつたほりへでかけました。

私たちは小さいのよりとれませんでした、お父さんは、大きいのをバケツいっぱいとりました。

おふるにはいつてから、おにごつこをしました。るみ子ちゃんのことを、るうちやんといつたり、るうぼうといつたり、るうともいいます。ゆうごはんのあとで、のどじまんごつこをしました。二つのるうちやんも「るうちやんのぼんよ」というと、うたのぼんをもつておどつたり、るうちやんもしました。るうちやんに「おやすみなさい」というと、「こんにちはこんにちは」といいます。

あさおきたら今日もよいお天きです。いねが青々とおくまでつづいていて、うみのようです。とおくのほうでにわとりのなくのがきこえます。井戸からつめたい水をくんでかおをあらいました。あさごはんがすんでから、また、ほりでえびがにとりました。かえつてからお父さんにしてんしやをならしました。よるいちかわの花火がみえました。よし子おばちゃんが花火があがると「たまやーかぎやー」といいます。あすは二ぼんのバスでかえるので、こんやはやくねます。あくる日あさごはんをおおいそぎでたべて、バスののりばへいききました。バスにのつてすこしたつたらまたうしろからバスがやつてきました。今日はいなかのおぼんなので、人がたくさんいる

ので、りんじにもう一だいでたのだそうです。バスの中の人も、みちをとる人も、みんなきれいなきものをきて、うれしそうです。かな町へついたら、二れつも三れつも人がまつていました。

おうちにかえつて、おみやげのおもろこしをたべていたら、こうちやんがきたので、二人でたべました。えびがにを「とり」にやつてのこりをほしました。こなにしていえさにまぜるのです。おばあちゃんに、いなかのおはなしを、いろいろとあげました。

### 福 島 初六 佐藤 莞爾

福島縣のしのぶ山のふもとから、二里ぐらい登つた所に、羽黒神社という神社がある。ここにはわらじを奉納するしゆうかんがある。この境内に、繩がはりわたされていて、わらじがつるされている。小さいのはふつうのと同じ、大きいのは幅が一米、長さ三米ぐらいのものもある。それを山の上にはこぶのは大人が三十人でもうやくはこび上げただそうだ。

お守や、おみくじを賣る所におばあちゃんがすわつていた。春なので草もちが三方の上のせてあつた。小さなおみくじの箱がおいてある。のきに去年のあんぼんたんが干してあつた。

わりあいに高い所なので福島町の町がよく見える。左の方にあぶくま川が、すぐ下に中學校が見え、遠くに町が白く光つて見える、左の方に田んぼがすつとつづいていて、遠くに森が見える。右の方の、こんもりした森の中に赤いれんがの大き

い高商の建物が見える。

下から若い人が、二人登つて来た。

うらの森で雀が鳴いていた。歸る途中に中學校の生徒が教練の時射撃のれんしゆうをするところを通つた。丘を切通しのようにして平にしてあつた。まわりのかべに鉛玉をうちこんだ穴がたくさんあいている。鉛玉がほしくなつたので穴に指をつつこんだら空気がゆるうのたまみたいなのが出て来た。この射撃場の下は杉林で、その下は、お寺だ。お寺はさうとう高い所にあつて、長い石段がある。お寺の下が中學校だ。そばに電氣研究所があつた。

お寺のそばの小川から流れて来る水が、中學校の前のセメントで出来た、幅十米ぐらいの川の中に入つて行く。お寺の方から来た道がセメントで出きている。川の橋を渡つて左がわが、ぼくの生れた家だ。僕が一つの時研究所の横の家に、ひつこした。ぼくの家は平家で、室が五つあつた。家の庭から研究所の三階のまどのガラスに、ときどきカラーをはりつけてかわかしているのが、見えた。家の裏庭には、しづ柿の木が一本、無花果の木が一本あつた。

秋になると、しづ柿を取らないで、木になつたままの柿が、うれてやわらかくなる。それを食べるのが楽しみだつた。

家は福島町の町からはなれていて歩いて行くのに三十分はかかつた。ときどき町へつれて行つてもらつた。福島町の福ビルの四つ角の向うがわ、驛の方から見れば右がわの角の所に、こけしはか

り賣つている店があつた。機械でこけしのかたち木をくりぬいて、これに筆で、色をつけているのが店から見えた。ここで賣つているこけしは、小さいのは高さ一センチ、大きいのは、五十センチぐらいのもある。

裏の風呂場と台所の近くはセメントになつていた。ふる場の前のセメントに犬がセメントのかわかない内に上つたのか足あとが二つあつた。

ぼくが四つか、五つの時、佐沼からせいちやんという人が来て、座敷で勉強しながら、「ぬれた小馬のたてがみをなあでりや兩手に朝のつゆ、」などという歌を歌つていたのもおぼえてゐる。

五つの時、家のうらの子がままごとをしてどぶの水をお酒だといつて、のんでえきりになつて死んだ。

お父さんは小鳥がすきで、いつも家には小鳥がいた。夜になると小鳥のかごにふるしきをかぶせて、玄關の下駄箱の上にのせる。月夜だと、朝と同じような聲で、よくさえずる。げんかんの戸がガラスで、中が明るいからだらう。

家に、ときどき、きのこを賣りにおはあさんが来た。うすい箱を五つぐらいせおつてその中にいろんな、きのこを入れてある。

こけしを賣つている店は、昭和二十年にあの近くの火事でやけてしまつたそうだ。

福島には果物がたくさんある。りんご、梨、干し柿、などは福島のみいさんだ。折々もういちど、福島にいきたいなあと思ひ出す。

### 輕井澤紀行 第三日

鬼押し出し行き 中三 西野 智子

鬼押し出しに行くので私たち炊事當番は朝五時に起きた。すがすがしい晴れた好いお天気である。外へ出ると、東京では味わえない山の風がすがすがしく吹いている。いつもの事ながら、淺間山をみる。雲一つ浮んでいない空に淺間のくつきりした優美な姿がよく見えた、私は初めてこの美しい淺間を見たのだ。お、何と美しいそのなめらかな線、そしてそれが未だ顔を出しかけた太陽に當り、ふかい紫から赤紫に變る様、美しい山のめざめ。私は自分が見ているのが、もつたいない位だつた。自然におごそかな山の風が吹き小川のせまらぎが聞える。

出發！皆元氣に、足取りも軽くつゆにぬれた山道を歩いて行く。私と若見さん、兩ちやんの三人はショートパンツに運動シャツのいで立、足が弱くてあとに残るものゝ、「行つてらつしやあい」と云う聲に送られながら寮をはなれて行く、小鳥がチヨツチヨツと鳴きながら私達の後をついて来る。明るく太陽が森の木間に満ち涼しい山風がたわむれる活潑な山の朝である。

廣い通りも過ぎ、やつと山道にさしかゝつた。自動車を通るせいか兩側が窪んで中央が凸つている。それが火山礫の輕石ばかりなのでふんだ所がくすれて、とても歩きにくい。そここゝに別荘がある。淺間を見ながら歩いた。前の先生方の愉快な笑聲を聞きながら黙々と歩いた。「グリーンホテルに着いたら休むよ。」の聲にはげまされ

山の上に立つ白い美しいグリーンホテルから松林をぬけて、左手に小淺間を見ながら細い山道をすーつと行くと、火山研究所がある。そこでしばらく休んだ。ガイコツの立札が不氣味に立つている『淺間の登山キケン』と

響いてあつた。若い青年達が注意のあ  
るにもかゝらず淺間に向つて行つ  
た。(私も本當はあの淺間に一度登り  
たかつたけれど)やがて研究所の内部  
を見せられた。今日は朝から淺間  
山が小爆發しているようだ。男の人の  
帽子に白い火山灰がつもつてゐる。

鬼押し出しに向つて歩く。兩側に、  
うつそうと松やその他の木がしげつて  
いて小淺間も見えない。けれどしばら  
く歩く内に、今までしげつていた木が  
だんだん小さなかん木となり、しま  
いには急にそこいらが開けて廣いゴツ  
／＼した岩ばかしの所に出た。

物すごい眺めである。まるで月の世  
界に來たような氣がした。空がどんよ  
り曇つて、そこら邊がうす黄色くなつ  
たり暗くなつたりする。ます／＼不氣  
味さがます。淺間山のすごい煙も雲と  
とけ合つた様になつて煙のため、曇つ  
たのだと思う位。こゝにはもうふつう  
の植物もないあるものはわずかに二十  
糎位の松の木の様なもの高山植物と云  
われる類である。水の無い川が方々に  
横たわり、鬼がつかみ取つたあとの様  
な淺間の中腹が見え、皆、死の様な静  
けさを守つてゐる。先生の云われるの  
によれば私たちの目的の地はこれより  
もお話しにならない位すごい所だそう  
だ。何しろ村人がこれを見て地獄を連

想した位だもの。それでもこれ以上つ

てどんな所かしら長い／＼岩だらけ  
の高原を通つて行くと、又少々かん木  
がふえて來た。かん木の間を皆よりず  
／＼とおくられて原田先生を始め私たち  
をまじえた七人で歩いて行つた。急に  
暗くなり大つぶの雨がポツ／＼と降  
つて來た。私たちの用意のゴムをかぶ  
るひまも無くすごい雷雨がやつて來て  
しまつた。ゴムに當つてパシヤン／＼

と云う。かけ出したがあまりひどくな  
るので、かん木の中にもぐり込んだ。  
だが木の事である、じきにびつしよぬ  
れになつてしまつた。仕方がない、こ  
ゝでぬれて待つより走りましよう  
と小降りになつたのを見てどん／＼かけ  
出した。じきに皆の雨やどりしている  
所を通りこす。皆は私たちのかけるの  
を見てあとをおつかけて來た。又大粒  
の雨が降つて來て顔をなぐつて行く。

地に落ちておどり狂う。私はもう頭  
のてつぺんはもろろん足の先まで、ぐつ  
しよ／＼になつてしまつた。「まさに  
ぬねずみぢや」なんてなかく／＼しや  
れを言うが本當は大變氣持が悪い。ぬ  
れたシャツやパンツが体にべつたりへ  
ばりついていやでしようがない。皆が  
ガン窟ホールへとひた走りに走つた。

私は岩窟ホールと云うから、岩に穴  
があいてゝ……そう／＼日原の鐘乳洞

の様な所かと思つたら印度風な建物だ

つた。やつとそこに入り、鬼押し出し  
の岩等見る間もなくシャツをぬいでじ  
かにセーターに着かえた。岩窟ホール  
の人の心づくしで火をたいてもらつて  
シャツをかかわした。やつと雨が晴れ  
た様だ、外を見ると岩窟ホールに面し  
て大きな岩山がいたる所にそびえ遠く  
かなたの一寸じ空色に見える地平線ま  
でつづく、人が三人位連なる様な岩は  
ガラにあるこんな有様は見ない人には  
とても想像出來ないだろう。先生の言  
われた通りである私たちの想像よりは  
るかにものすごかつた。あの美しいや  
さしそうな女の人を思わせる様な淺  
間山にも又一方こんなおそろしい所が  
あるのか、だれだつてあのきれいな山  
を見てこんな恐しい所を連想する事は  
出來ないだろう。

寫眞を取りましようと思つて取る  
うとしたら又雨が降り出した。一寸先  
も見えない。幸い岩窟ホールが近かつ  
たのでぬれずにすんだ。

又寫眞を取つてもらいそこで遊ぶ間  
もなく出發した。いつ降り出すか分ら  
ない空もようだつたから、私たちはど  
ん／＼走りつゞけた。あのだこまで  
つきない様な高原を、雲が下まで降り  
て來て前の人が見えない。私たち三人  
は雲をたべ／＼かけた。ひんやりした

きりが顔に當つていゝ氣持だつた。  
やつと火山研究所に來たがまだ雨に  
降られなかつた。皆に先を越されたが  
原田先生達と休んだ。そして今度は先  
生方と山を下りはじめた。私たちは雲  
をたべて元氣になつたからキヤアキヤ  
アさわいで歩いた。橋先生が自分のセ  
ーターを棒につけて私たちの前にた  
らしておどろかされたり、小鳥を呼んだ  
りしながらもとう／＼グリーンホテル  
に着いた。先生が歸りに温泉に入つて  
歸ろうとおつしやつたので皆元氣百  
倍、おなががすいて先に歸る人もいた  
が大部分の人は喜んだ。

温泉に入つてつかれた体をのぼした  
皆の顔が湯氣でぼんやり見えて、澄ん  
だお湯の中で手足が人魚の様にゆらめ  
いて見えた。

### 僕の奥の細道

中三 藤 井 孝 一

八月二十六日朝四時に目がさめた。  
須藤先生はもう起きて何やらやつてい  
る。少し床の中でぐずぐずしてから起  
きた。今日は六時のバスに乗つて神町  
驛に六時半に着き、七時八分の上の山  
行で山形驛に七時四十八分に着いて山  
形市内を少し見て八時五十分の山形發  
仙台行(仙山線)で仙台へ行き、荷物  
を先生の下宿先に預けて仙石線(仙台

石巻)で松島海岸驛に行き松島を見物して下宿に歸るところという様な今日一日の計画である。

閑話休題、リュックの中身は一番下が米三升、學用品、下駄、衣類、林ご(青くなつてすつばい、一貫五百匁ぐらい)が入つてゐる。寝まきをリュックの中につめてこんでもう用意は完了した。

台所では、天ぶらを作つてゐる。なべに油を一つばい入れて野菜にメリケン粉をつけて揚げるのだ。飯を食う。最後だからうんと食べようと思つて勢よく食べたが天ぶらを食べたので澤山は食べられなかつた。辨當はみんな先生のリュックに入れた。時刻は六時十五分前(十分進んでゐる)忘れ物があるか無いか見て靴をはいて重いリュックを背おつた。先生も来た。家の人に「さよーなら」を言つて外に出た。

ようやく夜が明けた所だ。月山(東北の名山)がよく見える。山がくつきりと浮き出して、すぐ近くに見える。思へば村山盆地の一隅、最上川のほとりに長々と十三日間も農家の中で生活し馬に乗り、魚をすくい、食ひそして寝て遊んだのだ。別れるのはつらい僕のリュックが余りに重たいので先生のとかえた。土地の人はもう起きて仕事をしている。てい防に出た。橋が向うに見える。あの橋がバスの停留場である。

先生が「本を返しに行つてくるから先に行つて。」と不景氣な顔をして言つた。リュックが重たいのに橋のやつ中近くならない。先生はまだ來ない。

もう大分先生との間がはなれた。後から自轉車にリヤカーをつけたのが來ている。僕も乗せてもらつた。共同墓地が見える。そこに先生の家の代々の家がある。そこに先生の家の方だ。田舎とは不思議な所だ。たんぼの中に立つてゐる形の好い木の下にはきつと御宮かほこらがあるのだ。田井村の方々に何々と書いたほこらがあつて、そこが子供の集會所だ、先生も小さな時にはそこで大いに暴れたそう。やつと橋についた。そしてリヤカーを降りた。この橋は長さが三百米あるとの事。

川のある場所を指しながら、先生が「あそこで小さい時(小學校の二年か三年)泳ぎに行つて死にそこなつた」と言つた。話を聞くとも何でもそこは一番深く、そこに舟を止める爲に石の柱があつてその上に乗つていたらすべり落ちてあつたやぶあつたと言ふのだ。言ひおくれたが、先程のリヤカーの持主は先生のいとこだ。朝の山々はこうごうしい。昔の繪によく、皇居にむらさき色の雲が書いてある。それと同じ雲が橋の向うの山の中腹にかかつてゐる。東の空が赤くなつて來た。山の向うは太陽が出てゐるのにこちらはまだだ。山々の色が四つ位、わかれている。一番遠くは薄いむらさき色やこい紺色、中ぐらゐの山は黒いみどり、近くの山はうすみどりである。月山がむらさき色にそまつた。月山のまわりの雲がオレンジ色になつた「木村先生の好きな色だ。」と先生が言つ

た。月山にある、はん點の様にぼつぼつある雪が薄桃色になつた。實にきれいだ。さつき雲のかかつていたのと反對の方向の遠くの朝日岳の峯が二つだけむらさき色に見える。太陽が登つて來た。しかしバスはまだ來ない。犬の聲がするので見ると、先生の家の犬が橋のそばまで來てゐるので「どーしたんだらう?」と聞くと「きつと好介(先生の兄貴の子供十八才)が自轉車で來るんだらう。」とその言葉が終るか終らない内に好介と隣りの家の小僧が自轉車にリヤカーをつけて來た。

隣りの家の犬がリヤカーの車輪と車輪の間で僕たちの方を見て「ワン」とほえた。あぶないなと思つた。とたんだの白い腹の上を車輪が通つた。犬はそのまゝ死んだと言ひたい所だがキヤーン、キヤーンと二聲三聲ヒステリックに泣くとふんぜんとしてリヤカーの後を追つて行つた。やつとバスが來た。もうすわる席は無。このバスは車体が悪いのか、道が悪いか(おそろく兩方だらう)、ひどくゆれる。三十分で神町驛についた。時計を見ると七時十五分前このバスは十五分もおくれたのだ。驛の中に入つて見たら進駐軍の應接室ばかりきれいで、その他はホームは短かく小さいボロ驛だ(神町には、大きな飛行場があつて進駐軍の宿舎がある)間もなく蒸氣機關車を先頭に汽車が入つて來た。こんでゐる。ガタンと一つ大きくゆれて走り出した。至る所に林ご昌がある。川には水がないので、木が生えい

る。天童驛で又人が増えた。「漆山」「羽前千歳」をすぎて「北山形」ここから人が澤山降りたので、すわれた。その次が「山形」だ。そこで降りた長い陸橋を渡つて待合室に行つた。そのベンチの上に荷物を置いて外に行つた。驛の眞正面につき山があつて木や草花などが植えられてあつた。その向うに大きな通りがある。そこを歩いて行つた。向うにはずぶ山がある。市電もなければ自動車なども余り通つていないのに四つ辻に交通調査がいてピリン、とやつてゐるのでおかしなやつだ。こんな所をやつたつて意味ないと思つた。本屋に入つて本の表紙と名前を見てから待合室に行つた。この間約三十分。山形からは奥羽線左澤線、仙台線の三線がある。その左澤線の何とかとやう驛に角館先生(万年新兵)の親類の家があつた。先生は何でもそこに行つた事があつた。又長い陸橋を渡つて仙山線のホームに入つた。客車は四台しかついていないもう人が大分入つてゐる。それでも席があつた。僕は窓ぎわに坐つた。先生がここは暑いから別の所に行こうと言つたが、僕はそこに残つた。先生は二つ三つ先の斜め向うの席に腰をおろした。僕の席は一番はしである。先生が仙山線の車は魚くさいと言つたがその車は新しくて悪臭はなかつた。八時五十分は發車した。「北山形」「羽前千歳」そこでかつぎやらしい二、三人のおばあさんが乗り込んで來た。その中の一人が僕の前に坐つた。そして僕の前の男の人の席の後ろに何か荷物をかくしてもらつて

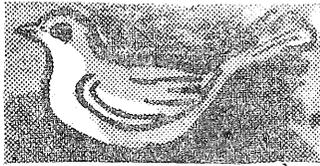
いた。羽前千歳で奥羽線と別れた。山が近くなつて来た。ガタ／＼言いながら山に登り始めた。山中驛に着いた。山中驛に九時三十七分に着いた。そこは名の通り山の中の驛である。僕はボンヤリ外の景色を眺めていた。「このリュック誰のだ、持主いないのか」という横柄な聲がするので見ると警官が僕のリュックにさわつてゐる。米が三升入つてゐるのとヒヤリとしたが、米の三升ぐらゐわかるものかと思つて、何くわぬを顔して、「僕のだ」と言ふと「お前のか」と、出つばつてゐる下駄にさわりながら「これは何だ」「下駄だ」「その他に何が入つてゐる」「學用品やその他だ、これから仙臺を見物して東京に行くのだ」「そうか」これで検査

つがすんだ。ほつとした。田舎の警官はいやにいばつてゐる。自分で志願して警官になつて、僕達の父母に課した税金の一部を給料としてもらつてゐるくせに、いばりやがつて警官なんか偉くないんだ、と思つた。間もなく發車した。ここで蒸氣機關車が電氣機關車に代つた。電關が前に一臺、後ろに二臺つた。驛を出てからすぐトンネルに入つた。ザ／＼と眞すぐで後を見ると入口が白く小さくみえた。しばらくして入口は見えなくなつた。

別れたクロスホイットらしい。電氣が澤山ついで明るかつた。又せまくなつた。今度は薄暗い。信號燈の青い光が線路にうつつてゆれてゐる。それもだんだん小さくなつて見えなくなつてしまつた。僕の影がトンネルの中にある棒に當るとビヨコンとおじぎをして、棒に見えぬ。車内の人は新聞や本から目をはなし一ようりにだまりこくつて天井を見たり、ボンヤリ暗い窓の外を眺めたりしてゐる。

まだ出ない。ビイーと前の方の電關が言う、後の二臺がボーボーと言う。丁度「大丈夫か」「うん平氣だ」と言つてゐる様に聞えた。体を乗り出す様にして前の方を見たら出口は見えない。やつと遠くの方に

## 心の風景



さびしさ

中二山之内 保

さびしさ。

われたガラスのむこう、

鉛色の空が

果てもなく ひるがる。

Aさんのこと 高二 古木かをる

Aさんと親しくなつてからもう随分になる。二年の夏に一緒に繪を書くようになってからだ。どんなふうにして仲良くなりだしたかはぼんやりしているけれど、二人で話した時、「いい人が少ない」

「貴女はいい人ね、」仲良くしましうね」とちよつとはにかみながら會話を交したのを憶えてゐる。私はほんとうにAさんを良い人だと思つた。そしてAさんとお話するのが誰とお話するよりも面白かつた。他の人を好きなのとちよつと違つた感じだつた。私をほめて話す時とか、私の好きな人の話をする時は特にそんな氣持だつた。だからAさんには何でも打ちあけて話したし、またAさんもそうしてくれたと思う。でもその頃の打あけ話なんて今から考えれば何でもないくでもない事だつたけれども。いつだつたかAさんと二三人の友達と繪を書きに行つて遅くなつてM先生と一緒にギヤ／＼はしやぎながら歸つた事があつた。M先生は私達に、「貴女達には悩みがあるか。」等

とそんな事を云つた。私達はあるとかないとかいうとM先生は、「誰々さんの悩みを當て、みようか。こんな事ぢやないか」等とそんな事を私達は何か凄く調子に乗つて喋りたててゐた。そんな事を話してゐるうちにAさんが、「かをちやんの事なら何でも知つてゐる。私を信用して何でも話すんですもの。」と何んの氣なしに云つた。その時私はとつてもいやなちよつとたまらない氣持になつた。やつぱりあんな良い人でも本音はあの言葉なんだらうかと思つて。二人は大概同じ行動をとつた。Aさんと一緒にいるととつても楽しかつた。議論をしてもちよつともいやではなかつた。かえつて議論するたびに友情が増して行つた。二人は大概將來の事を話し

た。そんな話をしている、何だかもう胸がドキ／＼してしまふ事がよくあつた。私は立派な仕事をしなくちやならないとそのたびに思つた。そしてAさんはきつとやり通すだろうと思つた。

三年になつた時新一年生の男の子とAさんと三人で話しながら朝學校に來た時、その男の子が、「知つてらー。この二人は仲が良んだらう。」と無邪氣な口をきいた。二人は顔を見合して笑つた。何か云いたい氣がした。そしてどうしてもAさんとは離れられないという氣持が強く起つた。私は澤山の人と一緒にいる時のAさんよりも二人でいる時のAさんを好きだつた。Aさんは他人の良い所を少しも躊躇せずほめるので私はそこがAさんの良い所だと思ひ好きだつた。夏休みには一生懸命繪を書いた。Aさんは、「かをちやんと繪を書いてる時が一番楽しい。」と云つた。私もそうだつた。Aさんは割に無邪氣なところがあつた。まには二人で歌つたり踊つたりもした。二人で映畫を見に行くので驛で待ち合せているところに、いつも一緒に行動する友達がちやうど私の家に来るところにぶつかつてしまつて困つた事もあつた。

だとすると、そんなに信用してしまえない。」と時々うたがいたくなる時もある。AさんがS會に入つたりして忙がしくなり一緒にいる時間が前よりだん／＼短くなつていつた。それまでは全然別にいるのは、家にいる時だけだつた。そして家にいたつて、二人共考える事は學校についての事だけだつた。だから、お互に現在の心境がどんなふうかとか、何時どんな事をしてどんなふうだつたか等という事が、一部始終わかつていた。しかしAさんがS會に入るとそうはいかなくなつた。S會の友達も出來たらうし、一緒に入つた人との用事も出來てきた。そしてまた新しい今迄と違つた興味も出來た。AさんはそういうS會の事などに關して私にも随分話して聞かせてくれたけれど、私は聞いていてもあまり興味がなかつた。いかそういう事は私よりもBさんと話すようだつた。というのは、別に興味がないわけではなかつたのだ。Aさんの考え方は私から見ればもう徹底してきていた。だから誰にでも自信を持つてどん／＼話す事が出來た。しかし私は随分色々考えたりしたけれども、Aさんの様に自分の考えが中々徹底したものにならなかつた。その時ほんとうにこうだと確信する事が人の話を聞いたたり何か讀んだりする事で全くひつくり返つてしまふ事が少なくなつた。私はそういうふうになる事が恐ろしい位だつた。私はしまいにはもつともつと色々わかるまでどちらにも偏りたくなかと思つた。だからAさんが色々話しても私はAさんの様に出來なかつた。そんなふうでそういう時にはいつも

Aさんに押されていた。私はAさんが自分の考えが確かりしているという事をうらやましく思つた。Bさんはどうかというところやましく思つたりするのが好きだつた。だからAさんだつてBさんと話した方がきつと張合があつたらう、そんな事から何時とはなしに私のAさんに對する氣持が少しづつ變つて行つたに違いない。私は何かAさんに負けたくない、とそんなふうにも思ふようになった。私はAさんが私の考え等に對して他の人に對してよりも敏感になつていっているという事を無意識に感じ出していた。というのは私がAさん對してそう考へていたからだ。「この事をAさんはどんなふう考へているんだらう。」「Aさんならどう考へるだらう。」等とAさんの考えや動作に特別に興味を持ち、期待していた。だからAさんも私に對してそうなのだという事がわかつた。私は自分にあんまり自信のない事や、はつきりわからない事等はAさんにわからせたくないと思つたりする事をまぬがれなかつた。そして私は始にはこんなふうにも思わなかつた事に氣がついて變な氣持になつたりした。私はAさんを良く思へたりいやに思へたりする氣持がだん／＼激しくなつた。たまらなくなつて、もう信用なんかしない。前のAさんと思つてちやいけいなんだ。と思つてあくる日一緒になつて二人で話をするとやつぱり前のあのAさんだつたりした。高等學校に來てからはなお更そんなふうだつた。前と違つて二人で話をしても何んだかどこかで忘れ物をしていよう氣がしてならなかつた。

「あゝ、Aさんとは仲がいいはずなんぢやないか。」とわざ／＼思つてみたりする事もあつた。或日久しぶりにAさんと二人だけで話しながら歸つた事があつた。AさんはS會の事や、同じS會にいる好きな人の事などを色々話した。私はその好きな人も良く知らないし、私にとつてはちつとも興味のある人じやなかつた。それから前に云つたように今はもうAさんに關して一部始終わかつていなくなつた。そんな事から私は聞いたけどほんたうに乘氣で此の話を聞いていなくなつたのだ。そして私はその事に氣がついた。それからどこかでお互に氣嫌し合つている事にも氣がついた。私は何だか淋しい氣持がした。そして、「Aさんはもう私からは遠い所にいる。とり返しがつかない位に。」という事がはつきり胸にしみ込んだ。もうAさんと二人で繪を書いた時の楽しさなんか考へなくなつていた。私はまだあの時のまゝの私でいるのにAさんはど／＼新しいものゝ方に行つてしまふ。私だけ取り残されてしまつたんだらうか。そんな風にも思われて自分を齒がゆく思つたりもした。

春休みになつた。ちらかつてゐる机の引き出しを片づけていた時前に來たAさんの手紙が二三枚出て來た。私はそれを讀んだ。私はAさんという親友を失くしてしまつたのがもうたまらなくなつた。その場で葉書をかいた。しかし前のようにもう色々自分の氣持等書く氣はしなかつた。——二人であそこに行つたのもちようど一年前の今頃ですのね。去年とは随分違つた感じですよ。等と簡單な葉書にした。數日たつてAさんから葉書で返事が來た。その葉書はなんだか淋しい様なふくざつな感じがした。少なくとも私にはそう受け取れた。自分の氣持等を書いて、貴女にもつと／＼ざつ／＼くばらんに話せたらと思ひます、とあり、最後に「私の親友へ」と書いてあつた。私はそれを自分の日記帳に書きとめた。そしてうれいような悲しいような變な氣持になつて返事をすぐに書いた。久しぶりに長い手紙にした。以前Aさんと話し合つたように夢や希望や苦痛なども書いた。どうか私に何でも話して聞かせて下さいな。私もそうしますから。何だか最近貴女とど／＼はなれて行くような氣がしてなりません。貴女もきつとそうだと思ひます。——等とも書いた。私は色々書いてゐる中に、ふと此の手紙を出した事を又後で後悔するんじゃないだらうか、といふ事が頭に來た。私はそうだつたらもうたまらないと思つた。何べんもそんな氣持をくり返すのじやあほんとうにたまらないと思つた。休みも終つて學校の始業式の日私は遠くの方からAさんとBさんが歩いて行くのを見た。私はそれを見てたゞ、「あゝ」と感じただけだつた。私はAさんにあの手紙を出さなければよかつたとも思ひなかつた。Aさんの葉書に對しては、あの手紙を出すべきだつたと思つた。そしてもうその事を考へたくないと思つたけれど、いつかAさんの事が頭にあつた。そのAさんは私の考へたくないAさんだつた。

その日家に歸つて見ると思ひがけなくAさんから手紙がきていた。もの凄く長い手紙だつた。色々な事が書いてあつた。私は今日逢つたAさんからの手紙じやあんな様な氣がした。私は二度も三度もその手紙をよみかえした。そして大事にしまつた。その手紙は私の大好きなAさんからの手紙だつたから——。

### 私の心 中二市田恭子

私は今日一日、一体どんな事をしただらうか。何か大きな事をしただらうか。私はいつもこんな事を考へる。日は沈み、だん／＼そこいらが薄暗くなるといつも思ひ出すことが今日も私の胸にあらわれて來た。私はいつもこんな事をしていたら、大きくなつて……死ぬまでに何が一体出來ているのだらう。人々はきつと私の一生をかえりみてあざわらうのではないだらうか。私は 考へてもいつも同じような日を送つてゐるのだ。私はこんな事をしていていいのだらうか。いつも私は考へる。人々は今、生活に困つてゐるのに私だけがこんな事をしてゐるような氣がして、何だか おそろしい。私の一生に 何か 大きい希望があつたなら、美しい希望があつたなら、正しい希望があつたなら、私は喜びいさんで 進むだらう。でも私は今、一体何をしてゐるかしら、いつも／＼同じ事をくりかえしてゐる私、それで私は、いゝのだらうか。

もくせい 中三 水谷 浩子

何のかわりだらう

ほのかに甘い風  
ふと眼を上げて  
どこから流れてくるのか  
さがしてみただけれど  
いつかにげて去つてしまつていた

それは秋のはじめ頃  
けばくしい花の  
散つてしまつた後に  
おどろしなながら  
つぼみ持つ

あの木犀のかわりだつた  
あまいけれど……さびしい  
すつばいけれど……なつかしい  
優しい花よ

けれどそのかわりには  
捕えられない  
私が寂しい想いに  
ひたつてゐる時  
香りはしのびやかにやつてくる  
人の命のはかなさにも似た  
さびしい私をなぐさめに  
悲しい私を目ざませに  
そしてふと気がつく  
急いで行つてしまふ

仕事 中二 高見 澤隆子

さつき 白い布の上をすべつていた指先は  
今は野獣のように荒々しく息づいてゐる。

草を引きむしり 土をひつかく、  
その度に青い静脈はくつきり浮き上り、  
新しい血が湧き上るのさへ聞える。

頬を傳つて落ちる汗、汗、汗の玉  
うす氣味わるい虫が  
泥の中でひしめきあつていても、  
目はたゞ草にうもれて機械のように動く  
手をみるばかり。

山のようにつまれた草達のしかばね  
ほつと熱い息をつくと  
折から涼風にあゝ やつともとの世界にかえつた。

夕飯の煙が流れる。  
洗面器の泥水、  
そしてその中にある桜色の手。

夕風が露草色の歌を唄う。  
草がはらいのけられた後の  
新しい地が  
ひんやりと目にうつる。

中一 佐藤 由喜子  
やつと見つけ一生けんめいこねたけどちつともものびな  
いやわらかな櫻やに

中一 高田 静子

新調の洋服うれし朝ぎりの焼けあと道を學校へいそぐ  
せんたくを終へし日曜日手のひらにシヤボンの香りほの  
かにのこる

中二 吉野 佐千子

母上の白髪とる手にちらちらとたわむれおどる夏の木も  
れ陽  
あなたの毛長くなつたわと言われる度にすぐられる思  
いにおそわれる

中二 矢野 妙子

待つたかねと背中にくい父の手を感じつゝ急ぐ星空の  
道  
雨上り道邊の草をむさぼり食う小山羊の背中に光る水玉

中二 佐藤 容子

鶏にふみにじられしパンジロの花あはれなり雨しとしと  
ふる

中一 堀尾 哲一郎

松の木に数十本の手がよこり空の光をつかまえようと  
している

中一 好野 節子

まつ赤に咲いたダリヤの花に紛ぬか雨しとしと降る

「仕事つてこんなに情熱があるもんだつて

雨だれがかしの葉にぼつんと落ちて小さな葉おじぎする

その香り

病む人を

さびしい人を

はじらいながら

ふと慰めに來て

いつか去つてそのまゝ……

木犀の香りよ

偉大な黙示

中三 小林 稚 枝

私は新しい發見をした

それは偉大なもの

いや偉大そのものだつた

あい色に染つたただの山だ

何んの飾りもなく

がんこな体をつき出して

黙つて坐つている山だつた

これは私の生にとつて

大きな黙示だつた

これほどの大きさが

他の物にあるだろうか

私が倒れそうになつた時

迷いさまよう時

強く大きく私に呼びかけ

私に教え道を開いてくれる

私はそれに力づけられる

何も語らず黙つたままあの偉大

私は永久に山の黙示を仰ぎたい

「仕事つてこんなに情熱があるもんだつて  
知らなかつた」

夕風は 太陽のぬくみのまだ消えぬ

私の新しいほゝを

柔らかくなでて行つた。

時

中二 吉野 佐 千 子

カチ／＼と時計の音がしている。

あれは時を刻む音。

後から／＼と來る「時」を、次々刻んで行く音。

刻んだ「時」はもう歸つて來ない、

「今」と思つた瞬間、「今」はもう歸つて來ない。

「時」よ、お前は 人を不幸におとし入れ、また

幸福にして、黙つて過ぎ去つてしまふんだね。

運命と手をつないで。

月見草

中二 高見 澤 隆 子

いつか感じた事がある。この感觸、

冷やかな花びら――

あゝ妹のほゝだ。

この花びらのように柔らかで冷かつた。

そしてたゞ靜かに咲いて散つた妹。

月見草 あゝかよわい貴女は

さゝやかな流れの音にもふるえていた。

水の流れには孤獨がある。

その孤獨の中に 月見草は黙つて咲いている。

雨だれがかしの葉にぼつんと落ちて小さな葉おじぎする  
柿の葉の間から白雲が見えているよ千代紙模様のように

中二 田 中 敏 子

白い服ちらちら葉ごしに歩いている「アイス」の呼びごえひ  
びく初夏のひる

初夏のつよき光櫻の葉からちらちらこぼれ池の水しずか

中二 永 島 純 代

おさな子のさゝを持つ手に日がゆれてたなばたの日を思  
い出したよ

雨にぬれて緑の葉先にたまれる露夏の強日をはじきてか  
へす

中二 栗 原 シ ゲ 子

小川の水きら／＼光る夏の日に舌長く出し犬のかけ行く  
寫生に夢中になる弟の目は嬉しげに光る夏の日の午後

中二 坂 本 典 子

よち／＼と小さいあゆみの妹よ、庭のつゝも咲き始め  
ているよ

梅雨すぎて からりと晴れた初夏の日に 山はかなた  
くつきりと見える

日は暮れて村の小徑を一人行けば 山のふもとにふくろ  
うのなく

中二 渡 邊 功

雨降りて重くたれたりダリヤの花夏とはいへどはだ寒き  
この頃

マリをもらつて来たのはマレー半島を日本が攻めていた時だつた。

その時の事を記念にマリと名付けた。

小さいころは兄の手の上で下を見て尻ごみをしていたつけ。白い毛に、所々黒のぶちのある、毛のもぢやぐの犬だつた。父の部屋にこたつがあつて僕が歸ると喜んで、お尻を低くして、しつぽを振つていた。一緒に飼つていた黒猫と仲好しになつた。それまではよかつたが、御飯まで猫に食べられて、びつくりした眼で猫の後姿を見つめていた。

兄の勉強室はストーブがあつて冬とても暖かかつたのでマリはその室によく入つていた。

そして隅にふんをするのでやりきれなかつた。僕が頭ごなしにどなりつけようとしたら、マリの嘆願するような、可れんな眼にあつてその氣勢のやり場に困つた。千ヶ灘に行つた時だつた。夜毎に大きな五寸以上のガマが出て来る。ある晩マリがそのガマを見つけた。

僕等はマリがどんな事をするかを見ていた。月光に照らされてぶつ／＼したガマの体は澤山の隈を作つていた。マリは石のように動かないガマをうさん臭そうに眺め、まわりをぐる／＼と二三べん廻つた。ガマは知らん顔をしていい月だとばかりに氣持よさそうに腹を収縮させている。マリはそつとガマに近づいて鼻をつき出して臭いをかいた。そしてべろりとやつた。途たん逃げ出した

のはマリの方だつた。マリは首をふり／＼自分の小屋に入つた。その後でガマはゆう／＼と草むらに退散した。マリは小屋の中でさかんに口の回りを前足でしごいては「くーくー」と鳴いている。僕は口直しにと思つて鳥の骨をやつたが食べないでその夜中「くーくー」となっていた。可愛いマリも終戦後預けていた知合いの家で、くさをりを切つて逃げたそうだ。進駐軍の兵隊さんにもつかまつて可愛いベビーを生んで幸せに暮している事を祈る。

あ　　る　　朝　　初五　友　岡　禎　子

「つこちやんとお母様におこされた。三時半である。けさはお宮の森へ小鳥の聲をきいてみようと思つて、私とお兄様お母様と三人で、でかけた。ほとんど丸くなつた月が白くさえわたつている。どこかでにわとりが聲高くなくしている。げたの音がひびいて、氣がひけるので、なるべくしずかにあるいた。お宮へいく途中左がわのぬまでかえるがころころと聲でもことばでもあらわせないきれいな聲でないいた。お宮の森の中は、まつくらであつたが、三人は小さなやしろのえんにこしかけて、ちぢこまつていた。しずかでのわとりのなき聲とかえるの聲しかししない。お母様のひざでうつら、うつら、していた。

ホツホー、ホツホーとなき聲がきこえた。ふくらうらしい。くらくて時計がみえない。

また、三人でくつついてひえてくるのをがまんしていた。

カアー、カアーとからすがないた。なんだからすは早おきなんだなあとちよつとおどろいた。時計は四時十五分だつた。

すると、すぐピーピーと西の方でなきだした。むくどりだらうということになつた。十五分ぐらいしてすずめがなきだした。と思うと、だんだん數がふえていつた。

お兄様が、

「すずめがせめてくるんだね」といつた。

波のようにも感じられた。とてもたのしくなつて、みんなうすくまつてはいられなくなつた。

うす明るい空を木の間からみつめていた。

ふと、となりのみやしろの上にかぶさつてい大きな木の下の枝に一羽のとりがとまつている。やまばとのようなかつこうの、はとよりふつくらして、しつぽのさきが、そろえてきつたような形だつた。なかないかなと三人で手をにぎつてみていた。そのうちに北の方へとんでいつてしまつた。三人はがつかりした。

カツコー、カツコーとひんのいい聲でかつころがなきだした。ちようど五時である。

チイー、チイー、チクチーとちがう鳥がないてきた。よく庭にきてなく鳥だけど名がわからな

い。ホロ、ホロ、ホーとやまばとがないた。もうすつかりあかるくなつた。いつか、あたりはにぎやかな小鳥のオーケストラだつた。

私たちは、お宮をあとにかえりはじめた。すると左がわの大きな木からからすがとびだした。

キイキイキーと尾長が長い尾をひいておつかけた。またいつびきからすがとびたつた。これもべつ尾長がおいかけていた。尾長とからすはいつもなががるいが、目がさめるともうけんかをしてる。

五時二十三分である。

うちのちかくまでくると、ガアー、ガアーとあひるがないたので、三人で思わず笑つた。

### 巨人のサインボール

初五 宇津木琢弘

日曜日の夜、おとうさんと、おふろにはいつて

いと、「きつと、お前がとびあがつて喜ぶものを、今度もつてきてやるよ」といつた。

僕はおかあさんにいつも何かきくと、すぐ、それはなに、なにと、しつこくきく、くせがあるとわかれてるので、ちよつとはずかしいが、やつぱり、いわずにおれなかつた。

「ね、なにさ、なんだかちよつとくらゐ教えたつていいだろう。よう、なんなのさ」  
なかなか、おとうさんはいわない。

「教えるよ、教えたつていいだろう」と僕は、くつて、かかるように、した。

おとうさんは、

「じゃ、二十のとびらで、いこう」といつた。僕は早く何かを、知りたくて、必死に質問した。

「十八問。巨人にかんけいあるもの？」

「あります」

しめた。巨人だ、巨人だ。巨人にかんけいあるもので、うちへ、もつてこられるもの、ボールかな、そうしたら、よし、

「十九問。サインしてあるもの？」

「巨人の選手たちがサインした——ボール。」と僕はさげんだ。「そうです。」

わあつ、ありがたい、だれのサインかな。

だが、もう、二十のとびらがあつたので、きくことが、できない。

「ね、だれんだよう」

「いつもつてきてくれる？ あした？」

いくら、きいても、だめだ。僕はお湯をかけたりぶつたりしたが、どうしても、だめだ。

「ふん、そんな、いじわる、ないや。うそなんだろう？」わざと、おこつてみたが、ちよつともききめがない。

信用できるような、できないような氣持で、なかなかむれない。早く、ねないと、あしたの朝、おきられないぞと、あせりながら、ねむつた。ねむつたら、川上にサインをねだつたゆめをみた。とうとう、サインをしてもらつた。このぶんならほんとならしいぞ、と思つた。

朝のごはんの時、また、おとうさんにきいた。

「今日、見本をもつてきて、一週間のうちに本物をもつてきてやるよ」

僕があんまりきくので、少しおこつたように答えた。

學校へ、いく道も、そのことで、頭がいつぱいだつた。朝の体操が終り、足を洗いにいく時、荒

牧君を、よびとめて、そのことをじまんした。「ふーん」と答えた、だけなので、少しがっかりした。

家へ、歸ると、今度は、夜がまぢどおしい。見本だ。川上の字、青田の字、平山の字、どんな字かな。新しい、ボールのにおいがぶーんとするようだ。

その晩、なかなかおとうさんは、かえらなかつた。しやくだがあすの朝みようと思つて、ねてしまつた。朝おきてさつそくきくと、ゆうべは、會があつて、おそくなつたから、だめだと、いわれて、「なんだ、ごまかしてら」とおこつた。それから運わるく、會つづきで毎日、おとうさんはおそい。早く、ゆめででもいいから、サインボールをみた

いものだとおもつた。

「今日は、きつと、もつてきてね。」と僕はおとうさんがでかける時、おこつたようにしていつた。なんだか、だんだんあやしくなつてきた。いくら、がみがみいつてもしかたがない、と思つたが、かたくやくそくした。その晩も、おとうさんはなかなかこなかつた。でも、なんだか、今日もつて、きそうだ、と思つた。そこにはいつて、かえつてきたら、どうしよう、と考えた。そうだなあ、ま

ず僕の机の上に、小さい、かざりバットを三本組んで、そのまん中へ、ボールをのせ川上のサインを、すわる方に、むけよう。

僕は、いつか、またねむつてしまつた。おとうさんは、どうも、人を、いらいらさせる、くせがある。そしていつたことを實行してくれるといいんだけどなあとと思つた。

ばら、カーネーション、スイートピー、チューリップ、ダリア、きんせん花、水仙、ありとあらゆる花々が咲きみだれ、あたりに花の香りがたゞよる花園。私は、何事も考えず、たゞ、美しさに見とれていました。ふと目をあげると、そこには、母がほゝえんで立っていました。その後には、父がいました。四年間も、生か死かもわからずにいた父が。私は、夢中でかけよりました。私は父をじいつと見つめました。やはり父でした。やさしい四年前とかわらぬ父でした。父の胸に飛びついて行きたい気持で一杯だった。私は花園にいる事さへ忘れていました。母が、白いかごを、私の手に、そうつともたせてくれました。かごの手の所に、白の中に浮き出たように、小さなピンクのリボンが結んでありました。「お花摘んでもいいの？」母は静かにうなずきました。私は花を摘みはじめました。

後では、父と母がなにごとかさゝやいています。私は花を摘みながらも思いました。父も母もなぜだまつているのだろうと。悲しい気持が、もくもくとわきあがつて来ます。でも、一心に花を摘んでいる内そのことは、いつのまにやら心から消えてしまい、はればれとした心になつて来ました。いつのまにか、かごは半分ほど、美しい花々でうめられました。

ほつと大きな息をつき、私は、花を摘む手を休めました。すると、父と母がよつて来てほゝえみ

ながら、みだれた髪を父はそつとかきあげてくれたいの汗を、母はぬぐつてくれました。「かごにいつばいになるまで摘むわね。それまで父様もまつてゝね、ね。」

父も母も、やさしく笑いうなづきました。

私は五つ六つの頃に返つたように思えました。幸福でした。今度は、父も母もだまつて、うなずいただけでも満足でした。今の私は、大變幸福であるということが、強く胸の中についていました。

私は、又一心に花を摘みました。花園の、すみの、見えないような所に、小さなすみれが首をたれて咲いていました。私は、これを摘んでよいのか悪いのかと、しばらくまよいました。私はやはり摘むことにしました。摘んで多くの花といつしよにかごに入れました。

「洋子」

静かな、消え入るような父の聲、長い長い間きゝたことも聞けずにいた父の聲が、私の手からかごがはなれました。花は、さまざまに散りました。

あたりは眞暗です。安らかな弟の寢息、淋しい葉ずれの音。眞暗な中に父のほゝえんだやさしい顔がくつきりと、うかびました。

「洋子」

やさしい、なつかしい父の聲、強く耳に残っています。

武彦さん。或夜こんな夢を見ました。夢の中で父を見、父の聲を耳にすることが出来ました。こ

明星ももう創立廿五周年と聞き、へえ！もうそんなになるの、と驚いた。そうすると私など大先輩というわけだが、最近明星にも大分御無沙汰して近頃の様子が分らない。生徒の数も増え、盛大らしいと思つて喜んでいただけだ。私が女學部の一年に入つた時にはまだ最上級の五年生が居なくて、中等部は未完成だった。次の年に五年生が出来、その又次の年に初めて女學校の卒業生が出た。十四、五人だったと思う。私達の組が十八人から廿八位の人數を下して、女學部隨一の絶對多數クラスとして威張つていた。私たちの上の組など八、九人しかいなかった。そんなことから考えれば學校の經濟は苦しかつたに違いないけれど、私たち生徒のがわから見れば天國みたいなものだった。第一に同じ組は勿論のこと、女學部全体がお互いによく知り合つて親しかつたし、先生も一人一人の生徒にとても親しく接して下さつた。そして、限りなく懐しい楽しい思い出を、バイ私たちの胸に残してくれた。

授業として教わつたことの方々は忘れてしまつても、冬の教室でストロップを丸くかこんで勉強したことは忘れないし、春の日に先生を教室からつれ出して花をつみながら散歩したことも忘れない。色々な先生方のこと友だちのこと、そして實に楽しく遊びながら學んだ明星の生活の思い出は今この殺ばつた世に生きる私にとつて貴重な寶だと思ふ。

明星を出てから十余年、戦争や、家庭のことや何やかやで屢々中断しつゝも細々と續けて来たのは演劇の道だが、苦難の時ほど思ひ出すのは明るく赤しがつた明星で得た豊かなみづ／＼の心であり、赤井先生のお話「Whistle under any circumstance」(如何なる境遇にありとも口笛ふけ)である。明星では行儀作法のやうなことは余り習わなかつたが、もつと根本的なこと、人世の價値あるもの、美しいものに對するしつかりした眼を養つてもらつたし、くだらないものその場かぎりのものを

それが事實だとしたら、あとからこんな考えが、とめどなく浮びます。私は、父も武彦さんのお父様も、きつと、お元氣で歸つて來られると信じています。今だつて父様はいらつしやいます。私達の心の中に。

父様方は、いつでも私達心の中にかえられるのです。いつまでも私達を、見守つていて下さいませ。そしていつか姿を見られる日が來るでしょう。きつと來ます。それまで、私達は、りつばな人間になつて父様方に、喜んでいたゞける様に、なつていたいと思つています。

羽 織 高三 西村 絆 紗 子

「此の様子は何んですの、もう一度やりなおしていらつしやい」とK先生は私を叱つたまゝ、他の先生と話を笑かせていた。

私は黙つて開かれた羽織を疊んで、職員室を出た。焦々した氣持と叱られた後の寂しさにとらわれながら歩いてると、「かえらない。随分待つたわ」後を振り向くとMさんが私のかばんをもつて待つていた。「御免なさい」「何んだか元氣がないわ、何時もの貴女と違ふわよ、ちよつと待つていて、これおいてくるから」Mさんは私に出席簿をかざして見せ、小走りに馳けていつた。私は校門の所でMさん待つた。

時計をみるともう五時、暮れやすい冬の夕暮がしのび寄つて來て、また下宿のおばさんに怒られる。そんなことを考えながら、思はずオーバーの衿を立てた。

暫くしてMさんはK先生と出ていらした「御免なさい」「いゝえお互い様ですもの」Mさんは何もそれに答えず微笑かに笑いながら顔をK先生に向けた。私は急に此の二人の話の中に入つてゐるのが耐えられなくなり八十余ある階段を息はずませながら降りた。

「さようならK先生、さようならMさん」と私は手を振つた。二人は驚いたと云うよりあきれた顔でその場に立ち止つていた。

私は二人をそのまゝにして道を急いだ。

田圃道へ來たので元の調子になつた。

見分けのつかない景色が何んとなく私をおびやかした。Mさんが早く來ないかしら。あんな人來なかつて、と心は否定しながらも念じている。後から人が馳けてくる。

近づいて來た。Mさんだ。

私はその儘馳けて行こうとも思わなかつた。「どうしたの、意地悪ねえ」Mさんは後から話しかけた。私は黙つて下をむいて歩いた。「どうして黙つてゐるの」「うゝん何んでもないの」私は顔をそむけながら答えた。いけない。

自分の感情がすぐ露骨に出てしまふ。

Mさんはそんなことを別に氣にもせず、「お裁縫終つて氣がせいゝしたでしょう」。

「あの時余程手傳つて上げようかと思つただけれど」と口早に一人きり私の顔をのぞき込んだ。私はすつかり當惑して、口にすべき言葉を全く見失つてしまつた。下駄にあたる石をけりながら道を急いだ。

自力で考え分ける力をつとめてつけたように思う。その點でも私は赤井先生に心から感謝している。

文藝部の方から「何か私たちが後輩に對しての言葉がありましたら」と云われたけれど、とてもそんなエラそんなことは云えないので、一つ最近の経験をお話します。私たちがやつてゐる薔薇座といふ劇團で、この間永井隆先生を劇化した「長崎の鐘」といふ芝居をもつて大阪から九州方面へ巡演した。その歸り、瀬戸内海の、ひかり大島といふ所へ寄つた時のこと。この大島の高校で座談會をやるといふので出かけていつた。女學校だつたのが男女共學の新制高校になつてゐる譯なのだが、いつてみて驚いた。小さな人口、二萬位の町の學校で、文化にも恵まれない島の中なのに、その立派さそのきれいさ全く驚嘆する程だつた。校庭も美しく、校舎も廊下のすみ、まるで手入れがゆきとよき、教室には實に良い繪がかけてある。生徒の態度の立派さも感服してしまつた。禮儀正しく静かで、しかも悪びれずてきばき、はきはきしてゐた。そのあとで私たちの芝居を殆ど全校で觀に來てくれたのだが、劇場での態度も、大阪や、福岡等はじめ九州各地の生徒たちとは此べ物にならない立派さだつた。大てい劇場も「パイ若い學生生徒が詰め込まれるとその騒ぎは物凄くて、せりふもロク／＼きこえないのが普通なのに、大島だけは丸でちがう。ぎゆう／＼押され乍らもじつとしてしんと觀ている。しんとしてゐるのでせりふもよく聞え、動きもよくみえる。よく聞えよくみえるのでよく分る。よく分るから面白い所ではいつたに手を叩くしよく笑つたり泣いたりしてゐる。といひたわけではまず東京の真中で相當洗練された觀客相手に芝居をしてるやうにうま／＼つた。大阪、九州でも年少の學生さんたちの多く來た時はお話にならぬ騒ぎだつたのと思ひ合せて改めて感心し直したものだつた。瀬戸内海の大島など、小さな町の學校でこんな良い學校があるといふことをおしらせすると共に、明星の皆さん、ふと行きすりに入つてみた旅の人にも、美しい、立派だと思われするように、益々明星を良い學校にして下さい。

夜 空 (二夜)

高一 猪狩 清子

(一)

藍色の深い海に

ひとつほりり投げた真珠が

あんなに澤山にひろがつて

小さな天使の目になつて

いつまでも、いつまでも

輝やいている

(二)

星……

私は見た

私は見た

誰にでもほこりたいような

下宿についた時は、丁度六時を打つていた。Mさんの波んでくれた水に冷えた足をひたし水気の切れぬ足で二階に上つた。

伯母さんは予想していた通り怒つていた。

「今頃迄何にしていたの、遅くなる日はこう／＼こうで遅くなると云つて下さい。人様の子を預かる責任は重いんですからね」Mさんは伯母さんに叱言を云われてなか／＼二階へ上つて来ない。暫くしてMさんと共に夕食に向う。

伯母さんには不機嫌な顔で私とMさんをちらちらつと見る。私はたまりかねて空の方に眼をやつた。「明日も低気壓」とぼつんとMさんに云つた。Mさんはにやりと意味ありげな微笑を残して座から立つた。私も追われるように伯母さんの視線を感じながら二階に上つた。

「伯母さんわかつたかしら」とMさんの背に言葉をかけた。「大丈夫よ」Mさんは振りむきながら「あの伯母さんお天気だから嫌ねえ」「うんいい時はとてもい／＼けれど」私はかばんから羽織を出して「やりなおし」と低くつぶやいた。

「やりなおし、どうして」「どうしたつて仕方がないわ」Mさんは書いていた手紙の手を休めて、私の傍へ来た。そして袖付けの所をみて黙つて私の顔をみた。急に寂しさが込み上げて一言Mさんが「これで！私なんかもつと雑よ」と云つてくれたら、私はこの羽織にくらかの自信はもつていたつもりだつた。私はMさんに背を向け袖付けをほどいた。ほどく度に、かじかんだひびの手がきれにひつか／＼つて痛い、それと共に皆の嬉しそ

な顔を思い出した。

みな家の人の手を借りて、私は一人でやつたの此の難しいものを。侮蔑した氣持が、少しづつ起つて来るが、それもすぐ崩れてみじめな私をそこに見出す、涙が後から／＼頬を傳つて赤い袖裏をにじます。火の氣一つない冷い室の中に心の冷えきつた二人がぼつんと。

家が戀しくなつた。私だつて家に居れば、涙に濡れた手を許許に入れた。無性に暖いものが戀しい。そつと電氣に觸れて見たが、矢張り私の欲しているものとは違ふ。

後四日立てば家に歸えることが出来る。

家から下宿へ歸つて来てまだ二日しか立つていないのに一年も合わぬ様な氣がする。

疎開して来て約一年立つているが、何時も家に歸りたい。氣持だけは變らない二年生の時始めて縣立の龍ヶ崎の女學校へ入つた。女學校のある此の町が家迄約五里離れているので私は此の町へ下宿した。

始めて家から離れる日のこと、母は私の重たい荷物を持つて停留所迄送つてくれた。

そこにはもう／＼と木炭を焚く煙の中にバスが待つていた。

「氣をつけてね……」と云う母の言葉から逃げる様にしてバスに乗つた。バスは走つた。

手を振る母が小さくなつて闇に消えた。

始めてバスで知らぬ土地へ行く心細さで胸の中は高く波を打つていた。

母から手渡された切符と箱を大事に膝の上とポ

夜のはなびら

濃紺の沈んだ空に、

小さなく、白い花びら……

息をしていた

匂やかに笑っていた

ためいきをつき

あくびをし、

が、喜んで坐っていた。

一つも動かさずに、

けれど、生きていた

すばらしい夜の神秘――

ケツトに入れた。箱をあけてみるとすぐかき餅の臭が鼻について今迄たえてきたものゝために胸があつくなつた。

私はその暖かい箱を胸に抱いてみた。

暖さが電氣を通じる様に傳わつてくる。

泣いてはいけない。唇をぎゅつとかんで座席の前の人々の視線をさけた。外は暗い、灯がうすくぼんやりぬれている。

「まだねないの」Mさんの言葉に夢からさめた様な面持で羽織をしまつて床をしいた。

冷い床の中に身をちぢめた。やがて仰向けになつて低い天井を仰いだ。いろいろのことが思い出されて、今頃父は何にしているのかしら、こんな寒い日は殊に軍隊の父が思い出されて仕方がなかつた。

「貴女何度呼べばわかるの」Mさんは半分身体をのり出して私を叩いた。「え、何に、ちつとも知らなかつたの」「お裁縫したの」私は視線を天井にむけたまゝ、「かまわないわよ」と捨鉢に云つた。

Mさんは驚いたように「駄めよ、やらなければいくら他の人が家の人に手傳つてもらつたつてその人達はそれでいゝじやないの、苦勞してやる所によいものが生れるのよ」私はうち切る様に寝返りをうつて「お休みなさい」と冷く云つた。Mさんもはじめられたようだつた。私はふとんを深くかぶつて冷い足をMさんの中に入れた。Mさんは驚いたらしく私の手をつねつた。温かゝつた。枕許をみると羽織がぼつんと置かれてある。

ふと眼をさますとあたりは暗く時計が丁度四時をうつつている。

見るとMさんがいない、驚いてふとんから顔を出すと枕許の羽織がない。

暗い電氣がついていて寝衣の上にはんてんをかけたMさんが一生懸命羽織を縫つている後姿が見えた。時々冷い手を暖めるように口の所へ持つていつた。

「Mさん」呼んでみようかと思つたが、どうしても聲が出ない。私はそのまゝ床の中にもぐつた。衣ずれの音がしてMさんが靜かに私の枕許へ来て曲つてゐるふとんをかけなおしてくれた。暖かさが冷えきつた私の胸の中にふき上げて来た。

Mさんの聲に起された。羽織は元のまゝにおかれています。夢だつたのかしら、

半分疑つた氣持でMさんを見ると眼がいくらかはれぼつたかつた。Mさんは私の床を上げてくれながら「どうしたの、泣いたりして又家の夢」と私の枕を示しながら明るく笑つた。

その眼には涙がにじんでいた。

どうしてMさんは涙ぐんでいるのかしら、私は不思議な氣持で羽織を着てMさんに笑つて見せた。Mさんも笑つた。

その時伯母さんのどなる聲が聞えた。

「天氣予報に狂いなし」と云い捨て、Mさんは下へ降りていつた。

私はMさんの寝衣をそつと疊んだ。

窓を明けると、すがすがしい空氣が頬にふれ私は自分が無性に悲しかつた。

よくある事

三郎の家は裏通りの小さな古着屋だつた。人通りのない、どことなく汚れた裏町の商家では、賣り上げだとして知れたものだ。店の中は二三枚が上物で他はすり切れたような古物ばかり薄暗い店の中ら下つており、奥に頭のはげ上つた六十がらみの男が眼鏡を鼻の先につけ、上眼づかいに外の通りを見てはよくある古着屋だつた。

三郎達はその裏の家に住んでいた。店は小さく二階は人に貸してあつたからだ。二階の借主は追いつていられたのだが、未だに出ていかなかつた。どこも同じ不景気で、出ていけば住む家はあるにはあつたが保証金を數萬圓も取られると聞けば、出ていきたくもいかれなかつたのだらう。

しかし不景氣は二階の人達だけでは決してなかつた。三郎の家も赤字で困つていた。父もそろばんを持つたまゝ考へ込でいる事が多かつた。母も夜になるとつかれてしまい、仕事も手につかずぼんやりと父の坐つてゐる座ぶとんの破れ目をあれもなおさなきやあと考へながら見ていた。そう云う時、室のすみに坐つてゐる三郎もなぜか暗く憂うつになるように思えた。だが一人彼の兄だけは氣にもとめぬようにラジオをかけジャズを聞いていた。兄は會社につとめていた。

暫くして兄の月給がふえてきた。そして彼が家に出す金も多くなつた。店も冬が近くなり賣れゆきがよくなつた。家計も少しよくなつた。父もほつとしたらしかつたが、金のがわりにこん度は兄が父にいばりちらすようになつた。おれが家の經濟を救つてやつたのだ。おれが家で權利を要求したとてあたり前だ、と云う考へが兄の心の底に横たわつてゐるらしかつた。だから父を馬鹿にするようになった。三郎は兄に怒りを感じた。戦争中、軍隊で兵隊を威嚇していたのが今になつて現われたのかと三郎は兵隊生活の影響の根づよさに恐怖を感じた。

兄が父を馬鹿にする様になつてから、父は母に向つて一層怒りつぽくなつ

た。元來父は短氣だつた。けちだつた。母は金を使いすぎると云つては怒られ、長話をすると云つては怒られた。だから映画などは二三年來見なかつたし、他の娛樂もなにもするではなかつた。へそくりと云う言葉など母にとつては繪に畫いた餅にすぎなかつた。朝から晩まで働かされ、夜寝るのがなにより樂しみだなどと云う母が三郎にはかわいそうでしかたがなかつた。父や兄をにくらしく思つた。母に文句を云えとすゝめたが、母は「お父さんに立てつくなんていけない事だよ。」とかえつて彼がしかられてしまつた。かげでは泣き事を云うくせにと三郎は母の心を不思議だと思ひ、封建的とつぶやいた。

いきおい三郎は家がつまらなくなり外に出歩いてばかりゐるようになった。實際三郎にとつて外は晴れた晝間であり、家は梅雨時の晩であつた。

今日も三郎はいとこの家に行つた。家を出て行く使ひなら三郎は喜んでしたのだ。とくにいとこの家へでは。

用事はすぐすんだが、三郎は家には歸えらうともせず、いとこの子の幸子と散歩に出かけた。半年見ぬ間に幸子は見違える程女らしく、きれいになつていた。二人は昔から幼友達だつた。今歩るゐるこの道も昔の思い出がのこつていた。

「あの木おぼえてゐる？」と幸子はふりむいた。「あの木かい、あれは君が落ちてけがをした木だろ。」三郎は幸子を見た。

「そうよ。よくおぼえていたわね。」一郎はほゝえんだ。ありがたいよくおぼえていてくれた、と自分の頭に感謝しながら。

道を歩いて行くと、人は幸子の方をふりかえつていつた。三郎にはそれがねたましく、またほこりたい氣になつた。人がふりかえるも當然と思へる程夕日を浴びた幸子の後姿はすばらしかつた。

その日三郎はいとこの家に泊つてしまつた。

商店と商店のすき間が三郎の家の出入口だつた。右側は館屋、左側は三郎の家の店、その二軒が作るそのすき間はじめくとしてねずみがどぶ板から顔を出す位だつた。三郎はそこを入つていく時、いつもいんうつな氣持にさせられた。しかも今日は父から「今までどこをうろつていた。」とどなら

れるのを思うと、心も足もなかく進まなかつた。

左側に店の入口があるところまでくると、入口のガラス戸が少し開いていた。三郎は「おやおかしいな。」と思つたが父が早く店を開けに来たのだらうと思ひ、怒られずにすむと知らん顔をして通りすぎてしまつた。

三郎は台所の戸をそうつと開け、中に入つた。とたんに向いの障子が開いて、だれと母が首をだした。

「おやお郎かい……」と云いかけて首をひつこめ、父に三郎がかえつて来た事を云つてゐるらしかつた。三郎は父のいるにおどろき隣の室に逃げ込もうとしたが、「三郎ちよつと来い。」と父に大きな聲でどなられてしまつた。三郎はしぶく茶の間に入つていつた。

そこは茶の間とは云つても寢室にも座敷にもなる。三室しかない三郎の家ではきれいな室だつた。父は電燈をつけた下で（電燈でもつけなければ三郎の家は薄暗かつた）眼鏡を光らせながら三郎をにらみつけていた。三郎が坐るやいなや、「今頃まで何をしていた。」とどなりつけた。

「無断で人の家になど泊つてきていいのか。誰がそんなことを許した。」三郎はだまつて下を見ていた。口ごたえでもしようものなら、こぶしが飛んでくるかも知れなかつた。父の口ぎたないわめき方は全くつんぼにでもなつた方がよい位だつた。父が少し静かになつた時、

「お父さん、今日お店の方に行つた？」と下をむいたまゝ小さい聲で云つた。「それがどうした。お前のこととなにか關係があるのか。はぐらかさうつたつてだめだぞ。」片手でさせるをはたきながら父は三郎をにらみつけた。

「じゃあお父さん行つたの？」

「いや行かぬ。だがそれがどうした。」と父は煙をふき上げた。

「じゃあ誰があそこの戸を開けたの。かえつてきた時あいていたよ。」

「どこの、店の？」父はさせるに煙草をつめるのを止め、三郎をみた。

「うん店のだよ。」三郎は下をみつめたまま云つた。云いながら自分でも

「おや變んだぞ、誰が開けたのだらう。」と思つた。

「ほんとに開いていたのか。」父も不思議に思つたらしい。

「ほんとだよ。」三郎も變に思ひそろくと首を持ち上げた。

父は立ち上りガラス戸を開けて出ていつた。三郎はなにげなく云つたことがかえつて自分をおどろかせた。この間にと二疊の自分の室に逃げ込んだ。

しめつた空氣が彼をぶるつとふるわせた。三郎はポケットから幸子の寫眞をとり出し、机の上に立てかけてながめた。そしてあわてて引出しにしまひあたりを見まわした。なぜかこの寫眞を持つてゐることを人に知らせたくなかつた。兄は寢てゐるし、母は台所で朝飯の仕度をしてゐた。三郎は安心した。そしてうさぎの箱に近づいた。うさぎは室のすみに寝をべつていたが、なにかくれるのかと思ひ鼻を突きだした。このうさぎだけが父に反對して買つた唯一のものだ。だからかどうかは分らないが、三郎はこのうさぎがかわいかつた。抱き上げると指をペロペロとなめた。

「母さんく。大變だ、店の品物がとられたぞ。」彼はびつくりした。

「ええ。」おどろいて母が台所から飛び出して来た。父の叫び聲に眼をさまし兄も起きてきた。

「どうした。」兄の聲が聞こえた。

「お前、お店の品物がとられたんだとさ。」兄もおどろいたらしかつた。

「まゝともかく店に来てくれ。」どたばた小路を走る音がして二人店の方にかけていつた。後には「ばかな話だ。」と舌打ちする兄の聲が聞えた。

三郎は泣きたくなつた。家は破産する、學校などは止めさせられる、どこかにつとめなければならぬ。「給仕。お茶持つてこい。なにぐずぐずしてゐる。」とどなられる自分の姿、ペコペコ上役におべつかをつかわなければならぬ。世の中はくだらない、いつそ死んだ方が幸福だと山中の人の通らない所にいつて自殺する。ばかげた話だがほんとにそう思つた。そしてうさぎを抱きしめた。うさぎの顔は幸子に似てゐるように思えた。なんてロマンチックな奴だらう。

「父さんが馬鹿だつたんだよ、たしかに。」兄は父を見ながらそう云つた。その日の晩のことだつた。父はしよんぼりして火鉢の中を火ばしでかきまわしてゐた。三郎は母のよこに座り、母の白髪もだいぶふえたなと思ひながら見ていた。彼はこれからどうなるのかと考へるとかなしくなつた。

「そうお前、お父さんはかりのせいにしてもしようがないじゃないか。」と母は兄をたしなめた。

「そんなこと云つても父さんがあすこに錠をかけなかつたからこそ、こんなことになつたんじゃないか。」

「それはそうさ、だけど、いえ、そうかも知れないけどお前……。」

「なんと云おうと父さんがいけなかつたんだよ。」兄は煙草をくわえた。「だけどお前そう父さんばかりを……。」母はこんな時になつても父を恐れ

ていた。で父を見ながら兄にだまつてくれと目で云つた。「いや母さん、たしかに私が悪かつたんだ。」父はぼそくと云い出した。いつもの父に似ず母にやさしかつた。

「私が悪かつたんだよ。」と云う父を三郎はなんだか衰れに思つた。「ま、起つてしまつた事はしかたがないとして、一体どれ位とられたんです。」兄はあいかわらず自分は局外者だと云うような顔をしていた。

「十六枚だ。大体三十萬圓位。警察にはとどけたのだが。」

「警察なんかにとどけたつて、とられたもんは出てはこないよ。」兄は冷やかに云つた。「だが萬一。」父はためいきをついた。

「萬一なんて事をたよりにしているからこそ、こんなへまをしたんだよ。」兄はしんらつた。父はだまつてしまつた。

三郎はじつと坐つていと体がふるえそつた。翌日は十二月二十四日、クリスマスだつた。町はクリスマスツリーをかざつた店などがあつたが彼らの店は一軒ぼつりと閉り「昨日当店盗難に……。」と書いた紙がはられてあつた。

人はたのしそつでそんなはり紙などに目をとめるものは一人もなかつた。三郎は一人自分の室にとじこもり考えていた。人間の使命が眞理の探求だ

藝術だ、と云つても經濟がそれを許すかどうかは問題だ。藝術の才能を持つていながら家が貧乏のために認められぬものもあると思うと、今一人は才能

はなくとも家が金持ちのために良き師のもとにつき名演奏家となることだつてよくあることだ。世の中は金さえあればなんだつて出来るんだ。金の馬鹿

野郎。そう考えて彼は金をのろつた。資本主義をのろつた。だが彼がのろつ

たからと云つて資本主義がどうなる譯でもなく、かえつて彼がその下に壓しつづされそうだつた。

足元にうさぎがじやれつた。うさぎはしあわせだ。金がなくても生きていける。

兄が入つて来た。そしてうさぎを見つけ、「おい、うさぎなど飼つておくと餌ばかり食つてしようがない。殺して食つてしまおう。」と云つた。彼は

おどろいて兄の顔を見た。三郎はにくらしくなりうさぎの代りに兄を殺せばいいと思つた。それが兄に分つたのか彼の方をむいてにやつと笑つた。

その時、ガラリと玄關の戸が開き、「ごめん下さい。」と誰かがどなつた。母が寝不足な返事をして出ていつた。

「僕は警察のものですが、今朝この先の學校でお宅のらしい着物が出て来たのですが見に来てくれませんか。」元氣のいい聲でどなられて小さい家のこ

とど奥まで通つてしまふ。父が飛び出してきた。そして警官と一緒にあたふたと出ていつた。

三郎はうれしくなつた。早く良い報せをと祈つた。その時心の中に幸子の顔がちらと浮んで消えた。

「三郎、品物が出て来たよ。」と母は兄を探しながら家中にどなつた。兄は一人知らん顔をして煙草をふかしていた。出てなんかこない、と云つ

たのは誰だつて、と三郎は兄を横眼でにらんだが、兄はそれが分つたらしく三郎の云おうとする先に、「三郎、もしもあれがうちのでなかつたらどうす

る。」と底いじの悪そうな顔をして云つた。うそだ、そんなことあるものか、うちのに決つてゐると三郎ははげしく心の中では打ち消したものの、つつ立

つている兄の顔を見ているとなにかその心ももしや、と思つようになり体はふるえだした。もしや、それがうちの品物でないとしたら、三郎はつばを

のみ込んだ。それじゃ又もとにぎやくもどりか。一体自分はどうかなるんだ。家は破産か、三郎はいてもたつてもいられない氣がした。

とにかく父がかえつてくれれば分ることだ。お父さん早くかえつてきてくれよ。早く、早く、三郎は玄關へかけだしていつた。そして小路をにらめつけ

私は昨日「吹雪は光る」という演劇を見た。私には細かい演技上の批評やそのような演劇批評はできない。たゞあの劇を見て感じた事だけを書いてみる。私はあの劇は本當によい劇であり、意味のある劇だと思つた。そして又、やつている人達も皆眞剣であつたように思う。(特に最後の場面、英雄のあやまちを知つた薫が同時に自分のあやまちを知り、一切の責任を自分が取つて新しい生活に茂雄と早苗を送り出す所は打たれるものがあり、私も又その態度に同感せざるを得なかつたが、しがしなほまだ、薫の考え方はあれでは足りない所があるように思う。私は教育というものは決して人間だけの力では本當にできないと思ふ。薫は未だそれを悟つていないのではないかと思はれる言葉があつた。それは「私は早く新しい早苗さんを作り出さなくては」という言葉だ。勿論教育は人間の修練にはなる。しかし人間が人間の修練したり創造したりする事は絶対に出来ないといつてもよいだらう。私はそう思う。もしこの點に氣附かないならば、薫は又絶望的な状態を見、聞き、自分の内にも感ぜざるを得ないであらう。彼女は、あの人達——無智と貧困のうちに眠り苦しんでいる人達——に光を與えるのが目的であつた。そして「それは必ずできる」といつている。私はそれを聞いて何という豪邁な言葉であらうと思つた。光を與える事ができるのは光それ自身であり人間ではない。いくら純粹な情熱と理想を持つ

ている人の場合でもそうだ。人間がどうして他の人間に光を與えるなどということができる。小松が「俺はどうせ先生のオモチヤなんだ」といつた時に彼女は怒つた。そして「そんな話らぬ、人の噂に迷わされるような者なら明日から教場にも来ないこと」と宣言するが、こゝにも彼女の豪邁によるアヤマチを見ることもできる。彼女は勿論、小松をオモチヤにする氣等は毛頭無かつたに相違ない。しかし人が他の人々を自分の意志に服従させようとする所には(いくらそれが好意的であらうと)對等な人間關係はない。だから小松も言つてゐる。「勉強だつて、ふん、どうせ俺は先生の思う通りにされるのだ」と。又彼女は教育という事を彼女自身の始めた個人的なものであるが、教育は公的なもので自分の感情や意志によつて左右してはならないと思ふ。教育は使命だ。だから例え小松が東京に行つて勉強したくないといつても、教場へ来ることを禁止する等という事は許されぬ。小松がどの方向に進もうとしていても教育はなされなければならない。ある感情やその他の環境の關係で、彼が勉強を止めようとする時には、できるだけの手を盡して勉強を妨げる種々のもの(精神的及物質的)を取り除くべく努めなければならぬ。ところが薫の場合、自分の意志が小松に受け入れられなかつた時、飽くまでも自分の意志を通そうとしてあのような言葉を吐いた。それが、本當は勉強したいけれども自分が人の意志に左右されている事に

惱んでいた小松を、どうにももならぬ絶望に追い込み、そしてあのような衝動的な行動に追いやつたのだと思ふ。私は、小松が「勉強したくない」として、自分は先生のオモチヤなんだ」と云つた時に、薫は先づ第一に自分を反省すべきだと思ふ。しかし彼女は強い情熱を打ち込んでその仕事をやつたので、自分に絶対そのような人をおモチヤにする氣持はないのだと信じ込んでいた。私は思う。彼女には自分では氣附かなくても、やはり小松をおモチヤにしている所があつたのだ。それは一つの言葉からも解る。「私は貴方の才能を伸ばして見たい」。この言葉だ。勿論教師が生徒の才能の伸びる事を望むのは當然だ。しかし生徒自身の意志を無視して才能を伸ばす事はできない。東京に行けば勿論高い教育を受けて知識は増すであらう。しかしそれがイヤ／＼ながら無理にやらされたらどうであらう。ちつともその人自身の才能はのびはしない。例え山の中で眞黒になつて働いていてもそこに生甲斐を見出して生活しているのだつたら、その方が下手な高等教育を受けるよりズツト価値がある。その人自身に勉強する意志があるのなら、どこにいたつて勉強はできる。小松も人の「チンコロ」になるよりも山の中で眞黒になつて働いて人並に生活する方がよいといつてゐる。私は、薫が愛を持つて、たゞ小松自身(相手)の幸福を望むとしか考えず、自分の意志を絶対だとする豪邁さがなかつたら、彼をあのような失敗に陥れないで

すんだと思ふ。そして自分が自らの意志だけを通してとして本當の相手の意志を理解せず、又尊重してゐなかつたことに氣附いたであらう。しかしそれに氣がつくのが遅すぎた。でも苦しめ失敗を通して、そのアヤマチを悟つた時に、それはすべての關係者(小松、早苗、つね)にとつても實に大きな收穫だつた。薫がハツキリと自分のアヤマチを悟り、本當に謙虚になつて自分のアヤマチを人の前に心から許しを乞うた時、すべての人の心がけ合つて美しい場面、涙ぐましい光景が現われ、各々が皆自分のアヤマチを後悔し本當に新たな喜びを以つて新しい生活への決意をしたのだと思ふ。人の方あるいは自分だけの力で多くの人に光を與えようとする所に、いくら愛によつて始つたとしても、やはり薫のように自分の意志が第一でありとする自己中心的態度になり、反省がなまぬるくなり、多くの人に苦しみを與えるようになるのだと思ふ。よく啓蒙だとか無知な人々の目をさまし光を與えるのだといつて、社會運動等が行われるが知的方面ではともかく、本當に人の魂に光を與えることは決してできない。もし人の魂に光を與へることができるとすれば、自分がまず光を受け、そしてその光の方面を多くの人に示して示すことができるだけであつて、決して人は、たゞ生れたままの本性では、人に光を與えることはできない。これが、私のこの劇を見ての感想だ。

## 私が明星で習つたこと

杉山清

明星は、私においては、教えた學校であるよりも習つた學校のような気がする。それほどに明星は私にアツト・ホームの雰圍氣を興えてくれる。上田先生が、「杉山君は明星へ氣晴に來ている。君が來ると喧ましくして仕事が出来ん」と、時に笑はれるが、正にその通りであろう。併し、これは、私にだけ現象ではない。昔、軍教はなやかなりし頃、ある教官が、「自分は某學校に行くときには、家の支關を出る時から威張つて行くが、明星に來る時には、どうも精神がなごやかすぎて困る。遠くの方から『先生お早よう』などと聲をかけられると、『なぜ敬禮せんか』と怒鳴ることを忘れて、つい『ようお早よう』と答えてしまう。」と話したことがある。事實、この教官先生、やかましい例の査閲の時、査閲官から「氣を付けの姿勢がなつておらん、訓練が足りん、眼がきよろしくしとる」と叱られたが、晝食懇談の時、査閲官に向つて、「お叱りの通りですが、明星の子供は可愛くて、自分の子供に向つて號令を掛けるようでも何でも旨く行かんです、ハア」とおそる／＼釋明陳辨これ努めたのであつた。ここに明星の雰圍氣があり、それが私に氣晴し講義をさせる所以であるかも知れぬ。

大体、こういう雰圍氣は、もと／＼上田先生ご自身の創られたものと、先生には誇めていただきたい。というのは、昔、上田先生は、八時になつても朝禮の鐘を鳴らせなかつたからである。鐘をもつたお爺さんを引きつれて、今も同じに有るか無しかの校門に仁王立ち——というのには少ししなびているが——背のびして、「爺さん待て、今頃來る奴は、朝飯かみ／＼飛び出して來る。鐘にあわてて走ると、胃が悪くなる。横腹が痛くなる。まあ一寸待つてやれ、……もう橋まで來た、もういいだろう。」カラン／＼。これが先生の毎朝の人情行事であつた。このヒューマニズムに非常に屢々救われた愛すべき先生もあつた。

併し、この人情を甘くみてはならぬ。今日、甘く見ている學生も無きにし

もあらずと、氣晴し先生カモ知れぬが私は、正直なところ嘆きもし怒りもしている。爺さんの逸話を書こう。この爺さん。若い頃は出生地界限のきけもので、誰一人立ち向う者もなく若い時から怖いと思つた人は一人もなかつたという。その爺さんが「上田先生だけは怖はくて／＼たまらん。腹の底まで見すかされてるようで」と、と何回となく私に述べた。「わつしや、年をとつて先生に救われて、初めて眞人間にかえれたから、明星のためなら命をも捨てるが、字が讀めなくちや明星の小使として相濟まんから勉強する」と文字通り何十かの手習を始めたのである。そして、時に、「先生、アルゼンチンなんてどこにあるんですかね」などと、私は、新聞の字を聞かれる外に新聞に出る地理をも尋ねられることが屢々あつた。

學生諸君、ここだ。上田先生は「親しむべくして馴るべからざる人だ」。明星のヒューマニズムに、逸脱のない節度を欲しいとつく／＼思う。

話を戻して鐘のことに關聯させるが、昔、明星には、朝禮の鐘はあつても、時間の始りや終りを催促する鐘はなかつた。鐘のない學校は凡らく日本中に一つもあるまい。その鐘のない學校も、明治以來の自由競争教育に新たに再吟味を加えて、天下に眞の自由教育の警鐘を打ち鳴らしたのだから愉快じゃないか。當時は「何年生はじまり」と漢文の先生が教室の入口で怒鳴ると、角笛に應ずる小羊のように、學生たちがぞろ／＼集つて來るのであつた。鐘のない學校の眞の鐘は「人間は英・國・數の點數で割り切れるものではない。人間には必ず一つ優れた所がある。それに信賴し、それを延ばせばよい。それが教育だ」というのである。明星卒業生で、このプリンシプルによつて救われ、そして社會的に立派に活躍している人々が澤山ある。有りたいたいことと思う。

以上のようなことは、明星が私に直接に教えたものではないが、私が昭和七年の十二月一月から、明星で身にしてみ習つたところのものである。

そう／＼、も一つある。昔の明星では、喧嘩をして負けた子供は教員室に逃げ込んで、入口の戸をガランピシャンと締めて中から押えていた。「開けろ」という外からの聲に、「馬鹿奴郎、開けるかい」と頑張つて押えていたところ、聲の主は喧嘩相手であつても、入ろうとする主が先生で、ダーとなる悲喜劇も澤山あつたが、どうせ、教員室に逃げ込む方が弱虫なのだから、入口の戸は必ず強虫によつてこじあけられる。そして、強虫弱虫は、必ず、今もある圓卓子の周りを二三回ぐる／＼やる。追いつめられて、いよ／＼かなわなしいとなると、弱虫は上田先生の身邊にビタリと寄りそう。上田先生は、寄りそわれてよろめきながら、にこやかに煙草をポカリ／＼。それで喧嘩はゲームセット。

こういつたような雰圍氣は、今だに明星に残つてゐる。最も傳統に忠實な者が最も嚴しい改革者でありうる、最も保守的なものが最も進歩的でありうる、という言葉もある。明星の傳統や精神はどこ迄も生かし且つ新しい時代に相應わしく展ばしたいものである。

露 高一 猪狩 清子

見る間にくだけてしまつたふと思ひ出して美しかつたなあと、何かを暗示していつたように、小さな水たまりにとけこんでいつた。たつた一人になつてしまつた。

音 樂

また／＼くまに生れた音がゆる／＼とすべるように夏の空に吸ひ込まれていつた。

空

夏の空 荒つぽいみづみづしさがあの空の魅力だ。濃いブルーの繪具を

一面に太い筆でぬりたくつたような

大ざつばな感じの中にどこか微妙な莊嚴さがある荒つぽい新しさが空からあふれ出そうだ

さかだち

初五

すすき いすず

こんどこそと 思つて ならんだ

私が 一番前 「手を 大きく、ひらきなさい」

さとう先生の こえが した

私は 手が いたくなるほど ひろげ

ロクボクの 前に 立つた

「ようい」

先生が じゆんばんに 見にくる

手を ゆかについて、じつと前をみた

ふりむくと先生は もう、となりにきている

むねが どきどき なみをうつ

「はじめッ」

うんと 足をけりつけてたつた

どたん

すぐ おちる

ああ だめ まただめ まただめ

こんどこそ うーんと がんばつた

そのたびに 運動場の窓ガラスが

クルリ クルリと 大きくまわつた

前が かすんでくる。

「手を つつばつて」

と 先生が おつしやる

さいごだと思つて うんと はねた

ぐうつと からだがのびて

びたつと とまつた

さかさまになつた 運動場が

はつきりみえた

せいせいした

立ちあがると 顔がぼつと ぼてつてくる

これで 明星祭にできると思つた

## 作品と批評

アルバムに寄せて (修正版)

高二 藤井三千代

一九二九年に書かれた、小林多喜二の「不在地主」の或章に、こんな所がある。「不在地主の令嬢は、二三軒小屋を覗いてみた。眞黒な家の中からは、馬糞や糞の腐つた匂いがムツと来た。暗がりから、ワアーンと飛び上つた金蠅の群れが、いきなり令嬢の顔に、豆粒の様にぶつかつた。令嬢はワツと聲を立た。腹だけ大きく膨れて、眼のギョロツとした子供が爐の中の灰を手掴みにして、口へ持つて行つていた。云々……」

不在の大地主であり、大資本家でもあるダンナ方が、唯、土地を持つていると云う、それだけの理由で、彼等の小作人から、何のエンリョもなく、絞れるだけの利を絞り、まる／＼と肥えていつた。此のムジユンした社會の廣がり、多喜二は、不充分ながら、驚くべき精密さで、實によく、描き出してゐる。當時は、ものすごい不景氣と恐慌の嵐の最中で、次々と大會社がつぶれてゆき、農民達は必死にあがいてゐた。

私の父の務め先の日本交通公社は、こうしたひどい恐慌に直接見舞われる事がなく、平社員父と、文學少女だつた母とは、一九三〇年に結婚式を上げた。貫一とお宮の様に、熱海の海岸で、二人並んで、むつまじく寫した寫眞が、焼け残りのアルバムの第一頁を飾つてゐる。父は、とてつもない大きな慾も、理想も抱かない、極めて大人しい人間であつたから、非常に馬鹿正直に、そして、極めて、平凡な生活を営み、社會の波に、單調にゆられて来た。そして彼等は、彼等の背後に、どんなにみじめな社會があるかを、よく知つてゐた。しかし、彼等は、わざと目をかくして、けんとうしてみようとしなかつた。そうする事が、彼等を、非常な窮地に落し入れるからだ。兩親の生活が、愛情に満ちあふれてゐた事を、二人の數々のアルバムが、物語つて呉れてゐる。

「不在地主」と時を、同じくして「蟹工船」と云う作品が書かれた。この作品で、多喜二は、北洋漁場で働いてゐる労働者の生活を描いてゐる。彼は、資本家の手から逃がれるためには、唯一つ組織された階級闘争があるのみだ……と云つてゐる。プロレタリア文學の先驅としての彼の作品には、内部的な思想から来る、未熟さや作品の對象から来る、社會的な實在の反映の未成熟さなどに依る不充分さはあつても、テーマや觀點の社會性、彼の持つ高いヒューマニティーが、その不充分さを切り開いて、我々に深い感動を與えずには置かない。去年、多喜二の二十年祭が、共立講堂で催された時、彼の友人某が……多喜二の死の様子を、くわしく話して呉れた。にくむべき警察の暴行や、拷問は、プロレタリア作家として、非常に意義ある多喜二を殺し、又、彼の同志を、次々と倒した。多喜二が、全身、打ち傷で、紫にはれ上りどす黒い血のあとで、顔も何も、みるもむざんな死体と成つて歸つて来た時彼の母がどんなに心の中で號泣したか、圖り知る事も出来ない。私は、なんとも云えない非痛な氣持に満たされた。

父母の結婚生活三年にして、私が長女として生まれた。幼ない時の様々の寫眞の中で、生まれて直ぐに、母と三人でとつた寫眞が、私には、一番懐しく思われる。小さい時からギョロ眼だつた私は、目ばかり光つていて薄氣味悪いのさである。私が一才の時、まだ何も知らず何も理解出来ない頭の廻りには社會的に、とても不隱な空氣が立ち込め、軍部の力が除々に増していつた。

私の三才の時、二、二六事件が突如として起り、東京に住む人々の間に、非常に迫つた氣配が感ぜられ、日本は、中國へと進出してゐた。私が五ツの時、未えの弟が生まれ、兄弟は三人になつた。

滿洲事變の延長として、日華事變が開始された一九三七年頃、私の父は、ホソコンを経て世界一週の旅に出た。

「世の中がブツツウだから、早く日本へ引き上げて下さい……」母が父にくど／＼と云つてゐた言葉が、幼ない頭にこびりついて離れなかつた。暗い雲が、太陽をおく／＼かくし、第二次歐州大戰が、向うの方で始まつた。

私が學校に上る年に、父が歸つて来て、家の中は、急に活氣を呈し、澤山のお土産で、とても賑やかだつた。そして、何一つ不自由のない、豊かな生

活が續いた。戦争が始まつた頃迄が、我が家の全盛期で、父のサラリーは、必らず、子供等の讀書に大半費いやされた。三年の時、私にとつては一番の大病である肺門リンパセンをわずらつて、すつかり體をこわし、神戸の垂水へ移轉した。

垂水の家から海岸迄行くには、一百米程の道のりしかなく、夏の毎日を、水泳に費いやし、一年間ですつかり眞黒な子に一變してしまつた。弟と四人で、砂の上でスモウをとつてゐる寫眞をみて、吹き出さずにはいられない。あの頃の自分と、現在の自分とを、くらべてみると、あまりに大きく變つてしまつたので、どうしても同一人物だと思えない程だ。當時の縣立の學校なんて、實に好い加減なものだつた。子供達は誰しも、迷信的な神がかりな人間として、育て上げられ、正しい思考力、正しい判斷力は、日本を支配する人々にとつては目の上のこぶに過ぎなかつた。太平洋戦争が開始されたあの恐るべき日、一九四一年十二月八日……私達は神社の前で、必勝の祈りを捧げ、「必らず勝つのだ」と先生方に教え込まれて、陛下萬才を三唱した。

全國に萬才の聲がみなぎり、表面的には、非常に華やかなものとして、戦争の火ぶたが、切つて落された。そして、日本のファシズムの陰にかくれて行われた戦争の真相が何であるかを、大部分の國民は知らなかつた。知つていてもかくそつとした。「赤」と云うものが、非常に恐れられ、支配者の獨裁の下に、全國で、三千名程の進歩的分子がたいはされた。終戦後、聖戦と云う名の下に行われた、大東亞戦争の真相があばかれた時、人々はこんな事を云つた。「戦争には必らず負けると思つていましたよ。但し、國家が一旦戦争を始めたからには、反對するのは國賊だからね……。」もし、戦争と云うものが、どんなに、罪惡であるかを知つていたら、それがその人の、完全な知識として理解されていたら、當時の力對力の關係を知つていたとしても、戦争には必らず反對したのであろう。完全なインテリゲンチヤアは、その人の知識の信じてゐる正義のために、あく迄も戦つた筈だ。もし、そのインテリゲンチヤアに反した行動をとつたとしたら、その人は、インテリゲンチヤアの名に値しない人と成つたのである。後になつてから、ヒキョウな辯かひをする人を我々はケイベツすべきだ。

私が女學校一年の春、よんどころない事情の下に、私の一家は、父だけを東京に残して、岡山へ引越さねばならない時が來た。そこで私達は、「焼け出され」と云う思いがけない悲劇に見舞われて、祖母と家財全部を失つた。

目をつぶると、あの日の光景がまぎ／＼とよみ返る。逃げ場を失い、母とはぐれた私達兄弟三人が、死を覺悟して、シヨウイダンの落下する田圃の中に伏せをした時、幾人もの人が目の前で倒れ、焼け死に、ころげ廻つていた。幼い弟をしつかりとかばつて、田の中に、泥まみれになつて夜が明けた。あんなに苦勞をして、あんなに悲惨な目に逢つた我々に對して、焼け残つた人々の冷い態度は今思い出しても、實に口惜しい氣がする。

こうして日本人の間に、分裂が生じつゝあつた。澤山の悲劇のみを残してついに日本は無條件降服に追い込まれた。世界の民主主義と、ファシズムの戦いであつた大東亞戦争は、七月二十六日ポツダム宣言の受諾と共に一應幕が降りた。毎晩／＼暗い燈の下に、細々と息をして來た人々は、急にのび／＼と明るく手を伸ばしたが、何かしらより所のない、がらんだ氣分に支配されていた。戦争以來、目にもえない様々の苦勞をし續けた母は、一遍に年が寄つてしまつた。働いても働いても樂になれない毎日の生活なのに、父は吐血して去年倒れてしまつた。折角戦争が終つて、東京の我が家に、一家やつと、集まつて、一息ついたしゆん間に、又二度目の悲劇が訪れ父の顔には何回も死のヴェールががぶさろうとした。その度に、母の必死の努力がそのヴェールを拂いのけようとして續けられた。徹夜が續いた。そして暗い一ヶ年が過ぎた。病で、氣が失つていた父も、だん／＼快方に向うと共に落ち着いて來て、ふら／＼する足を始めて地に下したのは、今年の四月頃だつたと思う。

やせ細つた父と、目のふちに、くまが出来る程疲れ切つた母とが、共に食ぜんについた最初の日、私は知らず／＼、まぶたが熱く成つて困つてしまつた。そして、月日と共に、又明るさのよみ返つた家の中で、父も除々に健康をとり戻して來た。經濟的に、非常に困きゆうしている現在の生活なのに、私は服も靴も欲しい映画にもゆきたい……消しても／＼消し切れない氣持が

あとからく湧いて来る。

或朝、私が父のズボンにアイロンをかけている時、ネクタイを結びながら父が云つてた。「お父さんが出張して或宿屋へ着いた時、隣りの部屋に、音楽家が五、六人泊つて、盛んに氣焔を吐いていた。新進の藝術家達で、ビールを飲んでいたので、その内、各自が、自慢のどを聞かせる事に決議したんだよ。お父さんは眠れないので、とても迷惑に思つていたので、あにはからんや、一人がバイオリンを手にすると、何とも云えないすばらしいメロデーが流れ出した。好い氣持だつたね。そして一人が、ヴォルガの舟歌を歌つた。そうしている内に、又一人がこんな事を云い出したのだ。『日本人は歌を持つていない。生活の歌がないのだ。生活と結びついた藝術がない。情けないね。そして大衆は藝術を理解しない。だから、不健康な、娯樂映画やレヴューが、とても人氣があるのだ。新劇をみるのに、あの高い入場料ちやどうしようもないじやないか。そんな人間が、急に聲をふるわして、洋物の歌にとりつこうたつて、無理な話なんだよ、實際……。日本には日本人に似合つた、日本人の聲帯にびつたりとした、八木節なんかもあるじやないか先ずこれから普及しなくちやウソだね。』こう云つてその人は、八木節を歌つた。何とも云えなかつたね。お父さんはそして恥かしかつた。何故つて皆が歌を歌つていると、ウルサイツてどなる口なんだから。……私は、久し振りに父の言葉に感動した。大衆が理解し、愛し、そして、大衆を結びつけ、高める。こんな歌が日本に缺けている。……私はこんな事を思いながら、アルバムをくつてゆくと、メーデの時寫した寫眞が出て來た。メーデに參集した大衆が、コーラス隊の歌で一つに結ばれた時、私は、感激の涙にむせる思いがした。アルバムをくつてゆくと、私の過去の生活が、現在を通して未來へ發展しようとしている。もう高等學校卒業の時が近ずいている。無量の思いを込めた十八才の夏も過ぎてしまつた。將來に對する甘い夢やうぬぼれがだん／＼はがれていつて、現實の唯一人の人間としての生活が始まろうとしている。

限りない不安、限りない理想……。私を包むアルバムの足跡……。  
何もかも過去の事として遠ざかつていつてしまふ。

## 忘れられぬこと

高二 塚 田 充

去年の四月だつた。M劇團の宮村さんを中心にして「D會」の人達が演劇工作隊を作つていた。

〇をしているO高校の馬場宏が「來ないか。」と云つて來た。無味乾燥な、何となくじつとしていられない様な毎日を通しては私は、演劇工作隊というのに心を惹かれた。どんな事をしていのだらうと、とても知りたい氣持が起つた。同じ組のAもBも行くことになつた。宮村さんの家は、荻窪の少し引込んだ所にあつた。午後五時半に、私達は宮村さんの家へ行つた。赤茶けてしまつた手入れのない杉垣の家で、玄關のガラス格子戸の上に、宮村さんの名刺がはつてあつた。格子戸を開けると、すぐ向うの見える所で白い洗面器で手を洗つてゐる背の低い男の人がいた。その人が宮村さんだつた。丸い目を細くして笑つて私達に挨拶した。私はすぐ親しみを感じた。すぐ後から馬場宏と私の知らない白かばんを肩からかけた少し神經質な顔つきの學生が入つて來た。宮村さんの部屋は、飾物が一つもなかつた。壁に「雷雨」だの「破戒」の時の散しが鋏で配合よく止めてあつた。小さな勉強机の前に、詩を書いた紙や破戒笠松とかいたスケッチがはつてあつた。「あゝ、あの人がか。」私は、有樂座に觀にいつた「破戒」の若い教師が「部落の生れの人に相違ない。」と眞赤な顔をしてするそうな云い方をした笠松先生を思い出した。誰が書いたのか宮村さんによく似ている。

馬場宏が宮村さんに「この人達明星の演劇部の人達。」といつて私達の事を紹介した。馬場宏は私達と同じ新制高校一年で十六才だと云う事だつたが、顔中にきびで背は見上げる程高く混ざつた様なバスでしやべる様子はどうしても六十を越えて見えた。この工作隊が今やつてゐる「春を呼ぶ歌」という詩と合唱を組合せたシユプレヒコールというのも彼が作つたのだそうだ。さつきの白かばんの人が「明星つてどこ？」と聞いた。「明星知らないの？吉祥寺にあるの。りこちゃんが出た所よね。」と私が宮村さんに云うと「うん。明星つてすい分自由なんでしょ。もとは授業があるのに級長から

先生に映畫みにいかしてとたのむと先生がいゝつていうんだつてね。目を細めた笑ひ方で宮村さんが云つた。私達は初耳だつたので「へー」と云つた。「明星は劇が盛んなんでしよう。りこちゃんも云つてた。中學部と一緒だからいゝよ。どんなのした？」私達が片端からあげていつて、「チエホフの『結婚の申込』』という馬場宏が吹き出した。その時の様子がひどく子供つばいのでやつぱり十六才だと思つた。寺島アキ子の「モルモット」と云うと馬場宏がさも可笑しいという顔をした。宮村さんが「あれは、學生がずい分やつたらしいね。どう面白かつた？」と云つた。

私達は丁度一月前寺島アキ子さんを尋ねて葡萄座へ行つた。その時葡萄座の人達は「モルモット」の稽古をしていた。私達は同じ脚本でありながらこゝろも違ふのかと本當に驚いてしまつた。演出が全然違ふのだ。俳優達の血の滲み出る様な練習。私達には恐ろしいと思えなかつた。演出の西康一さんの云う通りにできないと、長いともエネルギーのいる台詞を五回もやり直しさせられるのだつた。西さんが、私達のことを「もう學校なんかとびだして葡萄座へ入るのかと思つた。」と云つたけれど私達はそれどころではなかつた。ひどく心を打たれながら頭が重くおさえつけられている様な氣持で私達は歸つて來たのだつた。その時の事を話すと宮村さんが、うん、うんとなづいて考え深そうな顔をした。

「宇野重吉の丑松好き？」と宮村さんが私達に云つた。「僕、きらいだなー。」と馬場宏がすぐ云つた。私は素朴でなかなかいゝと思つていたので「好き」と云おうと思つたけれど云わないでしまつた。

「山口、下手だねー、みんな昔の様にあなたは歌でも歌つて、いるのが一番いゝんだつていうと、怒つてねー。『私は勉強したいから何も云わないで私は勉強したいんだ。』つていう。」と宮村さんが云つた。私は變な氣がした下手だとも思わなかつたし、一人の人間が勉強したいつて本當に思つてゐるのに側の人々が歌でも歌つていれはいゝなんていうのはずい分だ。同じに演劇をやつて行こうという人達なら何故それを育てて行こうとしないのだから。人ごととは思えない憤りを私は感じた。

窓から隣の家の麥晶が見渡された。その緑が新鮮な、あつたかみをもつて

いた。四月だ。溫和な空がただよつてゐる。

鴨居の上に村山知義の「タルチフの時の教訓」というのが、墨で、丁寧に書いてはつてあつた。一、うぬべれぬこと。一、ねたまぬこと。等と一杯書いてあつた。私は意外に思つた。大人になつてもうぬべれてしまつたりねたんだりするのだろうか？ しかしすぐ葡萄座へ行つた時の記憶が私の胸に甦つて來た。それでもつて演劇という藝術を創造してゆく人達なのだから、私達の想像もつかない様に、みんな必死なのだ。私はじつとしてられない衝動にかられた。

馬場宏と白かばんの學生は中央合唱團の人達だつた。何かしきりに、メーデーの話をしていた。みんな白い上着に黒ズボンで女の人は頭に赤い頭布を被るのだそう。宮村さんが「君達、家では、こういう事どう思つてるの？」と云つた。AもBも口をとがらして口惜しそりに「大反對だ。」と云つた。

私が「お母さんは反對じゃないけれど、お父さんがね。」と云うと「お母さんが反對じゃないつていう事はそれだけお父さんより關心がそういうものに對してうすいつていう場合が多いんだらうな」と云つた。私達もそうだと思つた。

五時半からといつていたのになと思つて、この時始めて時間のこと氣になりだした。電氣がつけられた。私達は、「春を呼ぶ歌」の台本をみせてもらつた。三人で頭をくつつけて、そのワラ半紙のとじたのを見ると、一番最初に、「春はどこからくるの」と書いてあつた。それが幼稚に思えたので、三人は顔を見合せた。Aが小聲で「こういうの、やりたくないね。」と云つた。

宮村さんがAに「女の『A』になつてね。」と云つた。女子大の森清という人が今は出來ないので代りにBが女「C」になる事になつた。馬場宏が森清さんは下手だからそのまゝ女「C」になつてくれとBに云つた。こういう事のあまり好きでないBは、ちよつと不服そうな顔をした。私はあまつたので、合唱の方へまわつた。

そこへ、澤山、明るい顔をした人達が入つて來た。「晩くなりましたー。」と大きな聲でいつた。演出をする人は、佐瀬という人で、菅村さんといろく相談をした。

詩を讀む人達が部屋の中央に男と女と一列にならんで、その後合唱の人達がならんだ。合唱は、さつきの白かばんの學生と後から來た田村さんと呼ばれたはちぎれる様に太つたロシア的で回想的な顔の女のひと、後二人男のひとと私だつた。白かばんの人は、G高校の三年の瀬川という人で選ばれて合唱の指揮者になつた。快活な調子で必要なことだけしゃべつた。「まるくなるうよ。僕、テナー一人でいゝや。」と云つて歌の順番を書いた紙切れを胸のポケットから出した。私の知らない歌ばかりだつた。初めは「春が來た」の二部合唱だつた。みんなは、ちやんと技術を持つていて、きれいな合唱をした。田村さんが私に、「これからあなた、音楽専門にやつて下さらない？これからどんどん歌だつて、いつばい知らなくちやいけなないと思うのよ。」と云つた。私は、すつかり當惑した。今迄、歌など下手であまり歌つたこともないので此の人達の様に自信のある歌い方ができないのだ。困つていると「關鑑子さんの所へ來ない？ 私達習つてゐるんだけれど、とつてもいゝわよ。毎週木曜日、考えといてね。」と云つた。私は、ほつとした氣持になつて、笑つてうなずいた。

詩の方から「親子心中をした」という。「重々しい台詞が聞えて來た。するとこつちの合唱の人達が「どん底」を歌いだした。この人達は「春が來た」の時は、樂しそうに浮かれた様に歌つて「どん底」の時は、本當に暗い顔をして悲しそうに歌つた。「どん底」がすむと瀬川さんが「座ろう。座ろう。」と云つた。そして私に向つて「家で怒られない？ 晩くなつて。」と云つた。私が「怒られる。」という。「でしよう。いゝつ？」と聞いた。「十七。」という。「そうだらうな。僕十九でしよう。だけど僕だつて怒られるんだもの。」「何故だらう、つて考えたことある？ 何故僕達がこんなに一生懸命になつて、いゝ社會作らうと思つてゐるのに、何故お父さん達、反對なんだらうつて考えたことある？」と云つた。私は、そんな風な考え方を一つもしたことがなかつたので首を横にふつた。

「僕、考えてみたの。でね、一杯いゝんな本を讀んだの。そしてね。やつぱり僕のやつてゐることは間違いないつて確信ができたの。それだから、段々家の人達にわかつてもらおうと思つて、手傳いをしたり、本に書いてあ

つたことを話してあげたりして、やつと此頃、家へ歸るのが十一時頃になつても怒られなくなつたの。勉強しないとだめだよ。自分が正しいと思つていれば、どんな事だつてできるよ。」

私は瀬川さんの顔をみた。瀬川さんの目には、ゆるぎない確信をもつた人の喜びの色がたたえられていた。私は私の心が尊敬をもつて近よつて行くのを感じた。

次に歌うのは、「若者よ、体をきたえておけ。」というのだつた。田村さんが、「はじめは、本當に若者に呼びかける様に歌うのよ。」と云つた。宮村さんが聞いていて、これが一番上手だよと、云つた。瀬川さんが、「本中でもこれが一番合うんですよ。」と云つた。

Aが眞赤に火照つた顔で私をみてにつこり笑つた。みんなの目がきらきら輝いてみえた。一通り終つたのでこれで歸る事にした。時間は九時になつていた。

瀬川さんが「始めが大切なんだから君達、M劇團の證明書書いてもらえば？ ね、本當に。」と私達に云つた。私達は、そんなの書いてもらつてもこんなになつてしまつたので、怒られるのに變りないと思つたのでらわなかつた。

宮村さんが支關で全部が靴をはき終る迄、待つていてくれた。

荻窪の驛迄、みんなで歌をうたつて歸つた。馬場宏と瀬川さんは「お腹が空いた」と云いながら誰よりも大きな聲を出して歌つた。私達まで体がすつとななる様に氣持よかつた。

私は今迄知らなかつた喜びを感じた。兄妹の様ながつちりした結合だつた。驛で別れて暗い道を、家へと私は夢中で歩いた。鬱蒼とした森の所へ來ても全然恐くなかつた。私の胸は喜びで一杯だつたのだ。

次の火曜日が來た。待に待つた火曜日だつた。私は、今日宮村さんの家へ行くのだと思うとうれしい様な、少し恐ろしい様な氣持になつた。

學校へ行つてAさんとBさんに「今日、行こうね。」と云うと「いやだ。」と云つた。

あの日、あんなに晩くなつて家へ歸つたのが十時で十二時迄、お父さんと

お母さんに怒られたのだと云うのだ。もう絶対に持つてはいけなないと云われたのだそう。

五時半から七時半迄だと云う事だつたのに「D會」はうそつきで、役のきめ方もその人の事情も聞かないで勝手に決めてしまつて、フアッショと變りないじやないか、私達はただ、かりたてられただけで、馬鹿にしていると云うのだつた。

私も時間が正確でないのと、Bに對する役の決め方は、絶対に不賛成だつた。しかし、それだけの理由で、行かないといふ事は私にはどうしても出来なかつた。それは直せることだし、直さなくてはいけない事だ。反抗心がむら／＼と起つて來た。

AもBも、何時だつて「私達の手で。」とあんなに力をこめていつていたではないか。「私達の手で。」と云う事は、こんな時、活躍させなくてどんな時活躍させるといふのだから。それなら、今迄、彼女等の口をついて出て來た言葉は、何の役にもたない「空論」といわねばならない。

學生が多い様だからもつと早く始めて五時位にきつちり終る様にして、工作隊をもつと發展させていけば本當にいゝと思つたのだ。

私は、演劇が好きで／＼たまらない。御飯よりも好きだ。だから女學部へ入つた時、演劇部へすぐ入つた。入つた時は面白くて面白くて仕様がなかつたけど、どうも、こんな遊び事でいゝのだらうかとだん／＼考え出した。演劇部の人達も、みんな趣味でやつている。そして、それを一歩も進めようとは思つていないらしかつた。私には、こういう事が、どうも納得がいかなかつた。演劇が、何よりもいゝと思えば思う程、その氣持はつものつていつた。學校へ來たくても來られない、貧しい人達の事を、考えると直更だつた。趣味だけでやつている。私はそんなの嫌だ。目的がないなんて嫌だ。だから、宮村さんの家へ來た時、これだつ、と思つたのだ。本當にこれを發展させれば遊び場もない子供達の所へ行つて見せてあげたり、働き疲れた人々の「明日の力」になる事がきつとできるのではないかと思つたのだ。

それは、今迄、頭の中だけで一生懸命考へていた事だつた。それだから、私達が今やつている事がそのまゝ、そういう事に通ずる事だと思つて、

私は非常な喜びを感じたのだ。そしてそのために集つて來た人達と一緒に協力してゆくのは、本當に本當にうれしい事だ。私は一人でもいゝから行こうと思つた。

學校が終ると、すぐ私は茨窪の驛に行つた。丁度馬場宏がいたので一緒に行つた。

歩きながら私に「今、何讀んでるの？」と聞いた。「ツルゲーネフの處女地」といふと「彼の描寫は、細かくてきれいだね。でも男女のいきさつだけが中心なんだからな。」と云つた。私は、それなら何が中心ならいゝのだからと思つて黙つてしまつた。

後からG校の寺尾君が追いかけて來た。馬場宏は今度は、寺尾君に「東京ブギウギ」がどうか「流行歌」がどうかと云つて話し出した。

宮村さんの家のガラス戸を開けると宮村さんが出て來て、私達の顔をちよつ見ただけで黙つて、奥へ行つてしまつた。

部屋の中には田村さん達がもう來ていた。上原という男の人が「あとの明星の人どうしたの？」と聞いた。私が事情を話すすとみんなは困つた様な顔をした。宮村さんが、ノートや字引の重なつてゐる小さな机の前で彫刻刀をつかつて何か版画の様なものを作つていたが、それから目を離してこつちを見た。そして又黙つて仕事を續けた。此の前と全然違ふ態度だつた。みんなもそれを感じて黙つてしまつた。みんな手持無沙汰にしていた。そんなの我慢できないと云う様に馬場宏が「おれ、どん底やりてゐない。」と云つた。「それから罪と罰な。」と云つた。目をまん丸くして可笑しな顔をするのでみんなが笑つた。それから水泳がやりたいだの遠足へ行こうなどと勝手なことはかり云いだした。私は、こんな事に時間をつぶしに來たのじやないといらいらして來た。六時頃になつても、やつと七、八人しか來なかつた。宮村さんが黙つてゐるので、みんなは電氣もつけなくて暗いまゝでいた。

上原さんが、自分達でやろうと云い出して、私は田村さんから歌を教へてもらつた。「春が來た」の低音をやつと覺えた時、宮村さんがこつちを向いた。そして、おもむろな調子で「今日は、みんなに話したいことがある。」と云つた。「僕が黙つてみていると皆は、只こういう若い同じ年のもの達が集

つて、それが楽しくてここへ来る様だ。皆が僕の家へ入つて来る時の顔をみてもちよつともうれしそうじやないよ、みんな暗い顔をしてるよ。これからやろうつていう意気込みが感じられないんだよ。」

「だから事情も聞かないで役をつける。あれじや押しつけだよ。いくら同志だつて怒るよ、そりや君。そして指導的立場にいる人達が、みんなと一緒になつてふざけている。いけないよ、實際。」

皆、下を向いて考え込んでしまつた。おくれでさつき入つてきた瀬川さんは、かばんに万年筆で何か書き始めた。宮村さんが又、續けた。「皆、必死なんだよ。こんな甘つちよろいぬらぬらしたもんじやないんだ。君達の様な脛かじりと違ふんだから、俺達はいくら頑ばつても父さん(M劇團の高田隆という俳優の方。お父さんの様なのでそう呼ばれている。)にかなわぬ。どうしたつて父さんの方が上手いんだ。しかし俺には俺のいゝ所があるんだ。俺達は父さんなんか死んじやえー!と思うんだ。その位なんだよ。」宮村さんはじつとみんなをみまわした。私は深い溜息が出た。「死んじやえー!」だなんてと思つたのだ。

「俺達は、一日働かなきや一日食えないんだよ、こやつて君達のために時間をさく、これは死ぬ位辛いんだ。だけど、こういう事が、やがては、文化運動の推進力となると思うからこそ火曜日は會合へも出ないでやつてるんだ。癪に障るよ、しつかりしてくれよ。本當に。創造する歡びが感じられなきや何したつて駄目なんだ。今迄黙つていた。こゝで僕が怒ると皆が暗くなる。それじやいけないと思つて我慢していたんだ。」

沈黙が續いた。四邊が重苦しくなつて來た。私は考えた。半分は、同じ年頃の、愉快な、私などよりずつと進んでいるこの人達に惹かされて私はこゝへ來たのだ。しかし只それだけだらうかと思つた。もしそれだけとしたら私は一人でこゝへは來なかつたらうと思つた。只それだけではないと斷言できると思つた。

創造する歡びを私は感じなかつたらうか。それを感じ、それに共鳴したからこそ私はこゝに來たのだ。私を來させたものは、それ以外の何ものでもない。

上原さんが「今日、僕達皆の來るのを待つている間にだつて充分練習できたんだ。それを馬場なんかふざけて……。これから僕、ほんとに必死になつてやろう。」と言つた。馬場宏は頭を兩手で押さえて下を向いてしまつた。

宮村さんが、「今、上原がいつた様に、少しの時間でもやればいゝけど、この調子だつたら出來ないぜ。この前來た時の半分しかいないじやないか。」

それから宮村さんは少し笑いかけて「それにこの『春を呼ぶ歌』だつて實際、つまらない。本當は父さんに演劇工作隊を作るつて相談した時、絶對、人形劇から始めないといけないつて云われたんだけれど、シユプレヒコールにしたんだ。馬場どうする? 續けるかい?」みんなの視線が馬場さんに集つた。馬場さんは、可哀想な位、打しおれて黙つたまゝでした。

瀬川さんは、さつきから窓からみえる空をみていた。その目は、大きく見開かれていて睨んでいる様だつた。それからひどく云いにくそうな顔をして

「僕は、さつき宮村さんが云つた、創造する歡びを強く感じてゐるんです。僕は、合唱なんですけれど、していても、うれしくつて仕様がないうんです。僕はあの藏原さんの『藝術論』讀んだんですけれど何か、ピンと來ない。けれど宮村さんに、その場で何か云われるとすぐ、あゝ、そうだつて、わかるんです。さすがだなと思つてゐるんです。僕達、關鑑子さんの所へ行くと、とても勉強になるんです。だから宮村さんも、もつとやつていただきたいんです。それから云いたいのは、みんながとても愛情がないと思つてゐるんです。『D會』つていうのは絶對そういふ所じやないと思つてゐるんです。僕が中央コーラス隊へ入つた時、とても、冷たいな!と思つたんです。だからよくわかるんです。けれど、みんな新しく來た人のことを一つも考えてないんです。一つも愛情がないんです。なあんだつて氣でゐるんです。それじやいけないと思つてゐるんです。きつとこういうのが根本になつて工作隊もやつていけるんじやないかと思つてゐるんです。」と云つた。それは人々の心にどんどんくい込んでいつた。私は

そうだと思つた。瀬川さんは、自分達の仲間のする事を、こんなに精神を働かして一生懸命になつてゐるのだ。本當にえらい人なのだ。みんなも、ほつとした明るい顔になつた。宮村さんも一生懸命聞いていた。そして、「よくわかりました。そうなんだよ、ね、瀬川さんなんか初めつから來ているからわ

かると思うんだけど、みんなそうじゃなかつたんだよ、合唱だから俺一人ど  
うだつていゝやつて考えてる人や、べちやべちやしやべつてる人や、ね。わ  
かりました。」と云つて顔中で笑つた。

私は、やつぱり来てよかつた。もう私にとつて、こういう事は、切り離し  
ては考えられない事に思えた。

壁にぶつかつてもなおそれを打破つて行く力を私は、強く感じた。

## 二つの作品について

高三 藤沼 貴

「この評論は、藤井塚田兩君の修正以前の原文に對する批評である  
ことをお断りしておく。——編集者。」

### ○アルバムに寄せて

この作品が含む問題は數限りなく多い。無論、表現の方法や、文の上手、  
下手などではなく、實に問題が山積しているのだ。

誰でもこの作品を読んだ人は、これが二つの物から出来上つていて、然も  
それが化合してゐるのではなくて、混合してゐるのだということを直感的に  
知るに違ひない。そして、その二つの中で、どちらが主で、どちらが従か、  
又その二つがどのように結合されてゐるだろうか、という疑問と、興味に似  
た氣持が生じるに違ひない。

更に讀み進むにつれ、繰り返して讀むに従つて、いうまでもなく、この作  
品は、左翼的思想の主張が「しん」で、他の點は總て、それを言うための方  
便や、つけたりに過ぎない。アルバムに寄せまいと、井之頭でブランコに乗  
ろうと乗るまいと、そんなことはどつちでもよい。要するに左翼的思想の主  
張以外の諸點は、意味が薄いばかりでなく、實はなくてもよいのだと言う事  
が分るだろう。そこで、そのような不必要な物を取り去つて、作者の最も力  
を注いでゐる、思想の主張ということに眼を向けて見ると、それは、全く總  
てが、過去何回か、或る種類の新聞や、雑誌、本などに掲載し盡され、或る  
種類の人間が、必ず一度は口にし、誰でもが書いたような事柄に過ぎないの  
だ。それならば別に、とり立ててこの作者が書く必要はないではないか、こ

んな作品があつてもなくても、全然影響はないじやないか、丸で無價値で、  
他人のものの繰返しだから、わざ／＼「血の出るような尊いお金」と引かえ  
に、紙とペンとインクとを手に入れて書くだけの意味はないじやないか、と  
言われそうだ。然し、たとえ、出来上つたものが一字一句まで違わずに、他  
人のものと同じだつたにしろ、或いは總て、先輩の言い盡したものだつたに  
しろ、若しそれが、自分のもの、本當の意味で自分で得たものなら、恐れる  
ことはない、充分に書く價値はあるのだ。若しそうでないとしたら、我々の  
ように未熟な人間達は、金縛にあつても何も出来なくなつてしまふ。だから私  
は今この作品に書かれてある、歴史的事件の正誤や、思想的な是非を論ずる  
事をしようとは思わない。當然筆は、作品よりも作者の方へ進んで行くこと  
になる。

頭腦だけに頼り過ぎてはいけなない。知るとか、勉強するとか云う事は、單  
に大脳を刺戟し、或物を貫通させるだけではない。その或物を五臟六腑に泌  
みわたらせることだ。この作者は少しもそんなことをやつていない。この作  
者の内容物は、みんな附け焼又だ。その證據に、數年間この作者を山奥にで  
も幽閉してしまつたら、今持つてゐる内容物は大部分、なくなつてしまふに  
違ひない。それは、完全に身につけて、肉となつていないから。本當の内容  
物ならば、どんな状態にあつてさへも、それによつて充實することはあつて  
もなくなつてしまふような事はないのだ。

そういう本當の内容物から發出したものでない、單なる事件の羅列と、言  
葉の意味の把握、それは、思想的にも全然無意義だ。ただ、くだらない大人  
か、中學校一年生位の優等生のする仕事に過ぎない。そして私はこのような  
薄つぺらな、文や話を、「新聞紙の煮つめ」と呼んでゐる。

この意味では、この作者は、私の讀んだ「一葉」以來、無進歩だ。私は一  
葉を讀んだ時も同じことを感じていた。この作品が無力だという事の裏づけ  
は、實は、始めに取り去つてしまつた思想的主張以外の物なのだ。それは、  
こんな借り物の「歴史的考察」を述べるにも似合わぬ、人並なおセンチで  
少女時代が懐しくてたまらないと甘い回想に耽けり、女學生的考察で、自分  
の「泳ぎの練習」や「朝鮮人をかばつた」ことなどを思い出して、半ば自慢

しながら述べている。そしてこのような考えはあまりにも、左翼的思想の主張との間に大きなギャップがあり過ぎる。

では、何故こんな現象が生じ、どうして、「馬脚を現わした」という感じを我々に與えるのだろうか。それは勉強が片輪だからだ。勉強は、直線的、平面的な物ではなく、立体的な物だ。物理学の言葉を借りるならば、スカラIではなくてベクトルだ。くりかえしになるかも知れぬが、自己の立つ最も強固な地盤を智能よりもつと掘り下げた深い所に置かなくてはならぬ。思想を理解し、論理を知るのも間違ひなく必要だ。然し勉強は立体的だ。自己で真に感じ、「体得」していかない、頭だけで理解され、暗記された概念を武器とするのは危険極まりない。寧ろ或者は、抽象的なもの、概念的な物を先に掴んでそれから具体的、直接的な物へ押し進めて行くよりも、一足先に、自分に一番くつついている具体的な物を獲得する方が本當だ。ぼやく／＼してないでもう一度自己の中へ眼を向けるんだ。この作者が全く缺いている、個に返つて、具体的なものを見つめる眼を鋭くするのだ。

そして、眞の意味では、生活の外的な物だけを感じたり、或いは、第三者の生活を事細かに観察することよりも、自分一人の生活を厳密に経験すること、多くの人間のように單なる五十年の体験に終わらせない事の方が遙かに有益だ。若しそういう事を考えるならば、作者の父の生活に對する目も變つて來るかも知れぬ(然し數十年間を体験して來たに過ぎない醉生夢死の人間なら、しようがない)。そして又、この作者が無表情に投げ出している言葉の端に「焼け残つた人々のあまりに冷い態度」とか「心から笑える時は、來はしない」などの箇所、ただの形容的な意味以外に、直接的、具体的生活に關係する無限の課題のあるのを感じ、ただ人の耳元で大聲に喚き立てるような、薄弱な思想主張よりも、もつと強力で、眞に自己の身についた、思想の表われが、こんな簡單な言葉の中味に喰いついて行くことによつて生まれ、この作者自身が述べ、私も文句なしに賛成する「作品が……あく迄も、現實のものとして、我々に迫り、我々を感動させない限り、よい作品とは言えない。」という文章も、深く、鋭く作者の内側にえぐり込んで行くのだ。

### ○忘れられぬこと

この作品の終りに、恐らく後で書き足したのだろう、鉛筆で、焦點がはつきりしていない、と自分で書いている。確かにそうだ。ぼやけている、冗長だ。やろうと思えば、いくらでも切りつめられる。實際にあつた事でも、作品にとつて必要な物、却つてこの作品にとつては嘘になつてしまうような物を捨てれば、もつとはつきりした文になるだろう。

實に、退屈してしまふような事件の順序を、忠實に追つて書き續ける中にぼかつ、ぼかつと丸で思い出したように、作者の心の上を滑つた物が頭をもたげて來るが、一向に作者の心の中に深く喰い込んでいる物が姿を現わそうとしない。もう一つ讀む人にとつて甚だ快くない事は、作者の一人合點だ。即ちこの事件の間ずつと、この作者の氣持は絶えず流れ續けていたはずだ。そして、作者はその氣持、或いはその場その場の、雰圍氣のようなものを、會話や、あたりの描寫によつて表わし得たつもりでいる。だが本當は、作者はその場その場に居合せて、誰よりもよくそれらの事を知つているので、全く不十分な程度で満足してしまつていゝ。或いは、この作者が、まだ描寫に相當神經を使い、事實への馬鹿正直さから、肝心な、心棒の方がお留守になり、悪い意味ではなく、自己の文に酔い、自分自身にたぶらかされてしまつていゝのだとも云える。だから、讀者には不可解な點が多く、ただ、文の終りなどに、強調されている言葉の強さだけが、耳について、然もそれだけが文全体から浮いてしまつて、大げさでそぐわない物に感じられる。

この作者には、以上のような弊がある。然し、問題はそれよりも、もつと深い所にもひそんでいゝようだ。一体、この作者は、この作品を何故書いたのか、何故書きたくなつたのだろうか。それはきつと、作者のこのような体験の中に、今までは異つた、珍しい世界を發見し、自分よりも優れた人々に刺戟され、弱々しい子供らしい、環境と離れた大人びて何かしら、自分の頼みとなるような、力強い雰圍氣に接して、妙にうきうきし、じつとしていられなかつた、いても立つてもいられなかつた氣持を、何かのきつかけによつて最近再び思い浮べたからに違ひない。

作者のこの事件の間の心は、好奇心によつて始まり、最後には、或る對象

に向つて、若い人間としてありがちな、活動力のよりどころ、慾望のはけ口を求めることによつて終つてゐる。だが、事實としてこんな心理の経過はどんな意味を持つのだろうか。ちようど、『今日〇〇君がベイゴマをしようと言いました。僕は始めてベイゴマをするのが嬉しくて、〇〇君に教えて貰つてやりました。……とても面白かつたので、僕は今度から毎日、學校が済んだらベイゴマをやつて遊ぼうと思ひます。』という小學生の心理と同じではないか。一体どんな差があるのだろうか。だから、この作者が最後に述べているように、焦點がぼやけているというより、大切な物を掴み得ていないのだ。いやそういうより寧ろ、心の中にある物を文が掴み得ていないのではなく、正直のところ、内側に掴むものが存在してないのだ。どうして明星の生徒はみんなこの程度なのだろう。「明星」創刊號にしても、殆んど全部と言つてよい程、この程度の作品ばかりだつた。中學生的よりも小學生的と言つた方が正しい。皮肉ではない。五月の始め日本橋三越で、「愛の運動兒童作品展覽會」というのを催していた。それらの賞を得ている作品は、ひいき目なしに見て明星の多くの作品と同程度だ。勿論それには、我々よりもつと文の技巧に長じた先生達が手を加えてあるから、技巧の點から言つても大した差はない。それなら、どの點に於いて我々は小學生と異つてると言えるのだろうか。

問題は結局、勉強とか作者の態度とかに歸着する（勉強の意味については先に述べた）。勉強が足りないのだ。ただ覺えたりするだけでは駄目なのだ。作者が全体の根本なのだ。

本當にこんな「甘つちよろい、ぬらぬらした」物ではないけないのだ。一つ一つ總ての事件が、自己に向つて入り込み、瀬川という人を尊敬したならば逆に自分に歸つて自己の低さ、愚かさ加減を認め、他人の言う事を、單に言葉として耳に入れるばかりでなく、一番具体的な物を感じ、他人の言葉の中に、バリバリと自分の姿を掴み取るようにならなければ駄目なのだ。

深く經驗し（體驗とは丸で違ふ）もう一度よく考え、その上で猛然と作品を創造し始めることだ。無論始めからよく出来るはずはない。藤村が言うように、我々の年代で、豊富な經驗を積んだ巨匠の眞似をする必要はない。そ

れは、大抵の場合、辭のとりこになつてしまふ。又、多くの人がよくやりたがるように一本にまとまつた物、糸のように細くつながりのある物、あるいは論理的に秩序立つた心理の叙述等の概念に都合よくあてはまる形などに氣をくばる必要はない。もやもやとした複雑な物を、そんな形にまとめようとするのがどだい無理なのだ。まともに、躊躇せずにおつつかつて行けば、我々の力では寧ろ支離滅裂になる方が當然だ。そして、そんなことを恐れてエネルギーの温存を目論んではいけない。要所々に惜しみなくエネルギーを注ぐのだ、或いは最後にエネルギーを消耗し盡して、ガタガタになつてしまふかも知れない。だが、それでも全体は崩れないで、一應まとまつているが、至る所骨抜きで、全体がたるみ切つて、退屈で讀むのがいやになるような作品（例えばこの「忘れられぬこと」のような）より數等ましなのだ。

一應これで終つて、再び、最後のつけたりの箇所を考えることにする。こんなことを書きたがるのは、誰でも同じだがいけないことだ。一言にして言え、これは作者が、左手で或物に頼りながら、右手で筆をとつてゐるのだ。そんなことでは、頼る物以上に大きくはならない。若し讀み返して見て不満足たつならもう一度書き直せばよいのだ。問題は、勿論、書き終つた後の疲れがある。折角書いた物を反故にする惜しさがある。もう一度、深く苦しみを味わなければならぬ。だが、自分で不満足な物を發表する不快さや、罪の大きさは比較にはならない。自分の作品の弱さや、自信の無さを照れ隠しすることはもうやめにして、ギリギリ一杯の限界まで、力を出し盡さなければならぬ。そしてその後、批評により、讀者によつて、忽然として自分の不備を知り、作品についてのわだかまりを解明するのが、當然踏むべき道であり、然も文を書く者の着實な一段々の進歩に外ならない。そうならない前に、批評を予想し、自分の不備を他人に指摘されるのを腕を拱ねいて、期待してゐるのは大きな間違ひなのだ。

以上で、二つの作品について批評を終つた。ここでもう一言二人に共通して、つけ加えておきたい。

いくらか、そのような氣持があるにしても二人ともが、ただ文を巧くなるつもりで書いているのではないことには、大いに共鳴した。然し一時のいい加

## 明星萬歳

越田辰次郎

減な出来心や、熱病にうかされたような氣持で、本當に文を書くなどとするのは邪道だ。(これは決して、將來文學の道を進めという意味ではない)そのような氣持なら、即刻猿眞似を止めて、修辭學の勉強をした方がよい。これは逆説的に聞えるかも知れぬが本當の事だ。言葉の意味通り受け取つて貰いたい。

それから、一應この二人の程度なら「明星學園新制高等學校」の中ではひげをとらないだろう。だが、それは特殊な名詞の上に、固有名詞を冠した狭い世界の中の話だ。「文を書く人」という漠然とした世界では、はしくれとしてさえも、取り扱つて呉れないことを知るべきだ。だがそれだからといつて自信を失ふ必要はない。

目的を達する道は多岐だから、徒らに人の眞似をしてはいけない、どんな自分より上の人でも、その眞似をすることはない。學ぶべき點を掴むだけで充分だそれだから自分の道に或程度の自信を持つてよい。他人に拘束されたりするのは愚かだ。進むべき道、手段は千差萬別なのだから。

私は始め、一つの作品によつて作者を論ずるのは随分危険だ、と思つた。然し二つともこれらの作品が、新しい物で又、生眞面目に書かれた物である事を、知つて、批評する自信を持つた。だから、意地悪く、古傷に觸れたり非常な駄作を以つて作者のあげ足をとるようなことは、やつていないつもりだ。そして又何回も讀み、よく考へることによつて、作者と同じだけの努力はしたつもりだ。今はもうこれ以上の批評は書けないことを公言しておく。

書く前、私は恐らく、批評するにあつて個人的な感情、然も私は作者を二人ともよく知らないから、本當でない、人から聞かされた話や、自分の想像で組み立てられた氣持が、相當に邪魔になるだろうと思つた。然し事實はそんな甘い物でなく、書いている最中はただ、作者對自分があるだけで、それ以外の物は何もなかつた。そのような事は、決して二つの作品が程度以下でない事を證據立てる事であり、且つ私自身そのような境地に達することの出来たのは本望であり、晴々した氣持と、喜びとを心から感じてゐる。

雑誌を出すことになつたから何か書けと學生が來た。忙しくてと斷ると待つからは非と言ふ。それではと引受けて、さてと机に向つて見ると、はじめ何も書くことのないことに氣がついた。まして御注文のように、明星に求めることなど何一つ無い。それ程私は明星に感謝してゐるからである。

六年程前の、春もまだ浅い肌寒い日のことである。

「僕一度明星の中學というのを見て來たい」  
十四になつたばかりの少年は自轉車を操つてこれから入學しようという學校を見て來ようというのである。道が悪いから——上水に落つこちては大變だから——と心配する私の氣持など判らう筈もなく、いとも朗らかに出かけて行つた。そして間もなく歸つてくると、「どうだつた」と聞きもせぬうちに「見つかつたけど、ちつちやいなア」しかし少年は何んとなく希望に燃えてゐるようであつた。私はほつと胸を撫で安心した。

明星がどんな校風の學校かといふことはそれ以前から私は知つていた。上田先生と懇意な或る年長の友人から度々噂話などきいていたからである。自然、次男は是非御厄介になりたい、そう思つていた私だ。

古い言葉であるが、「光陰矢の如し」で、その時の少年がもうこの春から大學に通ふようになった。それがつい先日まで、否卒業してしまつた今日も尙まるで在學生か何かのように、ちよい／＼出かけてゆく勉である。

英語の英も、數學の數も、まるでわからぬ少年が、兎も角すく／＼と伸びるまでに成長したのである。學校に對し、先生に對し、私は心から感謝してゐる。どのような親であろうと、この氣持には變りないと思ふ。

「明星」はのんびり學校だと云われる。その通りだと思ふ。

「明星」の生徒は學生らしくない。とも言われる。私はそれもその通りだと思ふ。だがそれでよいではないか、私はそんな批難めいた言葉を聞く度に

そう思つていた。今もそう思つている。小ざかしい學生、先生を恐れる學生詰め込まれに慣れて、かんがえることを忘れてしまつた學生、そんなのこそはいくら學校の勉強が出来たとて何もならぬ。人間の本能は、自分で考え、自分で行い、そして自分自身によつて生きるべきもの、と私は普段から思つているからである。その意味で私には「明星萬歳」である。だが、その「明星」も決してよいところばかりだとは思わない。何が欠點か、と云はれてもすぐ指摘出来る程には私にも明確にはわかつていない。善いところ、悪いところ、この二つのものを探し出し認識し、そして自分から處するのは、學生諸君の自身の問題であり、又愛校心の問題でもある。一九四九、九

## 先生と學生とへの希望

舟木重信

戦争が終つてから民主主義ということが一般に廣く主張されるが、これは自由主義ということと同様に、規則や規律や制限や命令などを無視して勝手氣ままにふるまふことを奨励しているもののように解釋されている場合が非常に多いように思われる。學校の勉強のことについて言へば、學生の方では、勉強のことで先生が指圖したり、命令したりするのは許しがたいことと思ひ、勉強らしい勉強は何もしないで漫畫を見、三文小説を読むのがあつれば自由な生活であるなどと主張し、先生の方でも、學生に勉強をすすめたり命令したりするのは學生の自由を拘束して甚だ民主主義的でないと思つたりする傾向があるらしい。しかしそれは決して民主主義でも自由主義でもなくて、總ての惡の源である放任主義である。これは大變よくない。

大体幼少の頃から自發的に勉強する者は非常にすくなく、勉強しないで學校のこと（その他のことも）出来る人などは全くない。學生について言へばある時にはいやでも無理に勉強することが大切だし、先生について言へば、ある場合には學生に勉強を強制することが必要である。勉強をつづけなければ勉強というものが決して面倒でなくなり、面白くなる。

百里の道歩くにはまず十里の道を歩かなければならない。それよりも

す一里の道、いや、一步一步から始めなければならぬ。……誰でも知つているこの例をあげて、誰でも知つているこの平凡な希望を述べる。但しこの希望は學校の勉強さえしていればそれでよいという意味では決してない。

## 學園への信頼

與田準一

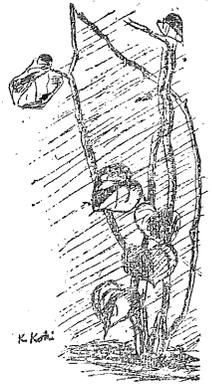
北原白秋先生と同郷で、先生に師事した、わたくしは、考えると、われながら、生活をめぐつて、いろいろ、先生の見よう見まねをしていることに氣づくようです。

その、見よう見まねのうち、長男と長女を、明星學園にあげている點は、よい方のまねではあるまいかと、自分で、思つています。

牟禮に住むようになったのは、偶然ですけれど、學園が近くにあり、子供を、通わせるのに都合がいい、そして、そういう、いわば、學園への魅力を感じたのは、學園へのわたくしの信頼であり、信頼は、白秋先生のところの隆太郎さんと箕子さんの出身校だということからでした。そして、そのことを通して、知り會つた（學園の）先生方も、おられ、學園内外の環境が、わたくしに、このもしかつたからです。

あらゆる意味を、ひつくるめて、幼少年期では、「環境から享けとるもの」を、わたくしは、だいに、考えています。だから、今のような世態のなかで、明星の傳統が、どうなのか、ということとは、わたくしの關心の中心であり、また、その中心をとりまく、「父兄としての環境」のわたくしということに、その關心が、はねかえつてきて、じつは、ときどき、頭をかく思ひでいます。

學友同志（そして、先生も、日々に學んでいかれるという意味からは、やつぱり、一種の學友同志）という、いわば、圓形環境（それは、父兄、家庭社會というふうに、周邊のないほど、すうつと、ひろがつた）が、わたくしの關心の構圖です。それは、自分の子供も、ふくめて、園児めいめいが、圓の中心という意味での環境で……すこし、りくつっぽくなりまししたね。



## 二十五年の回顧

上田八一郎

### (一) 舊中女創設

舊中學部女學部は昭和三年四月の創設であるが、創設までには可なり難いことを通つた。昭和二年五月頃には女學部だけの創設ということになつてゐたが、私は八月に退官して上京した。其後女學部だけの創設も困難ということになり終に翌三年元旦赤井園長から創設中止の聲明があつた。私は内心重荷が下りたような氣持もした。處が又一月十日頃から父兄の役員會が連日開かれて、萬難を排し何としても中女を創設するという空氣が濃厚になつて來た。勿論其後も難多難問題が引續いたが紆餘曲折を経てともかく形だけは創立ということになつた。其當時小學部の父兄であつた故茶郷氏故山之内氏及岡崎氏新氏など其他母姉の方々が園長を助けて異常な努力を拂われたことに對し衷心感謝の意を表して止まない。

これより先大正十三年の夏赤井園長は講演のため私の前任地朝鮮に來られた。其の時明星學園も三年後には中女を併設するから上京されたいとの話があつた。私の方から色々な希望を出してみた。一學級三十名生徒總數百五十名を超えざること、男女共學、無認可の學校、上級學校入試準備の要らぬ學校、武道と教練のない學校等。それらの事に對し園長はたゞ笑つて聽いてゐた。しかし「總數百五十名」も戰爭中には固持出來なくなり其他の事柄は最初から實現の出來ないものであつた。「氣に喰わぬ風もあるうに柳かな」で今日に至るまで柳のような生活に終始して來た私である。

考えて見ると、中女が創設された頃は所謂自由教育に對する非難が既にボツ／＼現われていた時であつた。神近市子氏が東京日日に載せた一文の如き

は其の代表的なものであつたらう。所謂自由教育の指導者達は最初は理想家であり、舊教育の組織の中から飛び出し、自己の理想を實現するために新しく自己の學校を營み、そこで自分の思うまゝの教育を施さなくてはならなかつた。かゝる事情は純情素朴な自由教育家達を一人の企業家乃至は職業人の地位に陥れてしまつた。そして最初の野性的な魅力が失せて教育が事業に吞まれる危機に立つたといふのである。かくの如く中女創立當初既に自由教育は漸次社會の要望を遠ざかり、一應の使命を果したものと斷ずる人々が可なり出て來ていたようである。然し願ひて明星教育の關する限り教育が事業に吞まれたといふ事は絶対になかつたと思ふ。それだけ貧乏暮しに終始して來た事は争うことの出來ない事實である。

### (二) 社會情勢

次に創立前後の社會はどんな様相を呈してゐたであらうか。昭和三年二月には第一回普選が行われて無産代議士八名が當選した。三月には全國的に共產黨の大檢舉が行われた。四月には當時の水野文相が學生思想問題に關する訓令を出した。六月には張作霖氏の爆死事件が起り色々な問題を世間に投げた。翌四年になつて四・一六事件があり續いて愛國主義の諸團體が出現したので、文部省は四年より五年にかけて思想問題に關し引續き大學、高專等の校長會を開催した。五年十一月には濱口首相が東京驛に於て愛國社員に狙撃された。六年に入つて官吏の減俸が行われ、同時に學園も一割の減俸を實施した。九月には滿洲事變が勃發し、相次いで起つた白色テロ、澎湃として起つて來たフアツシヨの波、翌七年三月には上海事件が起り、五月十五日には

犬養首相が暗殺（所謂五・一五事件と呼ばれるもの）され、八月には國民精神文化研究所が設立されるという極めて多事な時代が現出した。十二月には陸軍省が上智大學と曉星中學の教育方針に不満を持ち終に配屬將校を引き上げてしまった。昭和八年三月にはドイツ國會がヒットラー首相の全權委任法を可決してナチス獨裁が成り、次いで日本は國際聯盟を脱退するに至つた。

この年中女は第一回卒業生を送り出したのである。昭和九年血盟團事件の裁判の判決に對し暗殺是認の風潮が出て來た。しかも徳富蘇峰氏の如き同事件を目して「報國の丹誠」から出たものと公表した。かゝる風潮が益々日本をしてフアツシヨ化へ拍車をかけることになつた。十年相澤中佐事件十一年二・二六事件十二年日華事變、かくの如き大事件が續出するに至つた。國體明徴問題で美濃部達吉氏が貴族院と東大を追われ、「戦争は創造の母」と云う陸軍のパンフレットが出て日本は凡て軍部の天下となつてしまつた。それから後の事はもう書く必要もないであろう。たゞ其の間にも明星は依然として自由教育を堅持して來たと思ふ。明星學園の學園という文字が氣に喰われぬと配屬將校を通じて師團司令部の意向が傳えられた事もあつた。父兄の間にも將來軍人を志望する生徒は他に轉校させたがよいと云ひ出した人もあり、先生の中にもそれに賛成するが如き言辭を弄する人も出て來た。事實子供の意志に反して自分の子供を他校に移した父兄もあつた。父兄の中には子供達が自分の學校が好きになるというのを恐れる不思議な現象も生れた。學校が好きになるのは學校が生徒を甘やかすからで、學校に行くことを嫌う程に學校がピン／＼生徒に硬教育を施してほしいという要求も出て來た。何かすばらしい文句の額を校内至る所に掲げて欲しいと云う希望も出た。泰安庫の設置校旗に對する敬禮、色々な命令指示が引續いたが、どれも實現するに至らなかつた。ささやかな教員室の前で「○年○組何某○先生に用事あつて參りました」と大聲に怒鳴られた時にはよく驚かされた。普通の聲量で普通の事を云えばもつと大きな聲で云えと叱られたものだつた。質問に對する正しい答は問題でなく「忘れしました」「知りません」と特別に大きく發聲すると「よろしい」といつて賞められていた。随分恐ろしい教育が一時流行したものである。十九年一月太平洋戦争もだん／＼酣になつた頃第三學期始業式で

「本日より校内は勿論登校下校の際もゲートル着用のこと」と通達した時、當時の五年生Kが名狀すべからざる不快な顔をしたことを今も忘れぬ。

### (三) 上級學校入試

今を去る卅五年の昔私が教師としての第一歩を踏み出した頃であつたと思ふが、故三宅雪嶺氏が「教育上の疑問と假解答」と題し、氏獨特の嘲辯を以て「人には各々其特異性があるので數學や英語だけで其人の全体を量ることはどうかと思う」と直截簡明に吐き出された事を思い出す。又其當時舊師三澤糾氏が「學校教育」誌上中學校の教科課程から英、漢、數を放逐せよと極論されたこともあつた。實に上級學校入試という問題は昔からの難問題であり、どんなにか中等教育を冒瀆して來たか、今日に至つても尙依然として解決がついていない。明星に來て二十二年いつもこの憂鬱な現實に悩み續けて來たのである。私は明治卅五年度から今日に至るまでの英語入試問題集を所存して使つてゐるが時々變な氣持になることがある。

或る親達は子供が机に向つて何かしてさえいればそれで安心する。子供の不動の姿勢が何よりも好きである。しかも或る親達は子供を特攻隊員に仕立て、入試に薦進させる以外の何物も考へていない。或る親達の第一の質問は「御校では卒業生を何回御出しになりましたか」「但しこの質問は重要ではない。愈々第二質問「皆さんはこの學校に御入りになりましたか」「但しこれが切札である。官立と公立とに飽いて此處三鷹の森に逃げて來た吾輩ではないか。洵に云うべき言葉を知らない。明治以來小學校から中學校への第一予選、中學校から高校への第二予選、高校から大學への決勝戰、大多數の學生の目的はたゞ試験を首尾よくパスすることであつた。然らざれば特權的座席券を入手することが出来ないからである。人の言う如く、この解決策は現在の各大學を二部 三部制としてあらゆる學生に教育の機會均等を與え、入學資格の制限を撤廢して誰れでも簡易に大學教育を受けられる様にすることである。成程これならば極めてスッキリしたものが生れて來ることは必定である。

「カラダは丈夫ですが、成績が悪くて困ります」と聞く度に「成績は十分でないが、カラダは丈夫で結構です」カラダが丈夫ですからやがて成績もよくなるでしょう」と云つて貰いたい氣がする。「カラダは悪いが成績はよろしい」と云つてカラダの弱いのを名譽の様に考へるのは以ての外である。家庭に於ては極めて人情主義の教育をしている母親が學校に對しては鍛鍊主義の教育を要求する。それも入試突破のためであつて、春咲くべき花をも冬に咲かせようとあせるのである。そのためには温室で育てねばならぬ。よし咲いたにしても温室の花は誠にものろいものである。鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス、細工は流々仕上げを御覽じろである。福翁百話に曰く「教育の功能は唯天然に備わる能力の發生を助けてよき方向に導き其達すべき處にまで達せしむるに在るのみ、之を喩えば植木屋が庭の樹木に手入れして其枝振りを好くし其の花を美ならしむるに異ならず、如何に巧なる植木屋にても松を梅に變性せしむること能はず」と。又「學問のすゝめ」第一編の書き出しに曰く「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と。

生徒の人格を尊重しよう。彼等の個性を尊重しよう。彼等を英漢數で割り切つてはならぬ。親達は頭では理解出来ても腹ではおさまらぬらしい。他人の子供に對してはそう考へることが出来るが、自分の子供に對しては考を別にするのである。私にも其の氣持は判る。それは社會の罪でもあろうし、又制度が悪いためでもあろう。このまゝではいくら説いて見ても所詮親達を満足させることは困難である。私は再び偉い人々の言葉を藉りてこの章を終ることにする。内村鑑三氏はダイヤモンドの様な珍らしい人物が偉大なのではなくて空氣の様な水の様な、どこにも又何時でもなくてはならぬ人物が偉大であると云つた。又リンカンは、神は平民を多く作り給う。それは平民が最も必要だからと云つた。

#### (四) 思い出す人々

故内野先生の逝去は洵に惜しかつた。同先生の舊中學部に残した足跡は特筆大書してよろしいと思う。五十號まで續いた「星雲時代」と文集「北斗抄」それから「明星詩集」六冊、それらの編集は自主、協同、友愛の三つをモツ

トとして先生の指導のもとに行われた。寺地、平林、谷井の諸氏など先生の影響を最も多く受けたものである。先生が不治の病を淋しく養わねばならなくなつた際、それらの諸氏が親身も及ばぬ世話をしてくれた事は今思い出しても感謝の外はない。これより先き末綱氏が他界した頃であつたと思ふが、私が病床の内野先生を見舞つた時、先生が「ドンチヤン(末綱君の愛稱)は何か遺書を残してましたか」と訊かれたので、何も遺していませんと答えた處「ドンチヤンは何か宗教を信じてましたか」と顔をあげて洵に痛切なまなざしで私をヂツと見詰めた時の先生の顔を今も忘れることは出来ない。末綱氏が死ぬ一兩日前、慶應病院で手術を受けることになり私にそれに立會つてくれとのことで病室から手術室への途中、運搬車に附添つてエレベーターに入つた瞬間パツと眼をあげホンの一瞬微笑をたゞえて私を見上げた時の氏の顔も決して私には忘れられないそれは誠に複雑な笑顔であつた。宇美研一が一、二年頃書いた末綱先生哀悼の歌がある。

末綱先生は

今どこに居らつしやるだらうか  
先生は今極樂にゐらつしやるに

違ひない

そして

皆んなに歌を

教へてゐらつしやるだらう

南方で悲壯な戦死を遂げた森川武夫は不安極まる護送船の中で階段に腰を掛け薄暗い電燈の下で微分積分の練習をやつていたというたのもしい男であつた。

明星劇壇の明星清水育夫、恩地昌郎の二人が戦死した事も惜まれる。ペルナールの「懷を傷めず」では二人共主役をつとめた。森本薫作「みごとな女」では清水が舞台装置、恩地は「收」の役、恩地はチエーホフの「街道」にも出て通行の百姓になつたこともあつたと思ふ。

菅原基と増田隆雄の戦病死は殊の外感が深い。前者は鐵嶺で後者はハルピンで、二人共元々兵隊になんかなれるカラダではなかつたのである。君幹一

郎は終戦後病み廿一年暮に中野療養所に入院、現在に至つてゐる。  
最近の句に曰く

病む膳に老ゆ母よりの露の臺  
臥して見る吾れに落花の夕かな  
薄氷の湯呑にありし寒を生く

西久保道治(舊姓渡邊)が「星雲時代」に探偵小説「姿なき怪盗」を連載  
文倉片豊が「呪の花」という映画脚本を書いて其の主題歌まで添えたが、洵  
に愉快なものであつた。

石山尊雄と今西一雄がラジオに關し痛烈な論争をやつたことがあるが、前  
者は天國に在り、後者は今、地上にあれど中々姿を見せない。

今でも生徒の中には一日を通じて教室にいる時間よりも教員室にいる時間  
の方が長いのがいる。Sなど其の優秀な者である。昔にもあつた。記録保持  
者は恐らく平林偕行であらう。

林春二が會長となつて「明星の科學」というものが發行されたことがある。  
藤原、川上、佐藤進(第一世)大木などが参加したと思うが、創刊號に執筆  
を要求されて私が「原子の破壊」と題して寄稿したのを最近さがし出した。  
それはサイエンス誌上米國マ州の工業大學に建設されたサイクロトロンの記  
事の冒頭だけを譯したものであるが、今から考えると確かに心臓物である。  
終戦後には「極光」というのが科學部で發行され、それにも何か書かされ  
て科學の低能者たる私は二度目の恥をかいた。

去る八月末霜田光一が朝日科學奨励金受領者となり、新聞にはわが物理學  
界のホープだと出ていた。彼が一年か二年の頃に「櫻」と題し次のような作  
文を書いている。

四月の六日に行つた時は井之頭の櫻はまだ少し開いているだけだつた。  
それが、十日の入學式の日には六分位咲いていた。その時つぼみのかた  
いのは一つもなく皆ふくらんでいた。もうじき満開になるだらう。……  
此處まで書いて來たら與えられた十五枚がもう四、五行を残すだけになつ  
た。筆をやめて始めから読み返して見たら、こんな話を思い出した。昔楚の  
國の男が江を渡ろうとして劍を河の中に落してしまつた。その男が舟べりに  
刻して曰く。「これわが劍を落せし所」と、舟去つて劍従わず。呵々

## 本誌編集委員

中 學 校		高 等 學 校															
二年生	三年生	一年生	二年生														
田永	高佐	古若	市迫	木渡	五水	小田	田稻	金猪	佐藤	平古	塚井	針西	中澤	渡邊	古川	中	
中島	見藤	木山	田水	村邊	谷十	林稚	中村	田狩	藤清	岡一	木田	出谷	村緋	澤昭	屋智	川日	
敏純	隆	遙瑞	和恭	祥妙	邊	嶺	實	肇	枝	子	也	枝	子	子	子	子	子
子代	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

## 編集を終つて

われらの明星學園は創立二十五周年の日を迎えた。自由な明星を愛するすべての人々に、この書をおくる。

私たち文藝部が記念誌の計画をはじめたのは、夏休み前の六月だつたから、本書が出来上るまでに正確に五カ月の月日がたつた。その間、照井、上田兩先生をはじめ編集印刷の方面を指導された橋、押川兩先生、そのほかの諸先生から有形無形のあたたかい激励と支持とをあたえられた。この記念誌「明星」の一貫したねがいは、初等部、中等部、高等學校の所謂學園三部生徒の友愛と協同とを、ほんとうに現實にかちえようとしたものであつたから、生徒作品の選定などの煩雜な仕事の多くを、各部の先生におねがいしなければならなかつた。さらに、お忙しい中を、私たちの無鐵砲な希望をこころよくお聞きになつて、職員舊職員父兄卒業生の方々が立派な文章をお寄せくださった。印刷所の池谷正緒氏も親切に私たちをたすけられた。私たちは、こうした先輩の御厚意に對して、こゝに心からお禮を申し上げたいと思う。

また、はじめ本書は、卒業生の職場を訪ねて、明星の現在型をいつばいに生き生きと示そうという計画を抱いていたのに、經濟上の事情や私たちの力が及ばず、實現出来なかつた。私たちの訪問をよるこんで迎えてくださった卒業生の方に、深くお詫びを申し上げる。

私たちは、この「明星」の計画、編集、印刷、宣傳の事を通じて、いろいろのを知ることが出来た。全体を一つの形として作り上げるためにはいかに多くの、地味な、こまかい、苦しい道ゆがづくことであらう。得意になつて書いた作文が、同じ自分たち編集者の指先で一字一點ずつ數えられ、植字され、校正されるのだ。一篇の文章のために、炎天を何日も歩かなければならないのだ。出来上ればたつた一冊のこれだけの本なのに、この全体の形が作られるまでに、どんなに複雑な手續きと失敗の繰りかえしが、時間の中に流れて行つたことであらう。

この記念誌が、いたずらな追憶のために計画されたものでないのと同じに、私たちも編集の思い出に耽けらうとは思わない。ただ、私たちは知つた。考られた全体の予想を、生きた形にまで作り上げるには、こまかい部分に對する日常の着實な實行がほんとうに大事なのだということを、

全体と部分の關係——それは、未來に對する現實の大切さと云いかえることが出来よう。百頁にみたくない「明星」の編集が教えてくれたことを、私たちは學友諸君に告げる。

より大きい全体、さらに遙かな未來に向つて、いま明星は出發しようとしている。學園に祝福あれ。私たちは、明星のあらたな未來に向つて、本書をささげる。  
(編集委員一同)

創立二十五周年記念『明星』

【非賣品】

昭和二十四年十一月十五日印刷發行

編集發行者代表 中川 日出男

東京部 中野區東郷町二番地

印刷者 池谷 正緒

東京部 中野區東郷町二番地

印刷所 梨光堂印刷所

東京部 北多摩郡三鷹町車禮五六番地

發行所 明星學園文藝部

明星學園畧年表〔註(就)(退)は職員の就任退任を示す。(配)は配屬將校〕

文藝部製作

年度	小 學 校	女 學 校	中 學 校	社 會 狀 勢
大正13年 (1924)	二月二十七日 學園創立の議成る 同人、赤井米吉 照井猪一郎 山本德行 照井げんの四氏 開校式、入學式舉行 (二十一名) (就) 松岡 正雄 小松崎三枝			一月 東宮(現天皇)御結婚 治安維持法制定、普選法成立
14年 (1925)	四月一日 (就) 霜田 利平 大高 義一 小松崎三枝 逝去			三月 「孫文、北京に客死す」 治安維持法制定、普選法成立
15年 昭和元年 (1926)	一月八日 (就) 菱田 秀 校舎三十八坪増築 (就) 須田 寧			一月 「京大學生事件起る」 「イギリスにゼネスト起る」 「蔣介石北伐開始」 大正天皇崩御
昭和2年 (1927)	四月一日 (就) 松枝 良作 音樂・美術室五十坪建築成 四月四日 後援會成る (就) 垂水 繁光			三月 金融恐慌の發端、銀行多數休業 田中内閣成立 「英ソ國交斷絶」 「張作霖、奉天驛附近で爆死す。北伐完了」
3年 (1928)	三月二十二日 第一回卒業式舉行 (二十七名) 四月一日 (就) 霜島 昇平	四月五日 校舎一二四坪建築成る 四月九日 第一回入學式舉行(四名) (就) 赤井 米吉 寺田サトむ 多湖 實輝 吉原 規 山下 重輔 井草 完二 (校醫)	四月十日 校舎本館一〇一坪建築成る 第一回入學式舉行(一六名) (就) 赤井 米吉 上田八一郎 岡 邦雄 多湖 實輝 吉原 規 山下 重輔 井草 完二 (校醫) 井上万二郎 (常直員)	二月 御大禮 最初の普選法に基づく選挙行われ、無産派八名當選
4年 (1929)	三月二十二日 第二回卒業式舉行(二十七名) (退) 山本 德行 講堂建 六月十日 講堂建築落成	三月二十二日 (退) 垂水 繁光 四月一日 (就) 前島 治吉 佐々木アヤ	四月二十日 中學校設立認可	七月 「ソ、中國、國交斷絶」 張作霖事件に關連して田中内閣辭職 濱口内閣成立

11年 (1936)	10年 (1935)	9年 (1934)	8年 (1933)	7年 (1932)	6年 (1931)	5年 (1930)	4年 (1929)
三月二十一日 四月一日 (就) 明田川孝	三月二十一日 三月三十一日 (退) 五十嵐重虎 四月一日 (就) 伏見 頼二	三月二十一日 四月一日 (就) 原田満壽郎 五月十五日 創立十周年記念	三月二十一日 三月三十一日 (退) 松枝 良作 四月一日 (就) 牧 均	三月二十一日 三月三十一日 (退) 須田 寧 四月一日 (就) 中村 勇	三月二十一日 三月三十一日 (退) 安藤 正義 四月一日 (就) 宮内ノブ子 十二月八日 (就) 石井 小浪 (舞踊科教師)	三月二十一日 四月一日 (就) 五十嵐重虎	六月十日 講堂建
三月五日 (退) 加月 秋芳 八月三十日 (就) 佐藤 徳雄	三月五日 (退) 前島 治吉 三月三十一日 (就) 加月 秋芳 四月一日 (就) 加月 秋芳	一月二十日 (就) 澁谷 直 二月二十八日 (退) 片山信四郎 三月四日 第二回卒業式舉行(一二名) 四月一日 (就) 中島 勇 五月十五日 創立十周年記念 十二月三十日 女學部一教室(二二坪)増築落成	三月三日 (退) 望月 操 三月三十一日 (退) 藤森 崩夫 四月一日 (就) 松岡 正雄 四月一日 (就) 青木ふみ子 十二月三十一日 (退) 金子金治郎 宮内ノブ子	一月十日 (退) 木川 靖 二月一日 (就) 關口宇之祐 十二月三十日 (退) 丹山信四郎 十二月十日 (就) 尾形 鶴吉 杉山 清	一月三十一日 (退) 菱田 秀 二月一日 (就) 望月 操 三月三十一日 (退) 丹羽よし子 四月一日 (退) 吉村 節子 四月一日 (就) 柏井すゝむ 宮内ノブ子 吉田 賢次 越知 忠良 岩澤富士雄	三月三十日 (退) 山下 重輔 四月一日 (就) 尾形 鶴吉 七月三十一日 (退) 藤森 崩夫 吉原 規 木川 靖	六月十日 講堂建築落成 九月二十四日 (就) 宇野 節子
三月五日 (就) 小野塚吉平 (配) 八月三十日 (退) 加月 秋芳 九月十一日 (就) 佐藤 徳雄	三月五日 (退) 前島 治吉 三月三十一日 (退) 加月 秋芳 四月一日 (就) 加月 秋芳 五月十五日 屋内体操場建築落成 八月十一日 (就) 足立 幾喜 (配)	三月四日 第二回卒業式舉行(一八名) 四月一日 (就) 中島 勇 五月十五日 創立十周年記念 五月十八日 (就) 森口 一江 五月十八日 (退) 前田 重作	一月八日 校舎四五坪増築す 三月三日 第一回卒業式舉行(一八名) 三月三十一日 (退) 伊藤 至郎 四月一日 (就) 松岡 正雄 四月一日 (就) 前田 重作 十二月二十日 (就) 芳賀 榮政 (配)	一月十日 (退) 木川 靖 二月一日 (就) 關口宇之祐 十二月三十日 (退) 尾形 鶴吉 十二月十日 (就) 杉山 清	三月三十一日 (退) 岡 邦雄 四月一日 (就) 越知 忠良 五月十二日 (就) 富山國之助 岩瀬富士雄 瀨川孫兵衛 (配)	三月三十一日 (退) 山下 重輔 四月一日 (就) 尾形 鶴吉 七月三十一日 (退) 伊藤 至郎 吉原 規 木川 靖	四月一日 (就) 前島 治吉 六月十日 中學部校舎九〇坪(教室四)増築落成
二月 七日 「二・二六」事件起る 「スペインにフランコの反亂起る」 日獨防共協定	二月 三月 「ドイツ再軍備宣告」 六月 「帝人事件」公判始まる 八月 相澤事件起る	六月 飯米キキンの叫び農村に起る 未曾有の凶作 九月 小農「キガ」に瀕す (賞收五二〇〇万石) 十二月 室戸颱風關西へ、大災害 ワシントン條約	二月 三月 「ヒットラー權力をにぎる」 四月 國際連盟を脱退す 四月 瀧川事件おこる 十二月 皇太子誕生 未曾有の大專作 (賞收七〇〇〇万石)	一月 櫻田門不祥事件 二月 井上藏相暗殺 三月 滿洲建國宣言 五月 「五・一五」事件、大養首相暗殺さる 十一月 「ルーズベルト、大統領當選」	九月 滿洲專權始まる 十二月 「イギリス金本位制停止」 金輸出再禁止	十一月 金輸出解禁 四月 「インドに排英運動」 「ロンドン海軍縮條約成る」 東京市電セネスト 濱口首相狙撃され重傷を負う	閣議職 濱口内閣成立

11年 (1936)	12年 (1937)	13年 (1938)	14年 (1939)	15年 (1940)	16年 (1941)
<p>四月一日 (就) 明田川 孝</p> <p>三月二十一日 (退) 安藤 正義</p>	<p>三月二十一日 (退) 安藤 正義</p> <p>四月八日 (就) 安部 綱義</p> <p>五月一日 (就) 金田 吉尾</p> <p>八月十六日 (退) 越智 忠良</p> <p>九月一日 (就) 龍崎 恭子</p>	<p>三月二十一日 (退) 中村 勇</p> <p>三月三十一日 (退) 佐々木金之助</p> <p>四月一日 (就) 佐藤加壽輔</p> <p>橋 正薫</p>	<p>三月二十一日 (退) 明田川 孝</p> <p>三月三十一日 (退) 堀井ミヨ子</p> <p>四月一日 (就) 高橋律之助</p> <p>吉田小次郎</p> <p>東久保照子</p>	<p>三月二十一日 (退) 高橋律之助</p> <p>四月三十日 (就) 鎌田貞之助</p>	<p>三月二十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>三月三十一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>
<p>八月三十一日 (退) 加月 秋芳</p> <p>九月十一日 (就) 佐藤 徳雄</p>	<p>三月五日 (退) 第五回卒業式舉行(一九名)</p> <p>四月八日 (就) 安部 綱義</p> <p>五月一日 (就) 金田 吉尾</p> <p>八月十六日 (退) 越智 忠良</p> <p>九月一日 (就) 龍崎 恭子</p>	<p>三月五日 (就) 第六回卒業式舉行(一三名)</p> <p>四月一日 (就) 森 恒三郎</p> <p>五月十五日 (退) 荒井 つる</p> <p>十二月三十一日 (退) 荒井 つる</p>	<p>二月一日 (就) 第七回卒業式舉行(二四名)</p> <p>三月五日 (退) 横山 光子</p> <p>三月三十一日 (退) 金子金次郎</p>	<p>三月五日 (退) 第九回卒業式舉行(三一名)</p> <p>三月三十一日 (退) 龍崎 恭子</p> <p>四月一日 (就) 森 キヨ子</p> <p>八月三十一日 (退) 森 恒三郎</p>	<p>三月五日 (退) 第十四回卒業式舉行(三六名)</p> <p>三月三十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>四月一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>
<p>八月一日 (就) 小野塚吉平 (配)</p> <p>八月三十日 (退) 加月 秋芳</p> <p>九月十一日 (就) 佐藤 徳雄</p> <p>十二月一日 (就) 長野 榮二 (配)</p>	<p>三月五日 (退) 第五回卒業式舉行(二一名)</p> <p>四月八日 (就) 安部 綱義</p> <p>八月十六日 (退) 越智 忠良</p> <p>九月一日 (就) 青木 茂則</p>	<p>二月十一日 (退) 關口 典之</p> <p>三月四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (就) 第七回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月五日 (退) 片桐 克 (配)</p> <p>四月十一日 (就) 船山 博彦</p> <p>四月十八日 (退) 佐藤 徳雄</p> <p>五月二十三日 (就) 鐵守 尊邦</p> <p>六月三日 (就) 佐伯 昌延</p> <p>七月一日 (退) 森口 一江</p> <p>中島 勇</p>	<p>三月五日 (退) 第八回卒業式舉行(二七名)</p> <p>八月二十日 (就) 鈴木 光治 (配)</p> <p>十一月九日 (就) 永嶋 行雄 (配)</p>	<p>三月五日 (退) 第十四回卒業式舉行(三六名)</p> <p>三月三十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>四月一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>
<p>七月 (スベインにフランコの反亂起る)</p> <p>日獨防共協定</p> <p>蔣介石、張學良に逮捕さる</p>	<p>六月 近衛内閣成立</p> <p>七月 日支事變起る</p> <p>九月 (ルーツベヘルト、ニューディールの遂行宣言)</p> <p>十一月 日・獨・伊防共協定、大本營設置</p> <p>十二月 南京陥落</p>	<p>一月 [アメリカの失業者一〇〇〇万]</p> <p>三月 國家總動員法成立</p> <p>八月 [張鼓峰事件起る]</p> <p>九月 [ミネンヘン會議成立]</p> <p>十月 [武漢三鎮を占領]</p>	<p>一月 平沼内閣成立</p> <p>三月 [ドイツ、チエコを併合]</p> <p>三月 [スペインの内亂、フランコの勝利となる]</p> <p>六月 ノモンハン事件重大</p> <p>七月 國民徵用令公布</p> <p>八月 [獨ソ不可侵條約成立]</p> <p>九月 [第二次世界大戰の開始]</p> <p>十一月 上海にて抗日テロ續發</p>	<p>三月 東京市の飯米に外来混入さる</p> <p>五月 [オランダ、ベルギー、ドイツに降伏]</p> <p>六月 砂糖、マツチ、切符制、ビール配給制となる</p> <p>六月 アメリカ對日工作機械輸出禁止</p>	<p>一月 新聞紙等掲載制限令公布</p> <p>二月 國防保安令成立</p> <p>四月 日ソ中立條約成立</p> <p>四月 [エーゴ、ギリシャ降伏]</p> <p>五月 六大都市米の通販制實施</p> <p>五月 改正治安維持法成立</p> <p>六月 [ドイツ、ソに宣戰布告]</p> <p>六月 [伊、ソに宣戰布告]</p> <p>八月 佛印に進駐す</p> <p>十月 東條内閣成立</p> <p>十二月 日本英米に宣戰布告</p> <p>[獨、米に宣戰布告]</p>
<p>一月 八日 (就) 恩地 邦郎</p> <p>三月 五日 (退) 非草 完二 (校醫)</p>	<p>三月 五日 (退) 第五回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月 四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月 五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (退) 關口 典之</p> <p>三月四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (就) 第七回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月五日 (退) 片桐 克 (配)</p> <p>四月十一日 (就) 船山 博彦</p> <p>四月十八日 (退) 佐藤 徳雄</p> <p>五月二十三日 (就) 鐵守 尊邦</p> <p>六月三日 (就) 佐伯 昌延</p> <p>七月一日 (退) 森口 一江</p> <p>中島 勇</p>	<p>三月五日 (退) 第八回卒業式舉行(二七名)</p> <p>八月二十日 (就) 鈴木 光治 (配)</p> <p>十一月九日 (就) 永嶋 行雄 (配)</p>	<p>三月五日 (退) 第十四回卒業式舉行(三六名)</p> <p>三月三十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>四月一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>
<p>一月 八日 (就) 恩地 邦郎</p> <p>三月 五日 (退) 第十回卒業式舉行(三十名)</p>	<p>三月 五日 (退) 第五回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月 四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月 五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (退) 關口 典之</p> <p>三月四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (就) 第七回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月五日 (退) 片桐 克 (配)</p> <p>四月十一日 (就) 船山 博彦</p> <p>四月十八日 (退) 佐藤 徳雄</p> <p>五月二十三日 (就) 鐵守 尊邦</p> <p>六月三日 (就) 佐伯 昌延</p> <p>七月一日 (退) 森口 一江</p> <p>中島 勇</p>	<p>三月五日 (退) 第八回卒業式舉行(二七名)</p> <p>八月二十日 (就) 鈴木 光治 (配)</p> <p>十一月九日 (就) 永嶋 行雄 (配)</p>	<p>三月五日 (退) 第十四回卒業式舉行(三六名)</p> <p>三月三十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>四月一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>
<p>一月 八日 (就) 恩地 邦郎</p> <p>三月 五日 (退) 第十回卒業式舉行(三十名)</p>	<p>三月 五日 (退) 第五回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月 四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月 五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (退) 關口 典之</p> <p>三月四日 (就) 瓦田 隆根 (配)</p> <p>三月五日 (退) 第六回卒業式舉行(二四名)</p> <p>四月十二日 (就) 末綱 卓一</p> <p>九月六日 (就) 三輪 益次</p> <p>九月二十七日 (就) 中山 貞次</p>	<p>二月十一日 (就) 第七回卒業式舉行(二一名)</p> <p>三月五日 (退) 片桐 克 (配)</p> <p>四月十一日 (就) 船山 博彦</p> <p>四月十八日 (退) 佐藤 徳雄</p> <p>五月二十三日 (就) 鐵守 尊邦</p> <p>六月三日 (就) 佐伯 昌延</p> <p>七月一日 (退) 森口 一江</p> <p>中島 勇</p>	<p>三月五日 (退) 第八回卒業式舉行(二七名)</p> <p>八月二十日 (就) 鈴木 光治 (配)</p> <p>十一月九日 (就) 永嶋 行雄 (配)</p>	<p>三月五日 (退) 第十四回卒業式舉行(三六名)</p> <p>三月三十一日 (退) 吉田小次郎</p> <p>四月一日 (退) 明星學園小學校を初等部と改稱し、國民學校令による認定學校として認可</p> <p>(就) 桑原 正三</p> <p>浦口善之助</p>



年	2 2 年 (1947)	2 1 年 (1946)	2 0 年 (1945)
	<p>三月二十一日 四月一日 三月二十一日 四月六日 七月 十一月七日</p> <p>第二十一回卒業式舉行(八 九名) (就) 寒川 道夫 (退) 龜井</p>	<p>一月八日 三月二十一日 六月三十日 十月一日 十一月二十五日</p> <p>(就) 善方 國男 高橋 保 中田伊佐夫 阿部 幸毅 第十九回卒業式舉行(五九 名) (退) 高橋 保 (退) 中田伊佐夫 (就) 龜井 松竹 室谷 幸吉</p>	<p>六月三十日 十月一日 十二月二十日</p> <p>(退) 高橋律之助 (就) 關口 常春 (退) 關口 常春</p>
	<p>三月十三日 四月 三月十三日</p> <p>(退) 赤井園長</p> <p><b>新制中學校</b></p> <p>舊制明星學園女學校を新制 中學校校舎として、男女共 學となる(第二十回生のみ) 照井猪一郎中學校長となる (退) 武田 勘治 (就) 原田 滿壽郎 (就) 伊藤 勉 (就) 角館 喜和 後援會及び母姉の會發足</p>	<p>一月 三月 四月</p> <p>(退) 館谷米利子 (就) 吉川喜美代 第十五回卒業式舉行(三四 名) (退) 戸塚二三枝 (退) 岸 すみれ (就) 山下 むつ 宮田今太郎</p>	<p>五月 六月 七月 九月</p> <p>第十四回卒業式(四年制三 二名) (退) 辻森 秀英 (退) 武田 勘治 (退) 神谷 廣子 (退) 平林 偕行 (退) 三輪 和敏 (就) 高須 いち</p>
	<p>三月五日 三月十三日 四月十日 五月十五日 七月</p> <p>第十五回卒業式(五年制) 「二五名」 (退) 赤井園長 (退) 三輪 伸雄 (就) 土屋 浩 後援會母姉の會發足す</p>	<p>三月三十一日 四月一日 四月十日 九月十六日</p> <p>(退) 末光 深海 第十五回卒業式舉行(四年 制十名) (就) 酒井 求女 (就) 宮城 瑞穂 (就) 藤田 弘 常直員 井上芳二郎 逝去</p>	<p>五月一日 六月十三日 六月三十日 七月十六日 八月十六日 九月十日 十月十日 十月二十日 十一月三十日</p> <p>第十四回卒業式(四年制三 一名) (就) 村本 起(配) (就) 平林 偕行 (退) 高橋律之助 (就) 二村 圭一 (就) 藤田 達夫 (就) 末光 深海 (退) 上田 八郎 (退) 二村 圭一 (就) 三輪 伸雄 (退) 藤田 達夫</p>
	<p>三月二十八日 三月 四月一日</p> <p>特別教室(二室)増築落成 第十六回(五年制)卒業(中 二六名)(女三二名) 卒業 式を行わず</p> <p><b>新制高等學校</b></p> <p>明星學園新制高等學校發足 (男女共學)</p>	<p>一月 二月 三月 四月 五月 六月 八月 十月 十一月 十二月</p> <p>年頭詔書發 SCAP軍國主義者の公職追 放指令 新團の換 勞組法施行 總選舉施行、幣原内閣倒る メーデー復活、吉田内閣成立 「イタリ」王制廢止 「パリ」外相會議 新憲法成立 「パリ」平和會議開かる 極東委員會、日本勞組の十六 原則採擇</p>	<p>四月 五月 七月 八月</p> <p>東京大空襲(西半焼失) 「ルー」ズベルト死去、トル マン大統領となる 小磯内閣辭職、日ソ條約廢棄 鈴木内閣成立 「ドイツ」降伏す 「ボツダム」會議 廣島に原爆投下 ソ對日宣戰布告 ボツダム宣言受諾 鈴木内閣辭職、東久邇内閣 米軍日本に進駐 降伏文書に調印 幣原内閣成立 SCAP四大財閥解体指令</p>





總計	計	女	男	學年	
414	100	53	47	一	小 學 校
	97	45	52	二	
	54	22	32	三	
	54	27	27	四	
	54	28	26	五	
	55	25	30	六	
297	100	49	51	一	中 學 校
	97	58	39	二	
	100	46	54	三	
259	87	40	47	一	高 等 學 校
	101	41	60	二	
	71	23	48	三	
970	970	457	513	計	

現在生徒數

小片木小吉	笠田
峠桐村	原良
幸大鉄	登
子一男一	登
舞英工音	體
踊語作樂	操
染清片宮羽	榎
谷水桐	田鳥本
誠正大	今文法
一高一郎	雄達
數英英生	物體
學語語物象	操
加岸高尾片宮大武角御小人	藤須崎桐田庭者館喜笠見澤
藤す	福み
れち殃一	子れ
園國家國英	園國
漢	漢
藝語庭習語物科會會語樂育育	

月  
星

